２０２３年３月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会

３月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１６日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、前回の審議会での答申を受け、「２０２３年度中部地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「２０２３年度中部地方向け地域放送番組編成計画」について報告があった。

続いて、東海　ドまんなか！「南海トラフ巨大地震　見えてきた新たなリスク命を守る行動とは」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、４月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	平本督太郎	(金沢工業大学ＳＤＧｓ推進センター長)
副委員長	榊原　陽子	((株)マザーリーフ代表取締役)
委　員	稲垣　貴彦	(若鶴酒造(株)取締役)
	遠藤　英俊	(名城大学特任教授)
	岡安　大助	(中日新聞社取締役)
	成島　洋子	((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)
	廣田　憲吾	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	水口　実穂	(Co-working&Community Space K.I.T 運営代表)
	安井　香一	(東邦ガス株式会社相談役)
	リムリーワ	(岐阜大学工学部教授)

（主な発言）

＜東海　ドまんなか！
「南海トラフ巨大地震　見えてきた新たなリスク　命を守る行動とは」
(総合　３月１０日(金)放送)について＞

○　命と暮らしを守るための４つのテーマが冒頭で分かりやすくまとめられていたのはよかったが、情報量が多く、理解できた部分とできなかった部分があった。全体的にポイントとなることばの説明が不足していたと感じる。「半割れ」は初めて耳にしたことばで、東と西で起きる半割れの違いや西の半割れに続いて起きるとされる東の半割れだけで約７万人の死者が出るという想定はどのように算出されたのかも詳しく知

りたかった。ＮＨＫが作成したハザードマップの英訳がなぜＲｉｓｋ　Ｍａｐなのかや、「スクラムで備える」の「スクラム」の意味が外国人には分かりにくいのではないかといった点も気になった。企業の拠点を被害想定地域から 500 キロ以上離れた場所に分散させることで経済被害を回避すると説明していたが、どれくらいの距離感なのかやなぜ 500 キロなのかが分からなかった。また、地域住民、自治体担当者、企業経営者が対策を協議する場面で、部屋の照明が暗かったためマイナスのことを話しているかのような印象を受けた。地震は個人に与える影響が大きいと思っていたが、企業の活動も多大な影響を受けることを改めて理解できた。自動車部品メーカーが拠点を分散することで生産体制を維持していたのはよい取り組みだと感じた。私自身はこれまで地震が少ない地域で暮らしてきたため、地震への備えについてあまり気にすることがなく、特別な準備はしてこなかった。番組では個人で備えることの大切さを伝えていたが、非常持ち出し袋の内容や食品の備蓄がどの程度必要かといった情報も知りたかった。

○　防災に注力し、人命を守ることに貢献することがメディアの役割であると審議会の場で伝えてきた。３月１１日に向けて「ＮＨＫスペシャル」で南海トラフ地震に関するドラマを放送し、東海地方でもこのような番組を放送したことは高く評価したい。ただ、２７分間に４つのテーマを取り上げており、詰め込み過ぎではないかと感じた。最後に取り上げた経済被害については別の機会で詳しく取り上げてほしかった。また、最初の半割れによる地震に続く、次の半割れによる地震への注意喚起も重要だが、まず最初の地震による被害をどうすれば減らせるのかをメディアがきちんと周知することがより重要だと思う。最初の地震だけでも東日本大震災の５倍もの被害が想定されているからこそ、個人個人に被害を減らす行動をとってもらうにはどうすればよいかを考える必要があると思う。いつ起きるか分からない災害に対して、起きることを前提にどう行動するかを考えられていない人が多いと思うので、まずは最初の半割れに対して個人としてどう行動するかを考えておくことの大切さを伝えたうえで、次の半割れへの注意喚起をした方がよかったのではないか。大きな津波が想定される沿岸部での取り組みを紹介したあと、沿岸から６キロ離れた名古屋市中川区周辺のささしまライブまで津波が来るとの注意喚起があったが、果たしてどれだけの住民がその危険性を認識できているのか疑問に思った。沿岸から離れた地域の人たちも津波の危険性を認識できていなければ、より多くの犠牲者が出る可能性がある。沿岸部の取り組みを紹介することも重要だが、その周辺地域の人々にも自分事として行動することの大切さを伝える必要があると思う。

○　私は北陸地方に住んでいることもあり、南海トラフ地震ということばは知っているものの自分事としては捉えられておらず、地域によって意識に差があると思う。東海

地方で、どれくらいの人が遠くない将来に南海トラフ地震が起きると意識しているのかを具体的なデータで示してほしかった。それがあれば、現状と今後どうしていくべきかが見えてくると思った。取り組みの事例として紹介していた避難訓練についても、参加人数や参加者の意識といった具体的なデータがなく、東海地方の人々が南海トラフ地震に対してどれだけ真剣に備えているのかがあまり伝わってこなかった。名古屋大学の福和信夫名誉教授を「南海トラフの名物先生」と紹介していたが、個人的には初めて知った。それだけでなく番組全体として南海トラフ地震について一定の知識があることを前提としているような部分があり、番組に入り込みづらいと感じることがあった。大規模災害の発生時、対応には限界があると考える行政と、行政頼みであったり自分事として捉えていない住民との間にある意識の差は、北陸にも共通するように思った。そうした状況において、地域のネットワークを取り戻すことが重要だと思う。市や町など従来の区分では過疎化や人口減少でうまく機能しなくなってきているので、新たなネットワークを構築する必要性にまで踏み込めると人々の意識や行動の変化につながるのではないか。また、南海トラフ地震臨時情報（巨大地震警戒）が出ると、２０万人以上が１週間にわたり事前避難しなくてはならないことは初めて知ったが、現実的に可能なのかや個人が判断して対応することに疑問を感じたので、番組内で問題点を指摘していたのはよかった。最後に取り上げた、命を守るだけではなく、経済活動をどう維持するかという視点は新鮮だった。被害が想定される地域から 500 キロ離れた場所に生産拠点を分散させるのはよい取り組みだと思ったが、中小企業でこのような対策ができる会社がどれくらいあるのか疑問に思った。どれくらいの企業が事業継続計画を策定していて、実際に被災した場合に経済活動を継続できるかをデータで示し、それに基づいてどうしていくべきかを提案してほしかった。

○　半割れのメカニズムとしてプレートが何回かに分けて動くと説明されていたが、従来から言われていることで新しい情報ではなかった。昨年３月の「ナビゲーション」で南海トラフ地震臨時情報を取り上げたが、分かりづらかったためか今回は半割れと臨時情報について再確認することがテーマのように感じた。名古屋大学の福和信夫名誉教授による熱のこもった解説はよかったが、福和さんが前面に出ておりＮＨＫとしての主体性があまり感じられなかった。ただ、これまでの防災がテーマの番組は総論的で建前や呼びかけが先行したり、過度に情緒に訴えるだけで具体性に欠けることが多かったが、今回は４つのテーマごとに、具体性や現実性があってよかった。「個が動く仕掛け作り」のテーマでは、個人が自分事として行動するきっかけとなる具体的な取り組みが紹介がされており貴重な一歩だと感じる一方、新型コロナの影響もあり地域のつながりが弱まっていることを考えると、課題も多くあるように感じた。津波の浸水想定を経過時間ごとに見られるアプリは非常によくできていると思ったが、発災時の混乱の中で操作できるのか、回線はつながるのかといった問題もあるので、事前

にイメージとして確認しておくためのツールであると感じた。行政担当者、地域住民、企業経営者が対策を協議する場面で、行政は“面”の対応はできても“個”はできない、住民はその逆であるなど本質に迫っていたと思う。福和名誉教授の「やれることを増やす」、「大事と言ってもらえただけでよかった」という現実的で抑制されたコメントもよかった。最後のテーマ「経済被害は“５００キロ”で防ぐ」で取り上げた自動車部品メーカーの例が適切だったかは少し疑問に感じた。個々の企業というよりは、基本的にはサプライチェーンの問題であり、新潟中越沖地震によるピストンリングの生産停止、新型コロナによる半導体不足、社会インフラの老朽化のリスクといった事例の方が適切だったのではないか。さらに、設備の維持においては、コスト面の理由から多くは事後保全となっているが、災害対策は予防保全の最たるものであり、コスト面だけで評価するのは難しいことにも言及してほしかった。

○　冒頭に震度分布のイメージ図や「ＮＨＫスペシャル　南海トラフ巨大地震」で使われたドラマの映像が入ることで、非常に具体性があると感じた。初めて知る単語も多かったが、防災において新しい知識を得ることは重要であり一人でも多くの視聴者に伝わればよいと思った。タイトルには「新たなリスク　命を守る行動とは」とあり、個人に向けた番組だと感じたが経済被害についてのテーマもあり、ターゲットが個人なのか企業なのかが曖昧になっているように感じた。私は北陸に住んでおり、南海トラフ地震について予備知識や危機感があまりない状態で視聴したため、大惨事になるという印象は受けたものの、あまり具体性を持って伝わってはこなかった。例えばハザードマップを活用して、どの地域まで危険が及ぶのか、視聴者が自分事として考えられる工夫があるとよかったのではないか。また、地震や津波のドラマの映像やイメージ映像を流す際に、ＰＴＳＤへの配慮があったのか気になった。テロップで注記があったのかもしれないが、ドラマの映像が非常に生々しく、被災者は突発的にこのような映像を目にするとショックを受けてしまう可能性があるので十分な配慮が必要だと思う。ＮＨＫならではの防災番組には信頼性があると思うので、今後も視聴者にとって有益かつ自分事と感じさせる番組を期待している。

○　「半割れ」ということばは、今年になって初めて知った。最初の半割れによる大きな地震に続いて、次の半割れによる地震が起きる可能性があり、その間隔が数時間から約２年と非常に幅を持って想定されていることなど新しい情報を多く得られた。情報量は多かったものの、冒頭で４つのテーマを示すことで情報を整理して見ることができた。特に、ＮＨＫの呼びかけで、地域住民や企業経営者、行政の担当者が協議の場を設けたことには意義があり、第三者が積極的に協議の場を作っていく一つのモデルになったと思う。ただ、その部屋の照明が暗く過剰に深刻な雰囲気になってしまっているのが気になった。また、番組の中で、ＱＲコード経由でさらに詳しい情報が得

られることを積極的に伝えていたのはよかった。ただ、「＃ＮＨＫ防災これだけは」という分かりやすいフレーズで標語のように覚えてほしいとの紹介があったが、それと完全に一致するものはＳＮＳでは見当たらなかった。静岡局のアカウントでも見当たらず、その他の地域で「＃防災これだけは」で検索できたものもあった。防災の番組は危機意識をしっかり持って見られる貴重な機会なので、使用するハッシュタグは統一して正確に伝えてほしい。取り上げていた町内会の取り組みは素晴らしいと思うが、役員の高齢化や地域のつながりの希薄化といった現状も感じられた。冒頭の街頭インタビューにあった「助かるかどうかは運」という声もあながち否定できず、自分で自分の身をどう守るか一歩踏み込んで考えなければならないと感じた。

（ＮＨＫ側）

地震や津波のドラマの映像やイメージ映像を使用する際にＰＴＳＤへ配慮すべきとの指摘はもっともだと思う。今回も制作の過程で議論を重ねたが、「地震や津波の映像が流れる」と表示したあとに、実際の映像ではないものが流れると誤解を招く可能性もあり、特段のことわりは行わないこととした。

取り上げる情報の整理やポイントの絞り込みについては、視聴者の関心がどこにあり、前提となる知識をどの程度持っているのかを考えながら制作しているが、もう少し改善できる部分もあったかもしれない。

○　半割れが起きた際に出される臨時情報の意味について再認識することができた。出演していた福和名誉教授は、コロナ禍による生活スタイルの変化も踏まえて個人・企業・行政・地域の対応について分かりやすく伝えていた。関係者同士の話し合いや実地での訓練が防災意識を高める最も有効な方法だと強く感じた。この番組を見て備蓄や避難先の確保など個人でできることを実行した人も多かったのではないか。過去の南海トラフ地震において、最初の半割れによる地震から次の半割れによる地震までの時間的な間隔に関する説明はとても納得できるもので、臨時情報を出す意味もよく理解できた。番組内で、地域住民や企業経営者、行政担当者などさまざまな立場の人が問題意識を話し合っていたが、このような対話は各地域でも行う必要があると思った。限られた放送時間の中で多くの情報を扱っており、個人の対応、スマートフォンで見られるハザードマップの活用、地域内での連携、企業のリスク分散という４つのテーマが取り上げられていた。全体を振り返ると、企業の対応例も個人が参考にできるなど４つのテーマが１つのサイクルをなしているように感じられた。ＮＨＫの最も重要な役割が国民の命と暮らしを守ることだとすれば、今はその重要性が高まっている時期だと思う。いくら警鐘を鳴らされてもそれに慣れてしまい、行動に移してこなかっ

たことを反省させられる内容となっていた。私自身も備蓄とハザードマップを改めて確認したし、企業や団体で行う災害対策訓練のやり方も見直す必要があると痛感した。

○　東海地方に向けた番組のテーマとして南海トラフ地震を取り上げたのは非常によかった。「半割れ」ということばもタイムリーだった。命と暮らしを守るための４つのポイントは分かりやすくてよかったものの、詰め込みすぎているようにも感じた。また、個人が行動する仕掛け作りや地域連携、企業のリスク分散といった観点だけで本当に十分なのだろうかと思った。学校や高齢者・障害者・認知症の人向けの施設における災害時の避難についても視聴者の関心は高いと思うので、引き続きこうした番組の中で取り上げていってほしい。平成３０年に愛知県が認知症施策推進条例を制定し、災害時に認知症の人の安全確保を進めていくことが盛り込まれたが、あまり具体的な動きになっていないと感じている。例えば、東海地方の高齢者施設などが被害を受けた際に北陸地方の施設に避難するといったシミュレーションをふだんから行うべきだと思うが、その段階にまでは至っていないように思う。ぜひＮＨＫにはいろいろな地域や施設における防災シミュレーションなど、この番組を発展させたものを作っていってほしい。被害が想定される地域から離れた場所に各企業が生産拠点を分散させることで経済被害を軽減することは大切だと思うが、もう少し地域の行政に動いてほしいとも感じた。積極的な取り組みを行っている自治体を丁寧に取材して紹介するなど、視野と取材範囲をもう少し広めてもよかったのではないか。

○　東海地方では大きな地震が起きると昔から言われ続けており、いつかは必ず起きると思ってはいるものの、それがいつなのかが分からない中で準備をしていくのは難しいと思う。そうした状況の中、地震への備えを促す番組は価値があると感じた。出演していた福和名誉教授の説明も分かりやすく、よい人選だった。地域での避難訓練を取り上げたのが特によかった。地域での避難訓練はとても価値があると思うが、これまで自分自身もきちんと参加してこなかったことに改めて気付かされた。さまざまな訓練の事例を紹介することで参加意欲も高まり、どう備えておけばよいのか分からない人にとっても役立つと感じた。南海トラフ地震臨時情報（巨大地震警戒）が出ると、対象地域の住民は１週間の事前避難が求められると知り、大変なことだと思った。労働者の安全を守りながら企業の活動を継続するためには、どのような対応が必要なのか考えていかなければならないと感じた。ＱＲコードで案内していたハザードマップは全国各地の情報を確認できる点がよかった。自分の住む地域だけでなく、家族や親戚が住んでいる地域も見られるので、有益な情報を提供していると思う。時間をかけてＱＲコードを表示していたのもよかった。「ＮＨＫスペシャル　南海トラフ巨大地震」のドラマの映像が使われていたが、この番組を見た時点で元となる番組を見返す方法がなかったのは残念だった。もう一度見られる何らかの方法があるとよいと思う。

また、地域住民や自治体の担当者、企業経営者による話し合いの場面で、部屋の照明がとても暗かったのも気になった。映画やドラマのような照明で、「ＮＨＫスペシャル」との関連を意識したのかもしれないが、過剰に暗い印象を与えていると感じた。番組の締めくくりを「これまでも乗り越えてきたことなので、これからも乗り越えていける」という福和名誉教授のコメントとしていたのは、希望が持ててよかった。

○　「ＮＨＫスペシャル　南海トラフ巨大地震」と連動し、東海地方に焦点を合わせた番組を企画したことが非常にすばらしい。この番組を見たあとに「ＮＨＫスペシャル」を見て再度この番組を見たが、「ＮＨＫスペシャル」を見たことで理解が大変深まったので、合わせて見るべきだと強く感じた。地域における対策として静岡市や名古屋市の事例を紹介していたのは非常によかった。地域ごとに取り組みの内容は異なると思うので、将来的にはＮＨＫと自治体が連携し、視聴者一人一人を自分の住む地域の情報へと誘導する仕組みができればよいと思う。番組では、全国の被害想定が確認できるハザードマップへと効果的に誘導していたと思う。同様に、さまざまな情報へと誘導できれば、ＮＨＫが“役に立つ情報の入り口”になりうると思う。番組では、経済被害を減らすために、企業の拠点を分散させることや部品調達などの物流は広範囲で連携して確保する必要があると指摘していた。南海トラフ地震は太平洋側だけでなく日本海側にも関係しており、北陸の人にとってもひと事ではないと改めて気づかされた。しかし、「東海　ドまんなか！」と同じ時間帯で北陸の各県では「ＮＨＫスペシャル」と連動した番組は放送されておらず、全国にネットワークを持つＮＨＫの強みを生かせていないと感じた。公共放送は国民全体の意識変容に強い影響力があり、このような人命を守る取り組みは民放には難しい部分があると思う。今回、全国向けの大規模な呼びかけとなっていたこと自体は評価するが、関係する地域とそうでない地域を主観的に分けているように感じられたのは残念だった。番組内で、これまでの南海トラフ地震では北陸でも関連する地震が起きたことがあり注意が必要だと指摘していたにもかかわらず、北陸地方では関連番組の放送がなかったのは、ひと事との印象を助長してしまうと感じた。東海と北陸で異なる視聴者のニーズにきめ細かく対応するのはよいと思うが、こうした大規模災害については各局で連携するなどテーマごとに適切に切り替えていくことも必要ではないか。

○　「半割れ」という初めて耳にすることばの説明や、地震や津波のイメージ映像などを交えながら、どう対策すべきかを具体的に解説していくことで臨場感が増し、見る人の危機感が非常に高まる有益な番組だった。個が動く仕掛け作りについては、津波による浸水被害の想定が経過時間ごとに見られるハザードマップなど新しい情報があり非常に参考になった。障害のある人もきちんと取り上げようとする姿勢が感じられ、非常に配慮されていると感心した。「ＮＨＫスペシャル　南海トラフ巨大地震」のドラ

マでは、俳優の鈴木保奈美さんが首相を演じていてジェンダーに対する配慮も感じられ、総合的に多様性が意識されていたと思う。ただ、「(名古屋市中川区周辺の) ささしまライブまで津波！」という標語は地元の人には危機感が伝わるのかもしれないが、映像で表現した方が視覚的な迫力があり、より実感を持って伝わるのではないか。ドラマで使われていた映像のように、愛知県、三重県、静岡県で津波が起きた際のイメージ映像があるとよかった。また、生放送である必要性があったのかも気になった。名古屋大学・福和名誉教授の「半割れによる地震は、東と西のどちらかだけでも東日本大震災の５倍の被害が想定される」という説明には大変な衝撃を受けた。あまりに衝撃的だったため巻き戻して確認したほどだが、生放送のためコメントのみでテロップは付いていなかった。重要な情報はテロップで文字としても表示してほしいと感じたので、事前に収録して編集してもよかったのではないか。制作する側にとって、生放送と収録して編集するのとではどちらが負担になるのか気になった。

（ＮＨＫ側）

今回は東海４県に向けた放送だったため北陸視点の情報はあまり取り込めなかったが、直接的な被害だけでなく物流や生活への影響、相互の支援体制など密接に関係しているので、広い視野で伝えることも意識していきたい。

地域住民や自治体の担当者、企業経営者による協議の場面で照明が暗かったのは、部屋の壁が白く、照明を明るくすると背景が白くなりすぎてしまうからだ。見る人に誤ったイメージを持たせてしまうことのないよう、今後も撮影方法や映像の表現に配慮していきたい。

今回のテーマは、放送の直前に新しい情報や動きが出てくるものではなかったので、事前に収録することもできた。しかし、番組内で使用する映像の制作や福和名誉教授と最新の情報を打ち合わせるスケジュールなどを考慮して生放送とした。

＜放送番組一般について＞

○　２月１７日(金)の東海　ドまんなか！「ＴＡＲＯＭＡＮ、東海に現る ～岡本太郎式東海旅～」を見た。「ＴＡＲＯＭＡＮ　岡本太郎式特撮活劇」を監督した藤井亮さんがタローマンとともに、東海地方に残る岡本太郎の作品を巡っていた。大阪万博の「太陽の塔」へとつながる「若い太陽の塔」や「未来を拓く塔」などが紹介され、知らないことも多く興味深く視聴した。番組内では「ＴＡＲＯＭＡＮ」の映像が挿入されて

いたが、現代の特撮戦隊シリーズのように洗練されたものではなく、草創期の特撮作品のような稚拙さがあり逆に新鮮に感じられた。古い映画など懐かしい映像を見ながら思い出を語り合う回想法の最たるものだと思う。名古屋局で開催していた「展覧会タローマンｉｎ名古屋」の展示も見たが、古いものではなく新しいものとして受け止めた。岡本太郎がパブリックアートなどの作品に注ぎ込んだエネルギーを感じることができた。この１か月ほどの間に岡本太郎に関する番組や展覧会に数多く触れたが、芸術に対するモチベーションやテーマの重要性を感じた。彼が残した作品やことばに触れることで、人生に芸術はなくてはならないと思い至る番組だった。

○　２月１７日(金)のＵＰっぷ富山　きとラボ「建築家・隈研吾　富山を語る」(総合後 7:30～7:57 富山県域)を見た。建築家の隈研吾さんは富山との縁が深く、富山県内にゆかりの施設が多数ある。テレビのような小さい画面だと建築のスケール感やテクスチャが表現しにくいものだが、この番組は映像表現にこだわり大きさやザラっとした質感などがよく伝わってきた。「ＴＯＹＡＭＡキラリ」という複合施設は吹き抜けが斜めになりながらつながっていく特色ある建物だが、ドローンを上昇させながら撮影することで連続的でありながらそれぞれが異なる空間であることを見せることに成功しており、特に優れた映像表現だった。隈さんは木材を使った建築のイメージが強かったので、高岡銅器発祥の地である金屋町でアルミ製の棚を作ったことが富山との縁の始まりだったと知り、新鮮に感じた。建築は素材がとても印象的に使われるものだと思う。富山県にはアルミやガラス、木、わら、和紙など文化的背景や伝統のある素材が多数ある。そういった素材を取り込んだ建築を通じて、富山のモノづくりや伝統などをかみ砕いて伝える興味深い番組になっていた。今後、建材をリサイクルしたり、建築家というプロではなく地域住民などが建築をシェアしたりしていくような思想は、かつての巨大建築や高度経済成長期の箱物などへのアンチテーゼとなっており、富山県のこれからのあり方や魅力を世界的建築家の目を通して新たに発見できる非常によい番組だった。

○　２月２４日(金)の東海　ドまんなか！「新酒シーズン到来！世界に誇る東海の日本酒！大特集」(総合 後 8:00～8:43　東海３県ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。藤井彩子アナウンサーの飲みっぷりやスタジオのリラックスした雰囲気は、お酒を飲みながら見ている人の気分によく合っていたと思う。ただ、スタジオセットのこたつは安普請のように見えて少し残念だった。また、鈴鹿市の酒蔵の日本酒を紹介していたが、伊勢志摩サミットの乾杯酒として使われたのがきっかけで有名になったと記憶している。同様のきっかけで有名になった日本酒は数多くあり、サミットについて触れていなかったのには違和感があった。グラフの横軸をアルコール飲料の１人あたり消費量、縦軸を日本酒の１人あたり消費量とし、都道府県ごとにプロットした表を使って地域ごとの違いを説

明していたが､東海地方ではあまりお酒が飲まれていないことが分かり興味深かった。伊勢神宮にほど近いおはらい町にある酒販店でのインタビューを入り口として、三重県内の酒蔵で造られる日本酒の紹介へと進む構成はよくできていたと思う。データによる品質管理や新たな酵母の開発、利き酒を繰り返し、データと照合しながら不要な香りや味を消していく行程はおもしろいと感じたが、藤井アナウンサーが利き酒を体験するシーンでは何を比べているのかが分かりにくかった。名古屋国税局の主任鑑定官による甘辛度や濃淡度の解説は非常におもしろく、日本酒選びの参考となるものだった。新しい日本酒の提供形態として、店員から解説やアドバイスを受けられる立ち飲み屋や日本酒専門のバーなどを紹介し、スタジオでの日本酒カクテルの試飲や日本酒に合う料理の試食もあり、豊富な情報が４３分間に凝縮されていた。その情報量を支える取材もしっかりされていると感じたが、話題が多岐にわたりすぎて若干散漫な印象も受けた。

○　２月２４日(金)の東海　ドまんなか！「新酒シーズン到来!世界に誇る東海の日本酒!大特集」を見た。金曜日の夜７時３０分に家族で楽しめる番組だった。生放送ならではのライブ感があり、心地よいほろ酔い加減や出演者の楽しい雰囲気がよく伝わってきた。生放送での飲酒には失言の恐れがあるとも感じたが、今回の出演者は失言どころか気の利いたコメントばかりですばらしかった。非常に楽しい番組だったので、日本酒だけではなく、クラフトビールや地域のワインなどの続編も見てみたいと思った。藤井彩子アナウンサーの現場リポートがすばらしく、日本酒造りの臨場感や芸術的な繊細さがよく伝わってきた。途中、三重県酒造組合の映像が部分的に紹介された際、注記のテロップの表示時間があまりに短く、巻き戻して確認しなければならないほどで不親切だと感じた。日本の文化を維持することの難しさや日本酒が高級なしこう品となっていることには驚いた。かつての日本酒はしこう品というよりも日常生活とともにある存在だったが、日本酒を使ったカクテルなど新しい楽しみ方が生まれつつあると知った。今後、日本酒の生き残りには量ではなく質の追求や、海外展開が必要であることも分かった。人口減少や文化の移り変わり、グローバル化などの要因もあると思うが、日本の文化を国内だけで維持することの難しさや限界を感じた。

○　３月３日(金)の東海　ドまんなか！「ドリーム★ネイバーズ　夢応援バラエティ～夜間学級　生徒たちの願い～」を見た｡名古屋市にある中学夜間学級に通うフィリピン出身の原口ジョベリンさんの「クラスメートと交流を深めたい」という夢を応援する番組で非常によかった｡外国から日本に来た人たちは心細くさみしい思いをしながら、ことばの壁もある中で苦労して暮らしており、心のつながりを求めていることがよく伝わってきた。サブタイトルに「夢応援バラエティ」とあるが、真面目なことを真面目に取り上げた番組なので、単に「夢応援番組」とした方がよいのではないか。学級

会を利用して交流を深める場面があった。ＮＨＫの取材がきっかけで実現したのか、もともとあった取り組みを取材したのかは分からなかったが、いずれにしても地域の取り組みを密着取材することでその周辺にも盛り上がりが広がり、よい効果をもたらしていると思う。厳しい状況にある人を取材し、取材がきっかけとなって周囲も協力していこうとする様子には、メディアやＮＨＫの力を改めて感じた。日本にいる外国人の実情をもっと知り、日本人側も何ができるか考えていく必要があると思うので、こうした番組を続けていってほしい。

○　３月３日(金)の東海　ドまんなか！「ドリーム★ネイバーズ 夢応援バラエティ～夜間学級 生徒たちの願い～」を見た。番組の中で短く紹介されていたが、日本語指導が必要な外国籍の生徒数は愛知県が全国で突出して多いのに対し、サポートする語学相談員の数があまりにも少ないと感じた。別の機会にこうした問題についても掘り下げて伝えてほしい。

○　３月４日(土)の英雄たちの選択「家臣団分裂！若き家康・最大の試練　～三河一向一揆の衝撃～」(総合 後 3:50～4:49 東海３県・静岡県域)を見た。ＢＳプレミアムで放送した番組を東海地方向けに放送したものだが、私の地元が舞台となっていることや大河ドラマ「どうする家康」で３回にわたり三河一向一揆がテーマになっていたことから､興味を持って視聴した｡土塁など寺を守るための仕組みや矢作川の水運によって寺内町が栄えたこと、寺にまつわる地元の地名の由来などがよく分かった。不入の権や家康と一揆勢との和睦、その後の対応といった史実には知らないことも多く、非常に興味深かった。番組の中で、英雄はどちらの道を選択すべきかスタジオの出演者がそれぞれの考えを述べる場面があった。大河ドラマで家康が選択を迫られるシーンと関連づけながら、追い詰められた状況や人生の重要な岐路において決断を下す際、人間が何を大切に思い、何を求めて行動するかを考えさせられた。

○　３月４日(土)のＮＨＫスペシャル　南海トラフ巨大地震「第１部　ドラマ」(総合 後 7:30～8:48、後 10:00～10:54)、５日（日）の「第２部　“最悪のシナリオ”にどう備えるか」(総合 後 9:00～9:59)を見た。二夜連続でしっかり作り込まれたドラマとスタジオでの解説を組み合わせ、南海トラフ地震について伝える番組はＮＨＫならではだと思う。まさに新しいＮＨＫらしさの象徴と思えるものだった。番組がすばらしかったからこそ、単に番組として扱うだけではもったいないと感じられ、今後の展開が気になった。効果的に展開すれば、ＮＨＫが国民に寄り添った身近なメディアになるための有効なツールとなりうるのではないか。子どもと一緒に視聴したが、子どもが自発的にＱＲコードを読み込み、ハザードマップを使い始めた。一般的に子どもにとっては面白みのないハザードマップを主体的に楽しみながら見るという行動変容

を促しており、非常にすばらしいと思った。全国の教育現場では、総合や探究の時間に何をすればよいか困っていると耳にする。こうした状況において、例えばＮＨＫが今回のドラマの映像を活用して学校ではどう避難するか計画を立てるところまで一貫したパッケージを提供すれば、若者とＮＨＫとの接点になると思う。そういった接点を通じて、災害時にＮＨＫは頼りになるという意識が根づくのではないか。テレビ離れが進む中、教育機関などと連携して若者との接点を作っていくことが重要になると思う。ぜひ教材化など教育との連携を視野に入れた取り組みを検討してほしい。

○　３月１１日(土)のぎふスペシャル「第２０回全日本学生落語選手権　策伝大賞」(総合 前8:15～8:58 岐阜県域)を見た。落語にあまり興味のない人や詳しくない人でも理解しやすいようにうまくポイントを押さえた編集となっていた。岐阜に住んでいる人でも、岐阜市生まれで“落語の祖”とされる安楽庵策伝という人物を知らない人は多いと思う。より多くの人に知ってもらうためにも、番組のＰＲにもっと力を入れるとともに、多くの人が見やすい時間帯に放送した方がよかったのではないか。また、策伝の人物像や落語の起源についてもう少し詳しく知りたかった。落語という日本が誇る伝統芸能を若い人に広め、守っていくことは大切だと思う。漫才コンテストの出場者が増えていると聞くが、落語家を目指す人の数も気になった。

○　３月１４日(火)のクローズアップ現代「空前の“短歌ブーム”が映すもの　令和の歌に託した思い」を見た。若い世代を中心に自ら詠んだ短歌をＳＮＳに投稿し、つながりあう人が増えていると伝えていた。番組でもインターネットで短歌を募集し、歌人・東直子さんが選歌して番組内やホームページで紹介するなどＳＮＳとの連動がよくできていたと思う。放送後も引き続き短歌を募集するという誘導があったのも非常によかった。放送後、同世代の知人の何人かがＳＮＳ上でこの番組について言及しているのを目にした。今回の番組には、ふだん特定の番組について言及することが少ない世代の胸にも刺さるものがあったのだと感じた。この番組に限らず、ＮＨＫはＳＮＳとの連動に注力していると思う。最近一部のＳＮＳを取りまく状況が不安定との報道もあるため、ＮＨＫとして今後の活用方針が決まっているのであれば知りたい。

○　「魔改造の夜」について。子どもがいるため、子どもと大人が一緒に楽しめるような番組をよく見るが、これは本当におもしろい。誰もが知っている大手企業が参加しており、さすがＮＨＫだと思わされた。何かを解体し構造を変えて新しいものを作り出す過程が子どもの興味を引き付け、探究心を育んでいると感じている。テロップの出し方や作業工程の説明が丁寧で飽きずに見ることができ、映像やカメラワークにもこだわっており臨場感もある。いつもエンターテインメント性が高い番組だと思いながら視聴している。名言集や制作の裏側を語るトークショーなど派生番組が用意され

ていることにも好感が持て、まとめて見たくなる。ぜひ過去の回も再放送してほしい。

○　放送やＮＨＫプラスだけでなく、動画投稿サイトにもＮＨＫのコンテンツが多く掲載されていることを知った。南海トラフ地震に関する「ＮＨＫスペシャル」のドラマも一部だが見ることができた。今後もさまざまなメディアを通じてＮＨＫの持つすばらしいコンテンツを発信し、その魅力を伝えていってほしい。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

２０２３年２月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会

２月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１６日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、８人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、「２０２３年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」についての報告があった。引き続き、「２０２３年度中部地方向け地域放送番組編集計画(案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。

続いて、ザウルス！今夜も掘らナイト「福井　冬のごちそうで“勝手に”新ご当地鍋」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、３月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委　員　長	平本督太郎	（金沢工業大学ＳＤＧｓ推進センター長）
副委員長	榊原　陽子	（(株)マザーリーフ代表取締役）
委　　員	大西かおり	（特定非営利活動法人 大杉谷自然学校　校長）
	岡安　大助	（中日新聞社取締役）
	成島　洋子	（(公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長）
	廣田　憲吾	（愛知県農業協同組合中央会常務理事）
	安井　香一	（東邦ガス株式会社相談役）
	リムリーワ	（岐阜大学工学部教授）

（主な発言）

＜「２０２３年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について＞

○　各波の特徴や役割について説明があったが、一般の人に向けて周知や認知促進につながる取り組みはしているのか。波ごとの特徴を広く知ってもらえると、ＮＨＫの活動への理解や各波への愛着も深まると思う。

（ＮＨＫ側）

広報番組などを通じて改定のポイントを説明していくが、その際に各波に愛着を持ってもらえるような工夫を盛り込めるよう、議論していきたい。

○　「ＮＨＫ地域局発」を平日午後２時台に移設するなど、平日午後は地域情報を全国発信するゾーンとして強化するとのことだが、総合テレビの地域放送時間は１日３時間程度で今年度と同程度との説明があった。ＮＨＫの地域放送番組は平日午前１１時台と午後６時台、金曜午後７時台というイメージだが、平日午後２時台などが増えた分だけ別の時間帯の地域放送番組が減るということなのか。

（ＮＨＫ側）

地域に向けた番組の放送時間が減るわけではない。平日午後２時台は、各局が制作した金曜午後７時台を中心とした番組を全国向けに放送することで、地域が違っても共通する課題やテーマについて学びや気づきを得てもらうことを意図した編成としている。

＜「２０２３年度中部地方向け地域放送番組編集計画（案）」について＞

○　基本方針に「命と暮らしを守る公共メディアとしての役割を果たす」とあるように、日頃から防災情報の発信や災害時の指針の提供、訓練のきっかけとなる報道をしていると思う。災害リスクの回避や復旧・復興につながる報道を心がけていることもよく分かった。災害情報は現地の情報をどのリソースから入手するかが大事だと思う。個人が撮影してＳＮＳで発信した画像も増えているが、ＮＨＫでもＡＩや人の目でその信頼性をチェックしていると聞いた。今後は、より情報のリソースが多様化していくと思うので、公共メディアとして正確な情報を迅速に届けていってほしい。また、日頃から民放やケーブルテレビ各社､行政とのネットワーク作りを進めていってほしい。災害情報は非常に関心が高いので、各メディアが得意とする情報提供の形や、活用法を紹介するなど､いつ･どこで･どのような情報が得られるかも積極的に発信していってほしい。

○　災害対策やライフラインの確保において、いかに貢献していくかは各局共通の方針だと思った。１月下旬の寒波による大規模断水の際、金沢局ではライフライン情報を伝えることで視聴者から多くの感謝の声が寄せられたとのことだったが、まさにＮＨＫの存在意義を示していると思う。私の世代では「何かあったらＮＨＫをつけろ」と親から言われてきたこともあり、意識に染みついている。しかし、自分の子どもにそう言い聞かせているかというと必ずしもそうではない。テレビ離れが進む中、災害時に何から情報を得るかの判断基準は非常に不明確になってきていると感じる。家庭や

学校など教育の場を通じて伝えることも必要だが、ＮＨＫと連携してそうした意識の浸透を図ることも必要だと思う。この点について、中部地方全体もしくは各局において具体的な計画や取り組みがあれば共有してほしい。

（ＮＨＫ側）

各局でも同様の取り組みをしていると思うが、金沢局では県の防災士会と連携し、県内１０か所ほどで防災イベントを実施してきた。来年度も、各自治体から実施依頼が来ており、地元のケーブルテレビとも連携しながら進めていくことにしている。イベントは小さな子どもから子育て世代を主な対象にしており、楽しく学びながら、幼いころから自分ごととして災害対策を考えてもらえるような内容となっている。

○　すでに各局でさまざまな取り組みをしていると思うが、信頼の厚いＮＨＫ各局に引き続き活動していってほしい。

○　諮問された「２０２３年度中部地方向け地域放送番組編集計画(案)」については、各委員の意見の趣旨が番組編成に生かされることを前提に、原案を可とし、答申をしたい。

○　異議なし。

（ＮＨＫ側）

答申を受け、このあと具体的な地域放送番組編成計画について決定し、３月の審議会で編成計画についてご説明したい。

＜ザウルス！今夜も掘らナイト「福井　冬のごちそうで“勝手に”新ご当地鍋」
（総合　１月２０日（金）放送）について＞

○　番組として何を最も伝えたいのかが分かりにくかった。ガマエビや里芋といった食材の魅力なのか、それを使ったレシピなのか、レシピを考案する料理研究家の腕前なのかつかみきれなかった。食材を紹介した漁業者や農家の人に、番組で考案した鍋を食べてもらいご当地鍋として認定できるかどうか聞いていた。ＭＣのパックンさんがスタジオからツッコミを入れていたように、ご当地料理の定義は何なのか、何をもって認定されるのかが分からなかった。ご当地料理への認定というラベル貼りによって盛り上がりを作ろうという、非常にテレビ的な構成だと感じられ、制作者が内輪だけで楽しんでいるような印象を受けた。深海魚の販売をしている知人が「漁業者の中にはシャイな人がおり、毎日顔を見せてコミュニケーションを取ることで今の関係性を構築できた」と話しているのを聞いたことがある。しかし、この番組では市場で働く漁業者にいきなり話しかけようとしてあしらわれ、やっと対応してくれた人の紹介で幻のエビを見つけていた。そのプロセス自体をテレビ的な演出にしてしまっていると感じ、気になった。

○　全体としてよい番組だったと思うが、民放も含めて数多くある「食」をテーマにした番組と比較するとインパクトが足りないように感じた。リポーターのお笑い芸人・会田勇人さんの自然なボケやＭＣ・パックンさんのツッコミは番組に一体感を醸し出していた。食材の映像とその食材にちなんだＢＧＭを合わせているのも分かりやすくてよかった。演出だとは思うが、幻のエビを知っている漁業者にたどり着くまでの過程で、いかにも突然取材したかのような雰囲気を出していて楽しめた。地元の人の「食べさすか」ということばを初めて耳にし、丁寧なことばだと想像したが、テロップなどで解説があればよかったと思う。大野市の上庄地区では薄皮だけにした里芋から食べられない部分を取り除く作業を「修理」と呼ぶことを知り、勉強になった。食材の特徴をよく紹介していて、「掘らナイト」という番組名のように深く探求していく努力が感じられた。「食」という万人共通の関心事を通じて、地域の文化や暮らしぶりまでを伝える興味深い構成だった。

○　金曜の午後７時３０分という時間帯に、食事を終えてのんびりしながら楽しめるよい内容だったと思う。地域の旬の食材と郷土料理という組み合わせは、確実によく見られるものだと思う。民放にも類似の番組が多く、ＮＨＫでいえば「うまいッ！」と同じような感覚で見られる、おもしろい番組だった。紹介していたガマエビは限られた時期にしか水揚げされないのは確かだろうが、「幻のエビ」とまで言えるのか気になった。近隣の各地で水揚げされ、いろいろな名前で呼ばれているにもかかわらず「幻」

と言うのはかなり大げさだと思う。また、番組で開発したレシピを、わざわざご当地鍋に認定する必要はなく、料理研究家の田中佳子さんが「こう工夫すれば、このようにおいしく食べられる」と紹介するだけでよかったのではないか。田中さんはトマトピューレや生クリームを使っていたが、年代によってはシンプルにだしで味わいたいという人もいたのではないか。全体を通じてＭＣのパックンさんのツッコミが非常によかった。特に、田中さんが芋やエビの殻を潰しているのをリポーターの会田さんが手伝わない様子に上手にツッコミを入れていてとても楽しく見られた。

○　福井の揚げ物のように、民放も含め何度か取り上げられ、すでに広く知られたものではなく、斬新なご当地鍋を作ろうというテーマは県外の人だけでなく地元の人でも楽しめたのではないか。紹介されていた料理は大変おいしそうで、「きょうの料理」ほど手軽ではないが挑戦できるレベルでぜひ試してみたくなった。幻のエビについて競り直前の市場で漁業者に聞き込みをする場面は、演出だったのかもしれないが、忙しく働いている人に迷惑をかけているようにも見えた。日本人には、人の迷惑になることはやるべきではないという国民性があると思う。民放や動画配信サービスの番組であれば、受け狙いでこのような演出がされることもあるかもしれないが、ＮＨＫとしては不要だと感じた。社会通念上、迷惑だと感じさせる行為を放送することで、おもしろければ何をしてもよいと感じる人が増える危険性があるのではないか。どうしてもこのような演出をしたいのであれば、一度断られた時点で「これは迷惑でしたね」とすぐに反省して引き下がるといったシーンを入れることで「迷惑をかけてはいけない」と伝えることもできたと思う。番組を通じて、そうした注意喚起にも取り組んでいってほしい。リポーターの会田さんは試食の合間に話す際にマスクの着用を徹底しており、とても真面目な人柄が伝わってきて好感が持てた。一方、マスクをせずに話す出演者もいたので、事前にルールを決めて出演者と共有しておけばよかったのではないか。

（ＮＨＫ側）

市場での聞き込みの場面の演出は、撮影の構成を考える際や撮影後の編集の過程でもディレクターと検討しながら決めた。パックンさんのツッコミが番組全体の魅力だと考えているため、突っ込んでもらえる場面をどう入れるかを意識している。市場の場面では「もっと頑張って聞き込め」などと突っ込んでもらえるのではないかと考えてあのような演出としたが、働いている人の迷惑になっているように見えてしまうこともあると改めて感じた。番組のメッセージとしては、福井県民にもあまり知られていない魅力的な食材を掘り起こすことを中心とし、見る

人に楽しんでもらえる仕掛けとして、寒い時期に合わせてオリジナルの鍋を作ることにした。その意図が十分に伝わらなかった部分もあるかもしれない。調理や試食の場面があったため、話すときには基本的にマスクを着用すると決めていたが、徹底できていなかった。マスクの着用については、社会状況や人々の意識の変化を見ながら、適切に対応していきたい。指摘された点は、次回以降の番組制作に役立てていきたい。

○　パックンさんに「迷惑をかけてはいけない」というツッコミをしてもらうことで、その行動の是非が視聴者に伝わるようにしてもらえるとよいと思う。また、番組をよりよくしようと試行錯誤を繰り返すことで、シンプルさがなくなり、最も伝えたいメッセージが視聴者に伝わりにくくなってしまうことはよくあると思う。その点も意識しながら番組を制作していってほしい。

○　料理研究家の田中さんとお笑い芸人の会田さんが旬の食材を探しご当地鍋を作っていたが、会田さんは調理の場面で腕力のいる作業でも手伝うことなく、役割がほとんどないように感じた。不思議に思ったものの、スタジオのパックンさんからツッコミがあることで、おもしろく見ることができた。越前漁港の場面では、ブランドを示すタグが付いたカニが並んでいる割には盛り上がりに欠けているように見えた。収録の都合上、市場が最も忙しい時間帯を避けたのではないかと感じた。最近は民放も含めて「食リポ」が、リアクションや表情、感想を伝えるワンフレーズなど、タレント各人の芸の領域となっており、どのような味なのか、本当においしいのかよく分からなくなっているように思う。今回は新しいご当地鍋の開発と組み合わせることで、しっかりと説明するレポートとなっており、どのような味なのかも伝わってきた。その点には好感を持ったが、おもしろみには欠けていたので、さじ加減がなかなか難しいと思った。ご当地鍋のレシピについて、非常に凝ったガマエビのダシの作り方など丁寧に解説されていてよかった。地元の誇れる食材を使って地域の人においしい鍋を楽しんでもらおうという番組の目的は果たされていたと思う。

○　初めて見る番組だったが「ザウルス！今夜も掘らナイト」というタイトルに興味を引かれた。福井県といえばカニのイメージが強く、恐竜や眼鏡、幸福度ナンバーワンといったものを思い浮かべるが、今回取り上げたガマエビと里芋には意外性があった。越前漁港の市場の場面では、個人的には働く人の邪魔をしているようには感じず、忙しい中でもわざわざ食材を紹介してくれたという印象の方が強かった。「幻のエビ」と表現されていたが、具体的な漁獲量や漁期に関する情報があるとよかった。また、エビのサイズ感があまり伝わってこなかったので、一般的に知られているエビと並べて

比較すればより分かりやすかったのではないか。個人的にはエビは生で食べるのが一番だと思っているが、もし加熱することでアレルギー性物質が減り、アレルギーがある人も食べられるといった情報があれば、安心して口にできる人も増えるのではないか。番組の副題にもあるように「勝手に」ご当地鍋に認定する演出となっていたが、食材を紹介してくれた地元の人が１人で認定してよいのか疑問に思った。例えば、自治体の長など地域を代表する人に認定してもらえれば説得力が増すと感じた。あるいは、視聴者がリモコンのｄボタンで認定するかどうか投票するというのも一つのアイデアだと思う。

○　ガマエビも上庄の里芋も知らなかったため、新しい知識が得られ楽しく見ることができた。以前、この番組を視聴した時にも感じたが、スタジオの２人の雰囲気が非常によかった。スタジオの雰囲気のよさが番組全体の温かさにつながっていると感じた。「幻のエビ」という表現には違和感があった。ガマエビやガスエビなどの名称で呼ばれていることから、あまり珍重されていないような印象を受けたので、「幻」ということばとは意味合いが違うと感じた。もっとふさわしい表現があったのではないか。番組で「勝手に」ご当地鍋を作っていたが、認定の仕方が本当に勝手だと感じた。ただ、パックンさんの「勝手ですね」というツッコミがあったことで“分かったうえで勝手にやっている”という部分の説明になっていたと感じ、非常に重要だったと思う。漁港の人たちへの聞き込みで迷惑そうにされる場面でも、パックンさんのツッコミがあることで視聴者は安心して見られると感じた。ご当地鍋はとてもおいしそうで、作ってみたいと思ったが、材料は紹介されていたものの詳しいレシピはなく、インターネットでも見つけられなかった。興味を持った視聴者がすぐに作れるように、レシピがどこに掲載されているかを分かりやすく伝えてほしかった。

○　全体を通じて温かな気持ちになる番組で非常によかった。寒い時期でもあり、鍋をテーマにした番組が金曜の午後７時３０分に放送されることは非常にうれしく思った。ガマエビが「幻のエビ」と呼ばれる理由の説明があったのはよかったが、「幻」という表現がふさわしいのかは疑問に感じた。地元の人なら存在は知っているが、詳しくは知らないガマエビを紹介するとしたほうが、素直でふさわしい取り上げ方だったのではないか。また、料理する場面の映像が伝統的な作り方になっていると改めて感じた。動画投稿サイトなどで若者が見慣れている映像は、料理の過程を最初から最後まで通しで撮影したものを倍速で見せる作りになっていることが多い。若者にはそのような映像の方がなじみがあるのではないか。今回の番組の映像が悪いということではないが、料理の映像における一般的なイメージが変わってきていると思う。例えば、動画投稿サイトに今回の料理を作っている様子を倍速で見せる映像を掲載すれば、よりよいサービスになるのではないか。

○　ガマエビと上庄の里芋をよりおいしく食べられるレシピが紹介されていたが、番組の流れが単調に感じられた。食材そのものの魅力を紹介する番組なのか、料理番組なのか、それとも地域の魅力を発信する番組なのか、コンセプトが分からず、中途半端な印象だった。地元でも珍しいとされる食材を番組で取り上げても、地元以外の人には入手困難だと思われ、違和感が残った。

○　映像が美しく、非常に魅力的だった。地域ごとに異なるガマエビの呼び方など詳細な情報もあり、新たな知識が得られた。また、漁業者や農家の人たちも飾らない感じがよく、見ていて優しい気持ちになった。放送の時間帯も含め、家族で楽しめる番組だったと思う。お笑い芸人と料理研究家の組み合わせで食材を探し、ご当地鍋を作るという構成に目新しさを感じた。また、二人のレポートからは実際に食べたときのイメージが湧いてきてよかった。越前漁港の場面では、生き生きとした活気が伝わってきて、競りの様子もよい意味でそのまま映し出されていたのがよかった。番組で紹介されていたガマエビや里芋はどこで購入できるのかという情報もあるとよかったのではないか。

（ＮＨＫ側）

「幻」という表現は、もう少しふさわしいものがあったかもしれない。また、料理の映像が伝統的な作り方になっているとの指摘には考えさせられるものがあった。今後、より工夫ができるよう検討していきたい。「勝手に認定」したことについては、食材を紹介してくれた農家や漁業者の方に認定してもらうことにしたが、「勝手に」という表現を含め視聴者に対して不親切だったかもしれない。リモコンのｄボタンを使用して視聴者に投票してもらうアイデアは今後の参考としたい。

＜放送番組一般について＞

○　１月１４日(土)のＮＨＫスペシャル「住宅地に潜む“盛土リスク”　阪神・淡路大震災 残された課題」を見た。防災プロジェクト「命をまもる　未来へつなぐ」シリーズの初回で、災害対応に力を入れていることがよく分かった。熱海市で盛土の崩落があったこともあり、多くの盛土が悪意のある危険なものだという世間一般のイメージがあると思う。しかし、土地区画整理事業による造成では、もともとの地形を公共施設や道路、宅地として使いやすい形に整え、区画内から土を持ち出さない原則のもと、切

土と盛土の体積をそろえるなど工夫をしたうえでの盛土が大半だと思う。番組内では「すべての盛土が危険なわけではない」と繰り返し伝えていたものの、映像や事例には危険な印象を与える顕著なものが多かった。分かりやすさを優先したのだと思うが、視聴者をミスリードしてしまうのではないかと感じた。盛土の危険性は、地形の高低差や勾配といった観点で整理できると思うので、もう少し整理したうえで伝えた方がよかったのではないか。国の施策や古地図の活用、地盤品質判定士の存在など非常に興味深い内容が多くあったが、実際に盛土の危険度の評価や対策をしようとすると多額の費用や住民の合意が必要となるため具体的な解決策が見えないという流れになっていき、全体として竜頭蛇尾といった印象で少し残念だった。

○　１月２８日（土）のウイークエンド中部を見た。「ういち“ゆ”～の旅」という新しいコーナーが始まり、キャスターを務める田中逸人アナウンサーが温泉地に出向いて取材していて非常に珍しいと感じた。愛知県蒲郡市にある三谷温泉を舞台に、現代アートのイベントで地域を盛り上げようという取り組みを紹介していた。あまりに身近すぎるがゆえに、あまり目を向けてこなかった場所にも、まだまだ知らない魅力的な自然や文化が多くあることに気付かされた。また、この番組のお出かけ情報は、平日に頑張って働いた人たちが土曜の朝に気分を切り替えて、ふらっと出かけたくなるような情報が豊富だと感じている。

○　２月１０日(金)の東海　ドまんなか！「『学びたい』を育てるには？～愛知発　教育“新時代”～」を見た。番組全体として、多様な子どもたち一人一人に向き合い、無理強いすることなく学び方を個別化することで学ぶ意欲を育てるという方向性となっており、非常に興味深かった。冒頭の子どもの勉強に関するインタビューを受けていたのが全員母親だったのに対し、ある学校の取り組みの視察の場面では男性の姿が目立ち、社会的な役割の男女差が表れているようにも感じた。親にとっては、子どもが学校に行っている間は仕事や自分のために使える時間だとも言える。そういう意味では、学校に行かない子どもたちをどう支えていくかは、学校だけでなく家庭や地域社会も含めた課題だと感じた。静岡県の学校関係者が視察に行っている様子も取り上げられており、今後静岡県でも番組で紹介されていたような取り組みが導入されるのか注目していきたい。

○　２月１０日(金)の東海　ドまんなか！「『学びたい』を育てるには？～愛知発　教育“新時代”～」を見た。東海地方に不登校の小中学生がおよそ 33,000 人いると知り非常に驚いた。そのような状況の中、子どもたち一人一人に合わせた教育に取り組む豊橋市と名古屋市の小学校の例を知ることができ非常によかった。スタジオで元小学校長の澤田二三夫さんが言っていたように、勉強は本来楽しいものなのに、その楽し

さを子どもたちに忘れさせてしまうような教育となっているのが問題だと思う。かつて貴族や武士の時代には各家庭で行われていた教育が、近代になって画一的な教育へと変わり、全体的な学力向上には成果があったものの、再び個を尊重する時代へと戻ってきていると感じた。それぞれの子どもたちに合わせた教育を今こそ考えていくべきだろう。また、今回は愛知県の取り組みだったが、東京など他の地域での取り組みや課題についても取り上げていってほしい。

○　２月１０日(金)の東海　ドまんなか！「『学びたい』を育てるには？～愛知発　教育“新時代”～」を見た。東海地方の不登校の小中学生は、昨年度 32,791 人と過去最多だと伝えていたが、肌感覚ではそれよりも多いと感じている。次回の調査ではどれほどの人数になってしまうのかと思うほど不登校の話を耳にする機会が多く、関心の高いテーマだったと思う。学校に通わない日が多くなっている名古屋市の小学生Ｋさんとその母親を取材していたが、顔がはっきりと映っていた。本人の許可は得ていると思うし、本人は問題ないと思っていたとしても、いじめなどトラブルの原因にならないか心配になった。報道する側として何らかのルールがあるのか気になった。取り上げるべき大切なテーマであっても、放送による影響を取材される本人だけでなく制作側も想像しながら、どう扱うべきか考えていくといいのではないか。名古屋局の来年度の重点事項で多文化共生がテーマのひとつとあったが、愛知県は外国人や外国ルーツの人が多く、異文化や多様性について考えていくのはよいことだと思う。一方、この番組で取り上げた子どもは２人とも男の子で、その保護者や街頭インタビューした人は全員母親だった。実態としてそうした傾向があるのかもしれないが、多様性に対する配慮が不足していたように感じた。なかなか難しい問題だと思うが意識して取り組んでいってほしい。

○　２月１０日(金)の東海　ドまんなか！「『学びたい』を育てるには？～愛知発　教育“新時代”～」を見た。時間割で決められた一定の範囲内であれば、それぞれの児童が教科を自由に入れ替えられるオーダーメード型の授業を紹介していた。学校教育では学習指導要領を守る必要があるため自由度が少ない面もある。今回の事例は、要領を守りながらも、個々の好き嫌いや得意不得意を反映しながら学びを進めており非常に興味深かった。また番組としても、１人の児童に注目することでなぜオーダーメード型の授業がよいのか分かりやすく表現していてよかった。一方で、ＮＨＫには教育に関する特集番組がもっと多くてもよいと感じた。教育のあり方が大きく変わろうとしている中で、私を含めて多くの大人たちは自分が受けてきた教育のイメージを強く抱いていると思う。そうした中、子どもや先生たちとのコミュニケーションがうまくいかない面もあると思う。教師が懸命に取り組んでも、それが評価されるものとして取り上げられる機会が少ないと努力した教師が報われず、結果として教育が大きく変

わらないままとなるように思う。教育の問題は国全体に関わるものであり、報道機関がどうアプローチしていくかという観点で、ＮＨＫが公共放送として果たす役割はとても大きいと思う。さまざまな教育改革が進み、デジタル化で個別最適化が容易になったなど、今回の番組で取り上げたもの以外にも関連する動きは多数ある。１つの番組で完結させるのではなく、教育をめぐる多様な取り組みが存在し、大きなうねりとして変化が起こりつつあることを国民全員が認識できるような形で示すことが公共放送としての重要な役割だと思う。徳川家康が築いた江戸時代は教育が庶民に広がっていった時代だ。少しこじつけではあるが「どうする家康」を契機に、家康ゆかりの中部地方で教育をどうしていくべきか考えていってほしい。

○　２月１０日(金)の東海　ドまんなか！「『学びたい』を育てるには？～愛知発　教育“新時代”～」を見た。集団での学習になじめない子どもがいることは事実であり、それぞれの子どもに合わせた教育が難しい中、学校教育の枠に収まらない子どもをどう育てていくかは重要な課題だと感じる。この番組はそうしたテーマを取り上げており、難しい課題に挑戦する取り組みをよく取材していた。子ども自身が時間割を決められる学校や、子どもの個性を認め、得意分野の能力をのばす学校があることを紹介していてよかった。ただ、このような取り組みを進めるうえでの課題や難しさ、他の学校が取り入れる際に参考となるような情報はやや不足していたと思う。

○　２月１０日(金)のみえスペシャル「ＮＩＮＪＡ　ＴＲＵＴＨ」(総合 後7:57～8:42三重県域)を見た。冒頭にナビゲーターのクリス・グレンさんが、ＮＨＫワールドＪＡＰＡＮで５年にわたり放送している番組だと紹介していた。「忍者の聖地　伊賀」「遁走術」「万川集海」の３回分の日本語吹き替え版をそのまま放送していたと思う。忍者に特化した専門性の高いすばらしい内容で、忍者好きの人にとっては非常にうれしいものだったと思う。大河ドラマ「どうする家康」で伊賀忍者が活躍する場面もあり、注目が高まるよいタイミングでの放送だった。ただ、これほど専門性が高い番組を金曜日の午後８時台に放送したのは疑問だった。世界中に熱心な忍者好きは多数いると思うが、三重県の人たちは忍者への強い関心と知識がある人ばかりではないので、視聴者のニーズと合っていないように感じた。ＮＨＫワールドＪＡＰＡＮの番組を国内向けにそのまま放送すると、どのような反応があるのか試しているのかと感じたほどだ。金曜夜の番組には、家族で楽しめる娯楽的な要素が重要だと思うので、専門性が高すぎる番組はなかなか見てもらえないのではないか。例えば、本編を２回分に絞って、ナビゲーターや三重大学の教授といった専門家に加え、それほど忍者に詳しくないタレントをスタジオに招き、世界的な忍者人気の高さや、三重県が誇る文化である忍者の研究者が県内にいることなどもあわせて紹介することで、一般の人でも楽しみながら学べる番組になったのではないか。

○　２月１３日(月)うまいッ！「寒さが決め手 ヘルシー 細寒天 ～岐阜 恵那市～」を見た。細寒天は便秘に効果があるからと知人がよく食べていることや、なぜ海がない恵那市で海藻を原料とする細寒天が作られるようになったのかが気になり、興味深く視聴した。細寒天はところてんのように突き出して天日干しして作ることや、水で戻して食べることは初めて知った。番組ではさまざまなレシピが紹介されていたが、ご飯に入れて炊いていたのには驚き、おもしろいと思った。低カロリーで食物繊維が豊富とのことだが､寒天の主成分は炭水化物なのになぜ低カロリーなのか疑問に思った。特徴が似ているコンニャクと比較するなどして、その理由を説明してもらえるともう少し納得できたと思う。寒天に含まれるアガロペクチンは、その効果が最近の研究で明らかになってきたと聞いていたので、番組で紹介されてうれしく思った。

○　ＮＨＫのテレビ放送開始７０年特設サイト「テレビ７０」を閲覧した。三谷温泉を舞台にした「銀河テレビ小説　やどかりは夢をみる」や浜名湖を舞台にした「銀河テレビ小説　めぐり逢いて」、岡崎市を舞台にした「連続テレビ小説　純情きらり」が個人的な思い出として残っている。こうした地域を舞台にしたドラマには今後も大いに期待している。また、私のように過去の番組に大切な思い出がある人は多いと思うので、アーカイブスとして過去の番組や映像を機会を捉えて紹介してもらえると非常にありがたい。視聴者の関心を的確に把握し、それにタイムリーに応えていくには作り手としてさまざまな苦労があると思う。インターネット上も含めた視聴者の反響を受け止め、新しい感覚で議論を重ね、サービスを評価・改善していくことが大事になると思う。視聴者からの評価や改善に向けた取り組みにおいて、中部地方の各局はどう連携しているのか。

（ＮＨＫ側）

視聴者からの反響については、データ化のうえ、分析しており、その結果は中部地方の各局で共有している。データがすべてではないが、どのようなコンテンツを制作していくかを検討するうえで参考としている。また、名古屋局から各局への支援として、名古屋局から職員を派遣し、各地域の視聴者ニーズに合わせた番組をともに制作するなど、知見を共有する仕組み作りにも取り組んでいる。

○　さまざまな地域で「どうする家康」に関連した多くのイベントやキャンペーンを実施していると思う。これらの取り組みにおいて中部地方の各局が連携する動きはあるのか。

（ＮＨＫ側）

大河ドラマに関連したイベントやキャンペーンは、名古屋局に担当窓口を設け、域内各局と連携しながら展開方針を立てている。今後、物語が進むにつれ中部地方の各地が舞台となるタイミングもあると思うので、これまで同様、各局と連携しながら取り組んでいきたい。

○　１日の地域放送時間が総合テレビでは３時間程度と説明があったが、これは全国の平均値なのか。また、地域ごとの時間は公表しているのか。

（ＮＨＫ側）

３時間程度というのは全国の平均値だ。地域ごとの放送時間に違いはあるが、国内放送番組編成計画の公表資料には記載していない。

○　インターネットでさまざまな情報を容易に入手できる時代には、地域と密着した番組作りが重要になってくると思う。地域放送の時間が多ければ、より地域ごとの特色が出せると思うので､各局が地域放送に使える時間がどの程度あるのか興味を持った。

（ＮＨＫ側）

番組制作を担当する職員の数は局ごとに違うため、全国一律で放送時間を増やすことは難しいかもしれない。ただ、３時間程度という平均値にとらわれず、必要に応じて各局が独自に放送枠を増やすことは出来る。

○　番組を多くの人に見てもらうためにさまざまな演出を考えていると思うが、制作者が頭の中で考えたような演出は多くの場合不要だと感じている。取材した内容などをストレートに伝えてくれたほうが、見る側としては素直に受け取ることができる。演出が制作者が期待したような効果を発揮せず、かえって番組の質を下げてしまうこともあるのではないか。実際にあったことを誠実にしっかりと伝えることが一番だと思うが、番組制作における演出についてどう考えているのか。

（ＮＨＫ側）

番組制作において演出と呼ばれるものには、色々なタイプが存在する。番組のナレーションを誰がどのようなタッチで入れ

るかというのも演出といえるし、現場を撮影する時に芸能人を連れていくというのも演出の一つだ。また、演出を加えずに、その場で起きたことを丁寧に切り取り、編集を工夫することで分かりやすく飽きさせないように作ることも可能だ。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

２０２３年１月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１９日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、ＮＨＫニュース　たっぷり静岡について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	坂田　守史	((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)
副委員長	榊原　陽子	((株)マザーリーフ代表取締役)
委　員	稲垣　貴彦	(若鶴酒造(株)取締役)
	遠藤　英俊	(名城大学特任教授)
	大西かおり	(特定非営利活動法人 大杉谷自然学校　校長)
	岡安　大助	(中日新聞社取締役)
	成島　洋子	((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)
	平本督太郎	(金沢工業大学ＳＤＧｓ推進センター長)
	廣田　憲吾	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	安井　香一	(東邦ガス株式会社相談役)
	リムリーワ	(岐阜大学工学部教授)

（主な発言）

＜ＮＨＫニュース　たっぷり静岡

(総合　１２月５日(金)放送)について＞

○　平日の午後６時台という放送時間を考えると、家事などをしながら見ている人も多いと思うが、見る人の関心に合わせて伝える順番や関連する事柄をまとめて伝えるといった工夫がなされていると感じた。裾野市の保育園で園児を暴行した疑いで保育士が逮捕された事件では、保護者の不安や意見、行政の対応などを伝えていた。また、牧之原市の通園バスで女児が置き去りにされて死亡した事件では、福岡市の事件の教訓が生かされていないことや県内施設の調査結果、保育園児がバスの車内でブザーを使う訓練の様子など多角的に伝えていた。行政の説明責任という観点で見ると、裾野

市の公表の遅れや静岡市長が次の市長選に立候補しない理由について、説明責任が十分に果たされていないのではないかという市民目線での解説がされていたと思う。関係者から視聴者や市民が納得する説明をいかに引き出すかが、報道の重要な役割だと感じた。愛知県豊橋市で検出された鳥インフルエンザに対する静岡県内での対応を伝えており、隣県でも対策が呼びかけられていることが分かった。スポーツコーナーでは、サッカーワールドカップからイチローさんによる高校球児の指導など、幅広い話題が取り上げられていてよかった。富士山頂に太陽が重なる瞬間に輝く「ダイヤモンド富士」と呼ばれる現象やヤシの木の「こもかけ」など、季節の風物詩を取り上げることでよいアクセントになっていた。じっくり見ると関連するテーマごとにまとめられており、話題の転換もスムーズで、改めてニュース番組制作の難しさと工夫を感じた。

○　裾野市の保育士が逮捕された事件について、ＮＨＫが独自に調査報告書を入手したニュースから始まり、通園バスの車内で女児が死亡した事件を受けた牧之原市の現在の状況を伝え、保育園児がバスの車内でブザーを使う訓練へとつなげる冒頭部分が一連した流れになっており、ＮＨＫとしての問題意識が感じられた。続いて、鳥インフルエンザや「袴田事件」の裁判やり直し審理に関するニュースを短く伝えた構成もよかった。スポーツコーナーはぜいたくな構成だったのが印象的だった。サッカーワールドカップの話題では得点シーンが繰り返し放送されがちだが、清水エスパルスの権田修一選手のセーブシーンが何回も見られたのは地元ならではでとてもよかった。一方、この日取り上げた内容は行政発信によるものが多く気になった。もう少し市民から発信される話題があってもよいのではないか。また、天気予報を伝えるタイミングがよく分からなかった。番組の中盤と最後の２回伝えていたが、内容がどう違うのか分からず戸惑いを感じた。さらに新型コロナウイルスの感染者数も、日々の変化を見ていくという意味では天気予報と通ずる部分もあると思うので、同様の戸惑いを感じた。冒頭でニュースをまとめて伝え、天気予報を挟んでスポーツなどのコーナー、静岡市長選の考察を伝えて季節の話題、再び天気予報という構成が本当にふさわしいのか気になった。

○　番組冒頭で、その日に伝えるニュースの一覧が表示されており分かりやすかった。裾野市の保育士が逮捕された事件は関心が高い話題であり、一時保育を利用していた保護者のコメントもあわせて伝えることでリアルな受け止め方が感じられた。保育園が全職員に聞き取りを行ったという報告書の映像では、１歳児クラスの職員６名のうち３名の不適切保育を確認したとの記載が目に入った。担当職員の半数において不適切保育が確認されたというのは大変な事態だと思うので、調査の対象となった職員の数も伝えたほうがよかったのではないか。牧之原市の通園バス車内で女児が死亡した

事件では、取材した記者が県内施設における安全管理について解説していたが、とても分かりやすく他県の事件を教訓とすることの重要性がよく伝わってきた。「富士山大好きプロジェクト」も、地元を愛する心を育てるとてもよい取り組みだと思う。番組の後半で「きょう伝えた主なニュース」として、再度一覧で見せていたのもよかった。

○　５０分間という放送時間が長く感じられ、平日の午後６時台に見続けるのはややつらいのではないかと思った。イチローさんが高校球児を指導する話題やサッカーワールドカップ、新型コロナウイルスの感染状況など、それぞれは見応えがあったが、全体として間延びした感じがあった。５０分間の放送枠を前提としてそれぞれの内容を並べているような印象を受けた。細かく切り分ければ半分程度の時間で伝えられるのではないかとも思い、必ずしも重要とは言えない情報までも盛り込んでいる感じがした。地域の放送局として努力していることは感じたが、平日の午後６時台にじっくりとテレビを見ている人は少ないと思うので、構成をもう少しコンパクトにしてもよいのではないか。牧之原市の通園バス車内で女児が死亡した事件を受け、対策として保育園児がバスの車内でブザーを鳴らす訓練の様子を伝えていたが、事件当初のインパクトだけでなく、その後のフォローを伝えるという意味でよかった。「ダイヤモンド富士」の写真紹介も映像を保存しておきたいと思うほど美しかった。

○　前半は静岡発で全国的に広がったニュースを地元向けに再編集したかのような内容だった。特に保育士が逮捕された事件と通園バスの置き去り事件については、他でも見聞きする機会が多かったせいか冗長な印象が強かった。また、保育士の逮捕に関するニュースでは、ＮＨＫが調査報告書を独自に入手したことを強調しすぎではないかと思った。通園バスの事件に関しては、再発防止に向けてこれからハードやマニュアルを整備していく段階だと思う。定期的な訓練や調査、日々の意識づけなど地道な取り組みを継続してこそ生きてくるものだと思うので、報道機関の役割として定期的に“その後”を伝えていくことを期待している。新型コロナウイルスの病床使用率を示す際に、県を西部・中部・東部の３つのエリアに分けているのに対し、天気予報では伊豆を加えて４つに分けていることに静岡県外の人間から見ると違和感があった。イチローさんが高校球児を指導した話題では、指導先がいわゆる強豪校ではなく県立高校だったのは好感が持て、指導の様子や球児の反応をうまく切り取っていてよかった。静岡市長が次の市長選に立候補しないという話題は、しっかり時間を割いて伝えており、よく取材できていると感じた。ただ、関係者の「当選できないから立候補しない」という発言をニュース番組で広く流してしまうと実際の票の動きに影響してしまうのではないかと気になった。また、全体的な伝え方に週刊誌のような雰囲気があったことも気になった。ヤシの木の「こもかけ」はいかにも地方のニュースという感じ

でよかったが、毎年恒例の話題になっているようにも思えた。主なニュース項目と天気予報は番組の中でそれぞれ２回ずつ伝えていたが、なぜそのような構成にしているのかが分からず戸惑いを感じた。

○　前半部分で大きなニュースなど関心の高い話題を扱い、天気予報を２回伝えるという構成自体はふだん見ている「まるっと！みえ」と同じだと感じた。ただ、三重県では午後６時３０分からの放送なのに対し、静岡県では６時１０分からと放送時間が長いのはなぜなのか不思議に思った。静岡県では伝えるべきことが毎日そんなに多いのだろうかとも感じた。例えばサッカーワールドカップの話題では、静岡県向けは時間も長く充実したものだったが、三重県向けでは忍者が傘を回して勝敗を占うという話題を短く伝えただけだった。静岡県はサッカー王国ということもあり、この日は長い時間を割くにふさわしい内容だったと思うが、毎日これほどの話題があるのかは疑問に感じた。静岡市長が次の選挙に立候補しないという話題では、公然の秘密とも言うべき内部事情が公共の電波に乗って広げられているかのようで興味深かった。静岡市長は静岡県知事との不仲が報道されたこともあったので、これくらいの内容でなければ見てもらえないような県内の雰囲気があるのかもしれないと思った。ただ、現職の市長が次の選挙に立候補しない理由を、関係者の意見を集めて導き出す手法には週刊誌的な印象を受けた。「日曜討論」のような番組であれば関係者本人が話しているのでよいかもしれないが、市長の関係者の意見だけで結論づけているように見えて違和感を覚えた。とはいえ、多くの人が注目する市長選についてあれだけはっきりと伝えたことは興味深かった。この日伝えた内容について、視聴者からの批判はなかったのか。

（ＮＨＫ側）

去年は災害や事件・事故が比較的多かったこともあるが、静岡県では５０分の放送時間すべてを使い切るぐらい伝えるべきことがあるのが日常だ。放送の順番としては、事件・事故や人命に関わるものは優先して伝え、その後に柔らかい話題を持ってくるようにしている。また、ＮＨＫが独自に取材した情報は冒頭に近いところで伝えることもある。番組の最後だけでなく中盤でも天気予報を伝えるのには、前半と後半の区切りとする意図がある。前半でその日のトップニュース的な事件・事故を伝えたあと、１度短く天気予報を伝えて区切りとし、後半では柔らかい話題や企画を伝えたあとにさらに詳しい天気予報を伝える構成にしている。この日の内容について、視聴者からの批判的な意見は特になかった。

○　この日の放送はよく見られたということだが、どの部分がもっとも見られていたのかデータなどはあるのか。

（ＮＨＫ側）

静岡市長選の話題は視聴者の関心が高かったと思われ、特によく見られていた。

○　全体の構成を含めてまとまりがあり、興味深く視聴した。私は東京から中部地方に移住してきたが、この番組を見た時に首都圏で放送されているニュース番組を見た時と同じような感覚を覚えた。市民レベルの地域イベントなどを取り上げるコーナーが少なく、全国的に関心が高い話題を中心に構成されている印象を受けた。地理的に静岡県は東京に近く、全国的な話題へのニーズが高いと思われ、事件・事故や災害も比較的多いという説明もあったので、結果としてそうした構成になっているものと理解した。一般的にＮＨＫの番組は全国どこでも同じ特徴があり、東京と地域で若干の違いがある程度だと思っていた。しかし、同じ午後６時台のニュース・情報番組でも、今回の静岡県向けの番組と以前の審議会で視聴した岐阜県向けの番組を比べると、構成などが大きく異なっていると感じた。地域ごとにかなり特色があることを知っている視聴者がどれほどいるのか疑問に思うと同時に、違いは魅力でもあるので、ＮＨＫが持つさまざまな“顔”を知ってもらう工夫があってもよいのではないかと感じた。

○　裾野市で保育士が逮捕された事件に関するニュースにおいて、報道機関としてふさわしくない点があったと感じた。この日の最も重要なニュースは、裾野市長が保育園長を犯人隠避の疑いで刑事告発したことだったはずだ。市長が特定の保育園長を告発することはめったにないことで、なぜこのような事態に至ったのかＮＨＫとしてきちんと解説してほしかった。専門家の談話や誓約書を強制された保育士のコメントも交えてしっかりと伝えるべき日だったと思う。しかし、実際にはＮＨＫが調査報告書を独自に入手したことがトップニュースの中心となっていた。独自入手に一定の意義があることは認めるが、今回入手した報告書から新しく何が判明したのか分からなかった。報告書の内容はすでに公表されているものも多く、どこにニュースとしての価値があるのかが分からなかった。ニュースの価値というよりも、独自に入手した点に重きを置いて伝える順番を決めているように感じた。これはニュースの伝え方としていかがなものかと思う。さまざまな思惑に左右されず、ニュースの価値をきちんと判断して優先順位を決めて伝えるのが基本だと思う。独自に入手したことを強調するかのような構成になっているとも感じた。それゆえ、視聴者が事件の全体像を理解しやすいような順番とはなっておらず、それぞれの内容にも前後のつながりがなく、私

自身も理解できなかった。最も重要である市長による告発について伝えたあと、「一方、ＮＨＫが独自入手した報告書には、公表されている内容の他にこのような行為もあった」と付け加えるのが、ふさわしい伝え方だったと思う。これまでＮＨＫはニュースの価値に基づいた報道を続けてきており信頼してきたが、今回の番組はニュースの価値に基づいた順番では伝えておらず、残念だった。今後は、ニュースの価値そのものに重点を置いて、伝える優先順位を決めていってほしい。

○　全国的に関心の高いニュースから地域に密着した情報へと続く流れがあり、メリハリのある構成だった。冒頭のニュースでは、裾野市の園児暴行事件から牧之原市の通園バスでの置き去り事件へと続き、保育の現場において安心・安全をいかに確保していくのか問題提起されていると感じた。記者による解説の中で、県内施設への立ち入り調査で明らかになった過去の置き去り事例の具体的な数字が紹介されたことで、同様の事態が多くの場所で起きており、社会全体で再発防止策を考える必要があるとのメッセージが伝わってきた。ただ、裾野市の事件に関する報告書を独自に入手したと伝えていたが、報告書の位置づけや扱いについて詳しく知りたかった。この報告書は本来公開されるものなのか、時間がたてば公開されるものなのか気になった。報告書の一部を取り上げて伝えていたが、報告書全体の内容が分からない状況の中では事件の全体像を検証しようがないと思った。また、牧之原市の事件について行政の指導・監督の必要性を指摘していたが、保育の現場の人手不足が原因なのか、それとも本当に行政の指導・監督が行き届いていないのかが分からず、掘り下げ不足だった。保育の最前線で働く保育士のインタビューなどがあってもよかったのではないか。保育園児が乗る可能性がある市所有のバス４台のうち３台に置き去りを知らせるブザーを設置したと伝えていたが、残り１台は今後どうするのか、私立の保育園は今後どうしていくのか不安が残った。サッカーワールドカップの話題は静岡ならではの充実した内容で、地域の放送局のよさを感じた。

○　取り上げる話題が多岐にわたり、それぞれのテーマについて分かりやすく伝えていたと思う。特に、この日のニュースは全国的にも注目されている内容を地域の放送局ならではの視点でしっかり伝えておりよく理解できた。静岡県は非常に大きい県だと思っているが、番組全体として県内各地域のさまざまな話題を取り入れて制作していると感じられ、大変興味深かった。ただ、裾野市の不適切保育に関するニュースについてはあまり理解が深まらなかった。最初にこのニュースを見たときに、なぜ３人の保育士は逮捕されたのか、ＮＨＫが独自で入手した報告書は何が独自なのかが分からず混乱した。その後、通園バスでの置き去り事件のニュースとなり、保育園に関するニュースが連続したことも加わり、全体としてどうつながっているのかがよけいに理解しづらくなった。保育士が逮捕された経緯や報告書のどの部分がどのような変化を

与えたかについて、より具体的な説明や時系列に沿った解説があると理解しやすかったのではないか。また、裾野市の事件についてインターネットで検索したところ、静岡局の静岡ＷＥＢ特集として１２月１２日付の記事が掲載されているのを見つけた。この記事を読み、ある程度理解を深めることができた。詳細な情報を加えた記事をインターネット上に掲載することは視聴者にとって有益なサービスであると感じた。この事件について時系列で一覧にまとめたページがあると、より優れた視聴者サービスになるのではないかと感じた。

○　保育士の逮捕に関するニュースで、ＮＨＫが独自に報告書を入手したと伝える部分には違和感があった。どの部分が独自なのかや報告書の内容が事件全体の文脈にどう影響するのかが伝わってこなかった。該当部分を何度も見直したが、それでも理解が進まなかった。独自という部分を強調しすぎていたように感じ、繰り返し見ることのない一般の視聴者や事件について予備知識のない人にも配慮して、伝え方をもう少し工夫してもよかったのではないか。静岡市長が次の市長選に立候補しないという話題では、関係者の発言を基に伝えており、週刊誌のゴシップのような雰囲気に違和感があった。ただ、市長が替わったとしても現職の市長が進めているハード面での大規模な整備は続いていく見込みであることに触れ、関心を持ってほしいとの市民への投げかけは非常に有効だったと思う。映像の面では、キャスター席と記者席を一緒に映すときの画面が強く湾曲していたように見えた。カメラのレンズによるものだと思うが、扇型のように湾曲している画面は見ていて気持ち悪さがあり、キャスターが座っている席の側面が見えているのも見苦しく、非常に気になった。

（ＮＨＫ側）

独自に入手したニュースを早い順番で伝えた点には内向きの考え方があったかもしれない。これまで以上にニュース価値をしっかり判断し、今後の放送に生かしていきたい。カメラのレンズによるものと思われる映像の湾曲についても、技術担当者と情報を共有し改善策を検討したい。

＜放送番組一般について＞

○　１月２日(月)の１００分ｄｅ名著「１００分ｄｅフェミニズム」（Eﾃﾚ 後 10:00～11:40)を見た。出演者の人選がよかった。社会学者の上野千鶴子さんや歴史学者の加藤陽子さん、翻訳家の鴻巣友季子さんもよかったが、教育学者の上間陽子さんが特によかった。ほかの出演者が基本的に文献や歴史を中心にフェミニズムや社会と向き

合っている中、上間さんは沖縄の現場で実際に女性の声を聞き、女性が受けている被害と向き合っている。それが話す声のトーンに表れており、議論の中で丁寧にお互いの意見を聞き、さらに自分の意見を言うというテンポや空気感につながっていると感じた。安部みちこアナウンサーが進行役でありながら、自らのことばで語っていたのも好印象だった。

○　１月４日(水)の東海発！ＮＨＫどの自慢～おおぶでパフォーマンス～(総合 後7:57～8:41 東海３県ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。一般応募から選ばれた３０組の出場者による歌やダンスなどさまざまパフォーマンスを短く編集し、それぞれの個性や出場理由をうまくまとめていた。テンポよく番組が進行し、４４分という時間もちょうどよく集中して見ることができた。プロが作り上げたアマチュアによる演芸会という印象で、司会の山口智充さんと高山哲哉アナウンサー、ゲストのテツａｎｄトモさんとＭａｙ．Ｊさんの出場者とのやり取りは構えたところがなくフレンドリーで、それぞれの個性を引き立てるプロの芸だと思った。出場者の中にはパフォーマンスの動画を配信している人もいて、インターネットにより表現の場が世界へと広がる時代になっていると感じた。そうした人たちが実際に人前でパフォーマンスすることにより芸に多様性が出て､よりおもしろいものになっていた｡亡くなった家族への思いから出場した人や、不登校の状態からフリースタイルバスケとの出会いをきっかけに人と接することができるようになった人など、視聴者が自身の体験と重ね合わせる点も多かったと思う。年末年始に数多くの娯楽番組を見て、プロの芸ばかり目にしていたが、今回の番組はアマチュアならではの新鮮さと親近感があった。芸事は人と打ち解ける最高の手段の一つであると思う。出場者が客席の前の方で、お互いのパフォーマンスを見ている様子からは、自分の芸を愛する人は他人の芸も楽しむことができるのだと感じられ、非常にほのぼのとした気持ちになった。

○　１月９日(月)のＮＨＫナゴヤニューイヤーコンサート ２０２３(総合 後 1:05～2:17 中部ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。ゲストはテノール歌手のジョン・健・ヌッツォさん、バイオリニストの辻彩奈さん、ピアニストの沢田蒼梧さん、司会はフィギュアスケーターの浅田舞さんと高山哲哉アナウンサーでとても豪華な顔ぶれだった。辻さんは岐阜県出身で、恩師が名古屋フィルハーモニー交響楽団のバイオリニストだったり、沢田さんは名古屋大学医学部の学生でもあるなど地元ゆかりの人も多く、浅田さんに合わせてフィギュアスケートにちなんだ選曲もあり工夫を感じた。公演も観覧したが、指揮者の園田隆一郎さんの進行がすばらしく、観客も一緒に拍手で参加するなどライブ感たっぷりでよかった。終演後は感染防止対策として分散しての退場となったが、その間、高山アナウンサーが「まるっと！を見たことありますか？」など観客に呼びかけていた｡そういったやり取りをきっかけに高山アナウンサーのファンや｢まるっと！」

を見たいと思った人も増えたと思う。改めてリアルなふれあいは強く印象に残ると感じた。

○　１月９日(月)のお取り寄せ不可！？　列島縦断　宝メシグランプリ　２０２３(総合 後 7:30～8:55、後 9:30～10:43)を見た。日本各地とスタジオをオンラインでつなぎ、その地域の風土と密着した知られざるグルメを紹介する番組だった。全国にネットワークを持つＮＨＫならではの非常に力の入った番組だと感じた。味だけでなく、料理に込められた地域の知恵、見た目や調理法から受ける衝撃、料理にまつわる物語の４つを審査しグランプリを決めていた。飢きんの際に、毒のあるソテツの実を工夫して食べた沖縄の「タンナージューシー」や、新鮮な魚介類の入手が難しかった秋田の山間部でアンモニアの作用で腐りにくいエイを新年に食べる「かすべなます」など、あまり知られてはいないが地域に古くから伝わる料理が取り上げられていた。中部地方からは、石川県輪島市の「ダダメ鍋」がエントリーしていたが、金沢局ではなく富山局のアナウンサーが取材しており不思議に思った。ほかの地域は食材が乏しい中で、どう工夫してめでたい場を祝うかに重点が置かれていたのに対し、地元の人でもなかなか食べられないタラの白子だけを使用した料理だったので、やや違和感があった。「タンナージューシー」がグランプリだったが、結果発表後に沖縄とつないだ映像が途切れ、電話でつなぎ直したので時間が足りなくなったのか「あと５秒で終わります」と採点結果なども分からないまま終わってしまった。民放と異なりＣＭがなく時間調整が難しいのかもしれないが、各地からの中継やスタジオでの調理など多数の要素を盛り込んだ大規模な番組だったにもかかわらず、少し延長するくらいの融通は利かなかったのかと思った。

○　１月１１日(水)のダイアンの寿（スー）を差し上げます！！(総合 後 7:57～8:41 東海３県ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。お笑いコンビのダイアンが岐阜県坂祝町を訪ね“おめでたいモノ”を調べていく番組だったが、行き当たりばったりと感じる場面が多く、見る側の解釈が必要だと思った。ダイアンの「この番組は全国放送されない」といった言動には、不自然に感じたり聞き苦しく思う部分もあった。坂祝町は自然が残る心安らぐ場所だと知り、行ってみたいと思ったものの、坂祝町の全体を紹介する番組にはなっていなかった。思いつきで出たとこ勝負という演出はバラエティー番組としてはよいのかもしれないが、「ブラタモリ」や「鶴瓶の家族に乾杯」のような落ち着きが感じられなかった。司会や進行役がいたほうが、ダイアンの魅力をより引き出せたのではないかと思う。ただ、チャレンジする姿勢は感じられた。次回も積極的に見てみたいとは思わないが、知らない場所の魅力を紹介してくれるという点では、何気なく見てみてもよいかなと思った。

○　１月１３日(金)の東海　ドまんなか！「２０２３年“宇宙への旅”～ものづくり東海の挑戦～」を見た。宇宙に関連する岐阜県内の施設や企業が多く取り上げられており、親近感を持って視聴した。国産最大を誇るＨ３ロケットに関する紹介も非常によかった。個人的には宇宙旅行の開発は無駄が多く疑問視しているが、ベンチャー企業経営者の「格安の宇宙旅行を実現する」ということばは印象的で、宇宙旅行が一般の人にも身近になるかもしれないと感じた。ただ、世界初のジェット・ロケット切り替えエンジンの開発では、体積の大きい気体ではなく液体燃料を使用することの重要性は理解できたが、ジェット噴射を７秒間継続させることの重要性は分からなかった。７秒間が目標とされている理由が知りたかった。また、自動車部品メーカーが宇宙分野に乗り出す背景にＥＶ化による自動車部品の総数減少があると伝えていたが、エンジン開発企業と自動車部品メーカーの間にどういう関わりがあるのかも知りたかった。名古屋大学・田島宏康教授の「暮らしで宇宙を利用する」ということばは非常に印象深かった。宇宙と聞くとロケットなど遠い世界のことを連想しがちだが、ＧＰＳや地図アプリなど人工衛星を使ったサービスは日常的に利用しており、身近な暮らしの中にある宇宙の利用についても強調されるとよかったと思う。番組タイトルにも、その要素を取り入れるとよかったのではないか。

○　１月１３日(金)の東海　ドまんなか！「２０２３年“宇宙への旅”～ものづくり東海の挑戦～」を見た。最近、宇宙が注目されていると感じてはいるが、資産家が大金を支払って旅行するイメージやＳＦ的で夢物語のような感覚で受け止めていた。しかし、番組を見て宇宙は民間企業が競う巨大なマーケットになりつつあることがよく分かり、大変驚いた。愛知県の自動車部品メーカーが自動車のＥＶ化により、年間１２億円もの損失が見込まれる中、宇宙ビジネスへの進出を考えていると伝えており、現実味があると思った。田畑の管理に人工衛星を利用している農業法人が身近にあることを知り、人工衛星はもはや国家レベルではなく民間企業や個人が利用する技術になっていることがよく理解できた。宇宙がＡＩやＩＴに続く人類の次のステップとなりつつあることに気づかされた。ただ、ジェットエンジンとロケットエンジンの切り替えの説明で使われた映像に英語の表示があったが、日本語訳を付けたほうが分かりやすかったと思う。

○　１月１３日(金)の東海　ドまんなか！「２０２３年“宇宙への旅”～ものづくり東海の挑戦～」を見た。宇宙産業は世界中で注目され、経済界でも捉え方が大きく変わってきている分野であり、非常によいテーマだと感じた。東海地方に集積する自動車関連産業との結び付きにも触れられていて非常におもしろかった。ただ、ここ数年で大きく様変わりした宇宙産業の背景に何があるのかの説明が不十分だと感じた。ＧＰＳ

をはじめ、日々の暮らしとの接点に触れていたのはよかったが、それらのサービスが急速に拡大しているという全体像を示した方がより理解が進んだと思う。ただ、２５分の番組の中でそこまで取り上げるのは難しいとも思う。短い番組としては、非常に分かりやすく興味深いものになっていたと思う。同じ時期に宇宙をテーマにした「クローズアップ現代」を放送していたが、番組ホームページには関連番組としての紹介はなく、番組の中でも告知されていなかった。ＮＨＫでは同じテーマでも、興味を持つきっかけとなる分かりやすい番組や深く掘り下げた特集番組など異なるタイプの番組を制作している。それぞれ関連する番組を結び付け、その存在を広く知らせることが非常に重要だと思う。動画投稿サイトを利用している世代は、関連番組が自動再生されることに慣れているため、そういった情報がないことを、ことさら不親切だと感じるだろう。ＮＨＫプラスで関連番組をまとめて見られる仕組みを導入するのが理想だが、まずは番組内での関連番組紹介やホームページでの誘導といった工夫から始めるとよいのではないか。そういった取り組みが、ＮＨＫのコンテンツの付加価値を上げ、魅力の最大化につながると思う。

○　１月１３日(金)の東海　ドまんなか！「２０２３年“宇宙への旅”～ものづくり東海の挑戦～」を見た。アメリカの民間企業が有人宇宙飛行に成功したのを知り、ロケット開発を目指すベンチャー企業を立ち上げた男性のエピソードは非常に興味深かった。この企業のエンジン開発チームは、さまざまな分野で活躍してきた人や大手自動車メーカーからの出向者で構成されているとのことだったが、これほど多彩な人材をどう集めたのか、企業全体の規模はどの程度なのかも詳しく知りたかった。また、ジェット・ロケット切り替えエンジンの話題では、大気の有無がどう影響するのか、具体的にどう切り替えているのかも詳しく説明してほしかった。ジェット噴射の継続時間の目標がなぜ７秒なのか、７秒を境に何が変わるのかも知りたかった。田畑の管理に人工衛星を利用する取り組みは、農業の効率化に役立つと感じた。人工衛星の利用は、農業だけでなく老朽化したインフラの管理といった分野にも広がっていくだろう思った。東海地方と宇宙産業との関わりを一覧で示した地図の中に、月面探査車や宇宙ゴミのリサイクルなど興味深いものがあった。これらの話題も今後ぜひ取り上げてほしい。

○　１月１３日(金)の東海　ドまんなか！「２０２３年“宇宙への旅”～ものづくり東海の挑戦～」を見た。航空機産業に活気がなくなっていると感じていたところに、モノづくりが盛んな東海地方で宇宙開発に乗り出すという広がりのあるテーマで、新春にふさわしい明るい未来を感じさせる番組だった。

○　１月１３日(金)のザウルス！今夜も掘らナイト「福井のチャンピオン　スゴ技連

発！！ＳＰ」(総合 後 7:30～7:56 福井県域)を見た。モーター付き模型飛行機・Ｕコンの世界チャンピオンやインドアプレーンの日本チャンピオン、全米ナンバーワンになったマジシャンなど、福井県にさまざまなチャンピオンがいることを初めて知ることができ、本当におもしろかった。チャンピオンその人にスポットを当てるだけでなく、活躍の背景にある地域のよいところにも着目していたのがよかった。地域の理解があってこそ学校の校庭でＵコンを飛ばす練習ができることや、「サンドーム福井」という大きな施設をイベントがない日には地域住民なら無料で使用でき、ライトプレーンの練習ができるといった恵まれた環境があることが、チャンピオンを生む背景にあることをしっかり取材していてすばらしいと思った。また、登山するスピードを競うスカイランニングのチャンピオンを取り上げる際には、その速さを伝えるため標高９１４メートルの山を登る姿を撮影していた。スタッフは一緒に登ることを最初から諦め、「山頂に着いたら連絡ください」とチャンピオンにカメラを託していた。コミカルなやり取りで「スタッフも一緒に登れ」と思わず突っ込んだ視聴者も多いと思われ、これはこれでよい演出だったと思う。ただ、山頂からの風景を見てみたかったので、遅れてでも登って撮影した映像を紹介してほしかった。そうすれば、スタッフも登って撮影したことが伝わり、見る人の気持ちも和んだと思う。

○　１月１７日(火)のニッポン知らなかった選手権実況中！「第７０回　電話応対コンクール東京大会」を見た。大会の熱気や緊張感がよく伝わってきた。主役となる選手だけでなく、隔離された環境で長時間にわたり採点を行う審査員や顧客役の人たちも大きな負担を感じながら対応していると思う。競技の進行に合わせて、審査員が採点する様子や競技の音声に対するリアクションなどを追いかけており、大変興味深かった。個別の実例ごとに理想とされる電話対応を分かりやすく教えてくれる構成もよかった。「地球ドラマチック」のナレーションを長く担当していた渡辺徹さんが亡くなり別の人に変わったが、ナレーションは声や語り口、その人の人柄も含め、思った以上に番組の色を作り出すものだと感じた。これは電話対応の肝にも通じるものだと思う。全体として、選手や関係者に対する大変温かいまなざしが感じられる番組だった。

○　全国的に注目を集める事件は、発生直後のニュースはよく目にするが、その後どうなったのかを知る機会は減ってきていると感じる。「あの事件はどうなったのだろう」と思った際、かつてはテレビを見ていれば追加の情報が流れてきて“その後”を知ることができたように思う。しかし、最近はインターネットで検索して“その後”の情報を収集することが多くなり、情報収集のスタイルが変わってきていると思う。ＮＨＫはそうした変化に対応できているかどうかという視点でサービスをチェックしてみた。例えば、静岡の事件を調べようと「牧之原市」「保育園」「バス」などのキーワードでインターネット検索をすると、動画とその内容を書き起こした記事が一緒に掲載

されたＮＨＫのページが出てくる。おそらく何度も追加取材して複数のニュースを放送してきたからだと思うが、個別の記事がばらばらに出てくるため、記録として時系列に沿って見ていくことができない状態になっている。情報としては存在するのに、インターネットでそれを探す人にとってアクセスしにくい状況となっているのはもったいなく感じる。時代を記録するというＮＨＫの重要な役割が、このままだとうまく伝わらないようにも思う。例えば、各記事へのリンクが時系列で整理されていれば、最初の状態からどう変化していったかなど、事後に振り返って全体像を把握することが容易になると思う。すでに放送・配信したものを整理するだけなのでＩＴ技術によって比較的簡単に実現できると思う。そうした仕組みづくりを検討してほしい。

○　年末年始にかけて数多く放送された、大河ドラマ「どうする家康」に関連する番組を見た。「ブラタモリ」や「名品の来歴」、ドラマの出演者によるトーク番組など、家康にゆかりのある東海地方の風景が毎日のように放送されており、盛り上げようという意気込みを強く感じている。私の周囲でも「どうする家康」を見ている人が多く、ドラマの内容が会話のきっかけとなるようなシチュエーションもあった。ドラマに関連する施設や展示を目にする機会も増えている。今後１年間かけて、岡崎市や浜松市、静岡市といったゆかりの地が連携しながら、大河ドラマとともに盛り上がっていってほしい。

○　新聞の投書欄で、ＮＨＫを見ていたら「せかほし」という略語が出てきたが、最初は何のことか分からず、ようやく「世界はほしいモノにあふれてる」の略だと分かったという意見を目にした。８０代男性からの意見で、高齢者には理解できないことばが多いのでせめて良識ある放送局だけでも略語などを使わず正しい日本語を使ってほしいと続いていた。私もこの男性と同意見だ。若者受けを狙って、彼らの感覚に合わせた語呂がよい略語を使うのは、ひとつのテクニックとしてはありえると思う。しかし、若者たちの間で昔ながらのことばや文化を真面目に守ることが、逆に格好よいとされる時代が必ず来ると思う。すでにそういう時代になっているかもしれないが、若い世代に受け入れられるための工夫と昔ながらのものを守り続けることのバランスが、今問われているのではないかと思う。

○　ＴＡＲＯＭＡＮ　岡本太郎式特撮活劇について。卓越した世界観でとてもおもしろい。「展覧会　岡本太郎」のプロモーションのために制作されたと知り、そのためにこれほど凝った番組を制作するのは、さすがＮＨＫだと感じた。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

２０２２年１２月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１５日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、いしかわ令和プレミアム「思いをつなぐ　能登　再起の祭り」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委　員　長	坂田　守史	((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)
副委員長	榊原　陽子	((株)マザーリーフ代表取締役)
委　　員	稲垣　貴彦	(若鶴酒造(株)取締役)
	遠藤　英俊	(名城大学特任教授)
	大西かおり	(特定非営利活動法人 大杉谷自然学校　校長)
	岡安　大助	(中日新聞社取締役)
	成島　洋子	((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)
	平本督太郎	(金沢工業大学ＳＤＧｓ推進センター長)
	廣田　憲吾	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	安井　香一	(東邦ガス株式会社相談役)
	リムリーワ	(岐阜大学工学部教授)

（主な発言）

＜いしかわ令和プレミアム「思いをつなぐ　能登　再起の祭り」
(総合　１２月５日(金)放送)について＞

○　非常に視聴しやすく、さまざまな祭りが紹介されていて興味深かった。若者たちが、熱い思いを持って祭りに懸命に取り組む姿を見ることができ、地域の伝統や文化を継承していく姿を捉えたドキュメンタリーとしての側面もあってよかった。人口減少が進む地方において、伝統を残したいという住民の思いや、そうした状況のなかで自身の人生や生活を見つめている様子がかいま見られ、また見たいと思える番組だった。ただ、さまざまな祭りを紹介しているためか、内容を詰め込みすぎだとも感じた。全体的な構成も、もう少し整理して伝えてほしかった。

○　３つの祭りを紹介しており、それぞれ取り上げた人物が若者２人と宮司だった兄の後を継いだ女性だった。番組のコンセプトが「再起の祭り」なのであれば、ことし初めて本格的に参加するような人ではなく、コロナ禍の前から祭りを担い、コロナ禍でせっかくの準備が無駄となった経験を経て、ことしは３年ぶりにようやく開催できるという思いを持った人を取り上げるべきだったのではないか。地域の伝統の祭りに若い人たちが参加していくこと自体はよいと思うが、この２年間じくじたる思いでやってきた人たちが登場せず、若い人たちだけを取り上げて「再起の祭り」と言われてもそのようには受け取れなかった。「祈りを込めて祭りを受け継ぐ」といった情緒的な表現を使っているだけで、実質的には例年通りの祭りを取り上げていたように感じた。「ばっこ祭り」について「何を祈るかも分からない、氏子すらも知らない」と紹介していたが、この祭りは中能登町指定無形民俗文化財として自治体のホームページに掲載されており、子孫繁栄と収穫に感謝し豊作を祈ると解説されているため、大きな食い違いを感じた。「歴史をひもといたことで祭りの意味を再発見した」という紹介があったが、実際には宮司の女性が、自身の祖父が書き残した資料を見ただけで、その資料も 300 年を超える歴史を持つ祭りに対してせいぜい数十年前のもので、祭りの詳しいことは分からなかったという。これをもって、歴史をひもといたことで新たな一歩を踏み出したと言われても、ことばだけが先走って内容が伴っていないと感じた。それぞれの祭りが行われた季節や具体的な日時の紹介がないことも不思議に思った。「早船狂言」のパートで、観客の「最高」など普通に聞き取れることばはテロップで表示されるのに、聞き取りづらい狂言のせりふは一切テロップの表示がなく、テロップの有無を逆にすべきだったのではないか。狂言のせりふが聞き取れないため、主役を演じる男性が練習によってどう上達したのかが分からなかった。そういった細かな点で詰め切れていないと感じる部分が多く、残念だった。

○　汗をたらしながら地道に生活している人間の肌感が伝わってくる、ＮＨＫらしい映像で非常に好感が持てた。近年では祭りをブランディングし、地域の外から人を呼び込む動きもある中で、今回取り上げた祭りは地域の中で完結する昔ながらのものだと思った。それを踏まえると、行われた時期が紹介されていないことにも一定の納得感はあったが、もう少し説明があってもよかったと思う。冒頭で「お祭りやイベントがなかったらまとまりを作っていくのは難しい」という地元の高齢者のことばが紹介されていたが、祭りをきっかけに地元に帰ってくる人たちを描いた、地域と人を見つめたよい番組だった。ただ、「再起の祭り」というサブタイトルは、何からの再起なのかかが伝わってこなかったため、あまりふさわしくないように感じた。

○　全体の構成や個々のカット、祭りのクライマックスである夜の場面における暗闇と炎のコントラストの表現など、それぞれかなり完成度が高いと感じた。「早船狂言」で

主役を演じた若者を胴上げするシーンで番組が終わったのもよかった。一方、狂言や笛などを練習するシーンはやや冗長に感じた。祭りやイベントはコロナ禍の影響を最も強く受けたジャンルの一つなので、ようやく復活するよいタイミングで取り上げたと思う。観客のかけ声や合いの手、マスクの有無など、議論を呼ぶ可能性がある部分も一定の割り切りでうまく乗り越えていたように感じた。そのため、祭りに参加した人たちの距離感やスキンシップ、ライブ感などがよく捉えられていた。ただ、私のように都市部で育った人間にとっては、番組で取り上げたような情熱的な地域の祭りに参加した経験がないがゆえに、いまひとつ感情移入しきれない部分もあったように思う。厳しい自然の中で地域のつながりを強固にし、数百年にわたって地域コミュニティーを支えてきた祭りが、コロナ禍の逆風を乗り越えて復活してきたことを伝えたいというのが番組のメッセージだと思う。過疎対策との関わりを伝えたいように感じる部分もあったが、東京から移住してきた中学生の「不便なことが多く東京のほうが楽しい」ということばが多くの人の本音だと思うので、現実から飛躍したようなまとめ方になっていないのはよかった。

○　能登の祭りをテーマに、若者に着目し、祭りが継承されていく様子を取り上げた非常によい番組だった。「早船狂言」では、かつて主役を演じた兄の姿に憧れ自分も同じ役に挑戦する男性の姿が若々しくとてもよかった。若者は祭りにあまり興味がないと思われがちだが、能登地方では祭りを熱狂的に楽しみにしている人が多く、時期になると必ず帰省して参加するような非常に求心力のあるイベントだ。そうした特徴や若者の熱量をうまく捉えていたと思う。「ばっこ祭り」では一度地域を離れたものの、宮司だった兄の後を継ぐために戻ってきた女性を取り上げていたが、祭りについて地域の人から教わる立場から教える立場へと成長していく部分を切り取っていて興味深かった。「向田の火祭り」では、東京から移住してきた中学生を取り上げたのが特徴的だった。若者は今、コロナ禍によって仲よくなるきっかけや仲間とやり遂げる達成感を失っており、それを取り戻そうとしている時期だと思う。この火祭りもそうした達成感を得る機会になっていることが映像から伝わってきた。全体的によい番組だったが、最初に能登地方の祭りの全体像を描いていれば、さらによくなったと思う。能登地方では、７月から１０月にかけて、キリコ祭りだけでも約 200 地区で多様なものが行われているので、その中からどういった祭りにフォーカスしているのかはしっかりと伝えるべきだったのではないか。最初に能登の祭りの全体像が示された上で、番組で取り上げる祭りが整理されていれば疑問に思うことなく見られたのではないか。また、すべての季節に祭りがある地域でもあるので、それぞれの祭りがいつ行われたのかは明示しておく必要があったと思う。「早船狂言」は秋に、「ばっこ祭り」は冬に、「向田の火祭り」は夏に行われるので、この順番で伝えた理由や春の祭りを取り上げなかった理由が気になった。

○　とても興味深いテーマで楽しく視聴することができた。「ばっこ祭り」は 300 年以上続く奇祭で行列を見てはいけないと紹介しており、その様子を放送してもよいのか少し気になった。ただ、何百年も祭りを継続していくことはとても困難だと思うので、継続への強い使命感が映像から感じられてよかった。「早船狂言」の主役を２０歳の大城正樹さんが務めるということだったが、演じるのはその年齢の人でなければならないのか、蛸島の人口がどれくらいで、毎年２０歳の若者がいるのかなどの説明がほしかった。大城さんが、かつて主役を務めた兄の姿に感銘を受けて同じ役を目指したという説明があったが、実際の演技の映像だけでなくそれを見ている子どもたち側からの映像もあれば、「鳥肌が立つ」と表現されていたような感覚がわいてきたと思う。「ばっこ祭り」では参加する氏子の多くが高齢に見えたが、どのように選ばれるのか、それとも志願制なのかといった情報があるとよかったと思う。「向田の火祭り」でも、取り上げていた中学生の一家が能登島に移住してきた理由や島の人口などが気になったので、そうした情報も伝えてほしかった。

（ＮＨＫ側）

地域の記録としてアーカイブス的な意味を持たせたいという思いと、地域で暮らす人びとの姿を人間ドラマとして描きたいという思いで制作した。限られた放送時間の中で３つの祭りを取り上げたため、伝えきれなかった部分もあったかもしれない。記録という側面を考えると、祭りが行われた具体的な日付は入れておくべきだったかもしれない。ただ、番組を見終わったときに受ける印象を考えると、実際の日付順とは異なる順で構成した方がよいと判断したこともあり、具体的な日付は入れなかった。番組の中心となる人物を選んだ理由はいくつかある。まず、祭りのたびに若者が帰ってくるという能登の特徴を描きたかった。次に、能登では地元の人だけで祭りを担っていくのが難しくなってきている実情を描きたかった。一方で、移住者を積極的に受け入れる動きもあるため、移住者が地域の祭りの担い手として参加していく姿も、時代を表す要素だと考えた。サブタイトルにある「再起」ということばには、コロナ禍からの再起という意味だけでなく、長年続いてきた祭りの継続が危ぶまれる中で、その位置づけをもう一度立ち上げるという意味も込めた。ただ、そのあたりの描き方が足りなかった部分もあり、見ている人に伝わりにくかったかもしれない。

○　雰囲気が一昔前のＮＨＫの番組のようで懐かしさを感じた。祭りの伝統や受け継が

れる思いを、それぞれの人物にフォーカスして描いていく構成がよかった。全体として、コロナ禍によって断絶しかけた地域や世代が再度つながっていくさまに非常に希望が感じられ、この先も受け継いでいってほしいと強く思った。ただ、登場人物の年齢が示されず、人となりが想像しにくかった。また、祭りが行われる場所が地図として示されなかったために、どのような地域性があり、どのような祭りで何を祈願しているのかといった全体像が分かりづらかった。「早船狂言」のせりふが聞き取れなかったのでテロップで補足してもらえると、祭りへの理解がより進んだと思う。また、「ばっこ祭り」を紹介するナレーションの「何を祈るかも分からない、氏子すらも知らない。行列を見た者は病気になる」という表現も心配になった。自治体のホームページを調べると、子孫繁栄と豊作を祈る祭りと紹介があり、誰でも参加できるとの記載もあった。これはナレーションの情報と矛盾しているのではないか。見る人の不安を和らげるためにも「そうした言い伝えもある」といった補足を入れたほうがよかったのではないか。

○　素直に感動しながら番組を視聴した。冒頭で祭りの起源や降りかかる災厄から地域を守ってきたとの情報があったことで、祭りには必ず起源があるということを改めて思い起こされた。各地域に祭りがあり、祭りを守り継承してきた人や新しく関わっていく人がいるということがよく伝わってきた。サブタイトルにある「再起」というテーマについては、三者三様の思いをしっかり表現しようとしているとは感じたが、３つの祭りを取り上げたことで時間が短くなり、それぞれを掘り下げるのが難しかったのではないかとも感じた。「早船狂言」は、元となった物語の内容が不思議で、もう少し詳しく知りたいと感じた。「向田の火祭り」と同じような祭りが愛知県にもあり、多くの人を引き付ける地域のシンボルとなっている。番組を見て、何百年も引き継がれてきた理由がよく分かった。今後も地域の魅力ある祭りを取り上げ、伝統の継承につながる番組を制作していってほしい。

○　素晴らしい内容で大変興味深く視聴した。祭りの役割の一つとして、厳しい自然の中で協力しながら地域を支えていく人材の育成があると思う。番組全体を通じて、そうした姿を捉えているのが素晴らしいと感じた。３つの祭りの主人公をそれぞれ１人に絞ったことで、短時間で３つの祭りを知ることができ、期待以上の満足感があった。若い世代の人たちが祭りの当事者や継承者となっているという共通点もあり、それぞれの思いがよく伝わってきた。３人は祭りをきっかけに、郷土愛を深め、地域から離れられなくなるのではないかとも思い、非常に嬉しくなった。「早船狂言」では、祭りにおいて若者のパワーが爆発し昇華していく様子がよく表われていた。地域が好きでよい意味でやんちゃである“マイルドヤンキー”と呼ばれる人たちが大挙して狂言の舞台を見る姿は非常に勢いがあり、地域の若者を引き付ける祭りを作ってきた先人た

ちの知恵は素晴らしいと感じた。「ばっこ祭り」を撮影する際に、意図的なのか後ろ姿を遠くから撮影していることに少し滑稽さを感じた。ナレーションで「何を祈るのか分からない」とあったが、実際に地元の人は何のために祈っているのか意識せずに行っている可能性があるのではないか。祭りには、起源や目的が定かでなくても構わないという部分があるが、これほど定かではないというのもおもしろいと感じた。「向田の火祭り」でも、せっかく立てた柱に、たくさんの人が火を放って倒すという行為は冷静に見れば無意味ではあるが、どの祭りにも無意味さゆえの滑稽さがあると思う。祭りには、地域をまとめる絆を育てることと神を可視化するという役割があると思うので当然とも言えるが、その部分を滑稽さも含めて映し出す視点がおもしろいと感じた。ただ、「再起」というテーマについては、最初は地震などの災害からの再起かと思った。コロナ禍からの再起とは分からなかったので、しっかり伝えたほうがよいと思った。

○　古くから伝わる３つの祭りを通じて、時代やさまざまな変化を超えて継続してきたものを伝えており、しみじみとした温かさや日本のよさが伝わる落ち着いた番組だった。中心となる３人の姿を丁寧に描くことで、祭りを通じて人々が互いに理解し支え合うとともに、自らの存在価値を改めて発見していく過程がよく伝わってきた。３人それぞれが素直で真面目であり、感じたことを率直に表現できる人だったため、見ていて安心できた。また、それぞれの祭りごとに印象に残る場面があり、番組の魅力をより高めていたと思う。都市部で育ったこともあり、個人的に祭りは見るもので絆を強めるものという印象はこれまでなかったが、この番組を見て祭りが人々の心にどう作用しどのような影響を与えるのかを改めて知ることができた。祭りを継続することは、その地域の人たちが自分たちが存在する意味を確認するうえで非常に重要であることにも気づかせてもらった。ただ、紹介された３つの祭りが行われた場所や日付が示されていないのは気になった。さらに、雰囲気が落ち着いていてよいと思う反面、今年撮影したものなのか過去に撮影したアーカイブ映像なのかがよく分からなかった。もう少し臨場感が感じられ、今起きていることを取り上げていることが伝わるような工夫があるとよかった。

○　伝えたいことが多かったからかもしれないが、全体として何を伝えたいのかが分かりにくい番組だった。宮司だった兄の後を継いだ女性を取り上げた「ばっこ祭り」が入ったことで、全体の内容がぼやけてしまったように感じた。祭りの担い手不足や若い人たちの参加というテーマであれば、「早船狂言」と「向田の火祭り」の話をもっと詳しく紹介した方が伝わりやすかったと思う。また、ドキュメンタリーのようにも見えるが、全体的に編集の過程でストーリーを作っていき、そのストーリーにあった映像をつなぎあわせているような違和感を感じた。さらに、番組の構成ももう少し検討する余地があるのではないかと思った。ことしは多くの地域で祭りが復活し、祭りに

関わる人たちの心の動きに大きな変化があった年で、それを描けるのは今だけだと思う。今回の番組では、あえてコロナ禍という要素は外していたと思うが、この時代をアーカイブとして記録に残すのであれば、過去２年できなかった祭りがようやくできたという、この先なかなか生まれないであろう今の状況を取り上げてもよかったのではないか。そうすれば、この映像を何十年後に見たときに「あの時代はコロナ禍があった」と思いながら見ることができると思う。過去の映像を見る際に、その時代の輝きや問題点などを如実に映し出した映像であれば、ぐっとその時代に引き戻されるように感じる。時代ごとの明暗をはっきりさせることを目指すのであれば、コロナ禍を乗り越えて再起したという要素を入れてもよかったのではないか。

（ＮＨＫ側）

コロナ禍の要素をどこまで盛り込むべきか悩んだが、最終的に地域の祭りの担い手となる若い人を中心に描こうと決めた。３つの祭りを取り上げたことで、「早船狂言」の内容や「ばっこ祭り」の由来など詳しい情報を割愛することになった。見る人が必要とする情報は何かという視点は、今後の改善に生かしていきたい。これからも地域で受け継がれる祭りを取り上げていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１１月１９日(土)のＮＨＫスペシャル「円安に物価高 どうなる日本 ～専門家たちの集合知で迫る～」を見た。円安や物価高については至る所で議論されているが、世界規模で複雑に関連し合う要素が多く、各国の政策や政治判断など、少しの違いで結論の振れ幅が大きくなるため、正確に見通すのは大変難しい。副題にある「集合知」というところに新しい可能性を感じて大いに期待を持って視聴した。２５人の経済の専門家の意見を集め、テーマごとに見解の分布を示していたが、それだけサンプル数があるにも関わらず、要因分析や相関分析のような踏み込んだアプローチがなく、期待通りとはいかなかった。多くの専門家の意見を集めた結果、やや中心化傾向も見られ、数の力による説得力の強化にとどまったように感じた。また、グラフの使い方に工夫がなく、２５人の集合知が生かされていないのも残念だった。原材料やエネルギー価格の上昇分や円安の影響を適切に転嫁した一定の物価高を我慢することで、賃上げに結び付け好循環を作り出すという説明も、目新しさはなく大変残念だった。円安を生かすための日本への投資促進やインバウンドへの期待、人への投資の大切さなどさまざまな提言が出ていたが、具体的に何をすべきかまでは示されていないと感じた。

○　１１月２５日(金)のホクロック！「ドリーム★ネイバーズ【夢応援バラエティー】」を見た。今回の主人公はフランス出身で観光アドバイザーのジュリ・ボゥさんだった。彼女はとてもパワフルで、相手の懐に入っていくコミュニケーション能力があり、ツアーの取材のため焼き物職人からさまざまな話を引き出していく姿は非常に楽しめた。一方で写真を撮るのが苦手という意外な面もあり、そのギャップがチャーミングで引き付けられた。ジュリさんは大学で観光学を学び、念願かなって日本で働くことになったと紹介されていたが、職人との会話の中でもともと本作りの職人だったというエピソードが出てきた。彼女の経歴における時系列が分かりにくくなってしまったので、本作りの職人だったことに触れる際、改めて整理して伝える必要があったと思う。さまざまな人種・国籍の人が日本で暮らすようになっているが、地域に愛着や誇りを持ってもらい、一体となって地域の魅力を高めていくことは今後の共生社会において非常に大切だと思う。そういう観点から、番組で紹介された、都市に対する市民の誇りを意味する「シビックプライド」という概念は今後大切になっていくと感じた。「自分の都市を友人や知人に勧めたいか？」を問う調査で、名古屋市が最下位だと紹介していたが、名古屋市の人はご当地グルメなどを中心に地域に誇りを持っているイメージがあったので意外だった。また、調査していた全国８都市の中に京都市や神戸市が含まれているのに金沢市がないなど気になる点があったので、どのような調査なのかもう少し補足してほしかった。

○　１１月２７日(日)のＮＨＫスペシャル混迷の世紀　「第４回 世界フードショック～揺らぐ『食』の秩序～」を見た。世界の食料安全保障がテーマで、農業関係者の多くが関心を寄せる内容だったと思う。ウクライナ危機後、ロシアが世界の食料や農業生産資材の鍵を握る状況になりつつあり、中国は強い購買力で需要の主導権を握ろうとしている構図が最初にしっかりと説明されていた。そのうえで、日系の穀物企業の副社長が調達に奔走する姿や資材価格の高騰が農家を直撃した様子を取材し、国際社会の中で日本の食料や農業が置かれた危機的な状況を伝えていた。日本の食料安全保障を考えるうえで、現状輸入に頼っている肥料や飼料を、国内で生産する体制をどのように整備しそれを保障する価格制度をいかに確立するかが重要だという視点も示されていてよかった。食料・農業・農村基本法の制定から約２０年となり見直しの動きがあるが、食料の生産と消費が価格面で折り合うように国がしっかりと政策の舵を切ることが必要だと思う。番組内で経済学者のジャック・アタリさんが指摘していたように、農業が収入と社会的地位の面で魅力的な産業であるようにすること、食を自国で賄うという方向に考え直すこと、食を豊かさの象徴ではなく生きる土台であると意識を転換することなどが大切だと思う。今後もこのような番組を制作していってほしい。

○　１２月１日(木)の「まるっと！みえ」内のコーナー「まるっとトーク」を見た。「御浜が誇る市木木綿の魅力発信」と題し、国内で唯一となった市木木綿職人の向井浩高さんが出演していた。「市木木綿の製品は向井さんの布団店で購入できるほか、インターネットで紹介している製品を電話で注文することもできる」と紹介していたが、もう少し実際の購入につながるような工夫はできないのかと感じた。民放とは異なり、ＮＨＫは特定の商品の宣伝ができないことは理解しているが、購入する人がいなければ伝統産業を受け継いでいけない部分もあり、より視聴者の心を動かすような番組づくりを意識してもよいのではないか。また、「まるっと！みえ」のコーナーの動画は津局のホームページに掲載されているが、あまり認知されていないと思う。このような動画が、若い世代との接点や企業連携などの突破口になる可能性もあるため、広く知ってもらう工夫や、各放送局の動画をまとめて掲載したり、ＮＨＫプラスで配信したりするといった取り組みがあってもよいと思う。

○　１２月２日（金）の東海　ドまんなか！「“猫に優しい街”の挑戦」を見た。自分の周囲にも猫が好きな人は多く、飼い猫の手術に高額の費用を支払ったという話を聞いたこともあり、関心の高いテーマだった。岐阜県飛騨市にある保護猫施設から、タレントの清水ミチコさんと田所拓也アナウンサーが伝えていたが、２人ともリラックスした服装で好感が持て、非常に見やすかった。地域の猫の実態を調べることで、その地域に暮らす人たちが抱えるさまざまな課題が見えてくる「猫勢調査」はとてもよい取り組みだと思う。また、猫の保護活動には多額の費用が必要だと思うので、行政と連携してふるさと納税で資金を集めるのはよいアイデアで、自分も協力したいと思った。岐阜県は猫の殺処分数が全国ワースト７位だと紹介していたが、他のどの都道府県が多いのかも知りたかった。

○　１２月２日（金）の東海　ドまんなか！「“猫に優しい街”の挑戦」を見た。猫の殺処分が全国でワースト７位という岐阜県での取り組みを紹介していた。飛騨市との官民連携のソーシャルビジネスとして猫の保護活動を続ける中で、地域に住む人間側の問題や地域が抱える課題も解決しようという取り組みだった。高齢化率が約四割の飛騨市において、飼育放棄や多頭飼育の崩壊などが、飼い主の高齢化や住民の孤立化といった地域の課題から起きていることがよく分かった。そして、民間の活動に行政が関わることでふるさと納税の対象となり、活動資金の調達に成功しているという説明があった。行政が猫のために予算を確保することは難しいが、猫のためにふるさと納税をしたいと思う人が多くいることは納得でき、共感できるよい取り組みだと思った。番組を見る前には、飛騨市と猫の保護活動との関連性はよく分かっていなかったが、番組を見てなるほどと思った。地域の魅力の発見は、地域でどういう思いを持って活

動している人がいるのかを発見することにもつながると感じた。

○　１２月８日(木)の「まるっと！」内の企画・ＫＹジャーナル「男女の賃金格差」を見た。１２月３日に開催された国際女性会議ＷＡＷ！でも男女間の賃金格差について議論されていたので、タイムリーでよいテーマだったと思う。短い放送時間の中で、格差の現状や原因をとても分かりやすく伝えており、説明力の高さを感じた。働く側、企業側双方からの関心が高く、大きな社会問題でもあると思うので、これからも継続して伝えていってほしい。

○　１２月９日(金)の東海　ドまんなか！「いまに戦争を伝える 愛知発“幻のジブリ映画”」(総合 後7:30～7:57　東海３県ブロック・静岡県域)を見た。実現しなかった“幻の映画”の原作小説「国境」の物語をベースに反戦や人種問題、思春期における恋愛といったテーマへと展開していた。実写部分と小説の挿絵が効果的に組み合わされており、この映画が実現すれば見てみたいと思わせる番組となっていた。また、自身が中学生の時に「国境」を読んで戦争について考えたという小学校教諭の西村みやまさんが今の子どもたちにもその思いを伝え続ける姿を紹介し、スタジオに招いた子どもたちにも、戦争や平和について意見を聞くという構成もよかった。全体として、戦争をどう教え、伝えていくかを考える番組となっており非常に興味深かった。ただ、限られた時間の中では物語の全容を知ることができず物足りなさを感じた。「国境」を読める方法がないか調べてみたいと思った。

○　１２月９日(金)の東海　ドまんなか！「いまに戦争を伝える 愛知発“幻のジブリ映画”」を見た。実現しなかった“幻の映画”の原作小説「国境」の作者・しかたしんさんの妹、スタジオジブリの鈴木敏夫さん、高畑勲監督の生前の映像や音声、高畑監督の家族など幅広く取材しており、非常に丁寧に制作されていると感じた。小説の主人公が、日本の統治下にあった朝鮮半島や旧満州で、失踪した親友を探し歩く過程で、人種や民族による差別に気付いていくというストーリーで、まさに我々が今考えなければならないないテーマだと思った。また、中高生をスタジオに招いて意見を聞いていたのもよかった。その中の一人から「戦争と聞くと、アメリカに負けて支配されたというイメージしかなかったが、日本が支配する側だったことを初めて知った」という発言があった。近年、日本を戦争の加害者として捉える歴史観が薄れてきている印象があるが、その点について改めて考えさせられる非常によい番組だった。ただ、スタジオジブリが映画化しなかった理由の説明がなく、画竜点睛(がりょうてんせい)を欠いたようで残念だった。

○　１２月９日(金)の東海　ドまんなか！「いまに戦争を伝える 愛知発“幻のジブリ

映画”」を見た。映画の原作となるはずだった小説「国境」のあらすじを、小説の挿絵を効果的に使って表現していたが、アニメーションよりも迫力があり、すばらしかった。スタジオに若い世代を招き、戦争について語り合う構成もよかったが、彼らがどのように選ばれたのかが気になった。男女比などジェンダーバランスへの配慮は感じたが、例えば障害のある人の中にも戦争について発言したい人がいると思うので、そうした人が自然な形で含まれていてもよかったのではないか。ロシアによるウクライナ侵攻が続いていることやジブリパークの開園などに放送のタイミングを合わせたのかもしれないが、若干もったいないと感じた。第二次世界大戦の何らかの節目に合わせて放送すれば、戦時中の日本の行為について、歴史的な認識を振り返る機会になったと思う。映画を監督するはずだった高畑勲さん世代の戦争に対する思いを、記録として残しておくことは､戦争の実態を知らない世代にとって重要になってくると思う。三重県生まれでもある高畑さんを取り上げた番組をぜひ制作してほしい。

○　１２月９日(金)の東海　ドまんなか！「いまに戦争を伝える 愛知発“幻のジブリ映画”」を見た。映画の原作となるはずだった小説「国境」は初めて知ったが、ストーリーが番組内で分かりやすく伝えられており、興味を引かれた。また、教育の場で活用するにふさわしい番組だとも感じた。中高生などに視聴してもらい、思ったことや感じたことを自分たちのことばで話し合ってもらえば、今抱えている学校内での問題と戦争を関連させてみるなど主体的に物事を考えるきっかけになるのではないか。スタジオに出演していた中高生たちは堂々としており、意見もしっかりしていて感心した。こんなに素晴らしい人たちをどのように選んだのか知りたいと思った。また、映画化がなぜ実現しなかったのかが気になった。その理由の説明があれば、より安心して視聴できたと思う。

○　１２月１２日(月)のドキュメント２０ｍｉｎ.「ヘリコプターが飛ばなくて」を見た。ことし４月、東京の航空会社が福井空港と国内のテーマパークをヘリコプターの直行便で結ぶ計画を発表した。福井空港には定期便がなく、この計画には多くの県民が関心を寄せていたが、計画は現在もまだ実現していない。その理由を福井局の記者が追い、計画を発表した航空会社への取材のほか、片道約１時間３０分という所要時間や約２万円という金額設定について専門家にインタビューするなどして検証していた。限られた放送時間の中、情報量が多く急ぎ早の展開だったが、疑問に思っていたことが明らかにされていき、今回の騒動をきっかけに別の航空会社から福井空港に何か新しいサービスが出来ないか問い合わせがあったという前向きな終わり方となっていて非常によかった。ただ、番組ホームページにある「これまでの演出、文法、テーマから自由な若手制作者たちが、新しいテレビの形を模索する」というコンセプトを念頭に置くと､チャレンジングという点でもの足りなさを感じた｡記者がナレーション

も担当し、１人称目線で語るスタイルは確かに斬新でおもしろさもあったが、２０分間同じ人が話し続けると途中で飽きてしまうと同時に、客観的なコメントも欲しくなった。

○　夜ドラ「作りたい女と食べたい女」を、心奪われるように楽しんで見ている。ジェンダー・セクシュアリティの考証がしっかりされており、非常に好感を持っている。

○　まるっと！」は、地域の農林水産業の活力につながる話題を取り上げていると感じる。１１月２５日(金)の放送では、林業はリスクもあるが働くスタイルとして若い人たちの間で人気が出つつあると紹介していた。よい取り上げ方で、興味深く見ることができた。

○　先日、我々の大学の学生と金沢局の職員によるディスカッションの場を設けた。その中で、若者とＮＨＫとの接点をどう増やすかについて議論した。若者はＮＨＫの番組やイベントを高く評価しており、ＮＨＫは生まれたときから自分たちと成長をともにしてくれる、学びが多いメディアだという認識がある。また、最近の若者は自己実現を重視する傾向にあり、自己実現を成し遂げるために一緒に成長していけるパートナーを求めている。ＮＨＫはそのパートナーになりうると若者から非常に期待されていると感じる。教育番組だけでなくドラマやバラエティーといったエンターテインメント性が高い番組でもＮＨＫの場合は、学びに活用できることが民放にはない特徴だと思う。教育の世界でも、ゲームを使った教育を取り入れるなどエンターテインメント性を重視し始めている。教育用の教材は、情報の信頼性と学びの要素が重要だが、その意味でもＮＨＫの番組との親和性は非常に高いと思う。ただ、若者とＮＨＫとの接点の少なさが、魅力的なコンテンツを生かし切れていない現状につながっているとも思う。今後は、大学を始め小中高の授業の中でＮＨＫのコンテンツを取り入れていく仕掛けを考えていく必要があると感じる。まずは中部地方の番組からでもそうした分野に挑戦できないのか。取り組むにあたって何か障害が存在するのか、ぜひ意見や今後の方針について聞きたい。

（ＮＨＫ側）

若者との接点を増やす必要があるという意識はＮＨＫの中で広く浸透しており、ＮＨＫのコンテンツが若者の学びに活用できるという意見はありがたく受け止めた。ＮＨＫのコンテンツを学びに活用してもらうことに障害は特になく、これまでもさまざまな試行錯誤を続けてきた。例えば、エンターテインメント性が高く、幅広い世代の学びにつながるＢＳプレミアム

の番組を短く編集し、総合テレビやＥテレで放送している。また、インターネットで「ＮＨＫアカデミア」というコンテンツも立ち上げた。各地域の放送局でも、学校に出向いてＮＨＫのコンテンツに触れてもらう出前授業などを行い、ＮＨＫの価値を実感してもらい末永くつながりを持ってもらえるような取り組みを続けている。幅広い世代との接点を増やしていくことは容易ではないが、今後もさまざまな取り組みに挑戦していきたい。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

２０２２年１１月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１７日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、「まるっと！ぎふ」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	坂田　守史	((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)
副委員長	榊原　陽子	((株)マザーリーフ代表取締役)
委　員	稲垣　貴彦	(若鶴酒造(株)取締役)
	大西かおり	(特定非営利活動法人 大杉谷自然学校　校長)
	岡安　大助	(中日新聞社取締役)
	成島　洋子	((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)
	平本督太郎	(金沢工業大学ＳＤＧｓ推進センター長)
	廣田　憲吾	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	安井　香一	(東邦ガス株式会社相談役)
	リムリーワ	(岐阜大学工学部教授)

（主な発言）

＜まるっと！ぎふ(総合　１０月７日(金)放送)について＞

○　日々放送しているニュースとして、取り上げる一つ一つのトピックが地域の視聴者に親しみを持って伝わるような構成になっていたと思う。指１本で簡単にコードが演奏できる可児市発祥の楽器「一五一会」の愛好家が集まるイベントをリポートしていたが、映像から可児市文化創造センターａｌａが会場であることが分かった。ａｌａは「芸術の殿堂ではなく市民の場である」というコンセプトを掲げる公共の劇場なので、ふさわしい場所で実施されたイベントを取り上げていてよかった。取材した齋藤恵実記者が、演奏の簡単さを示すために自身で弾き、歌まで歌っていたこともほほえましく、番組制作における岐阜局の雰囲気が伝わってきて好感が持てた。「一五一会」は２０年前に可児市のギターメーカーと沖縄出身のバンド・ＢＥＧＩＮが共同で開発したということだが、開発に関わった人の話や、可児市にどれくらいの教室があるのか、全国から集まった 300 人のファンのうち地元の人が占める割合、演奏を楽しんで

いるのはどのような人なのかなど、具体的なデータや一人一人の顔が見えてくるような要素があれば、より内容の濃いものになったのではないか。

○　新型コロナの水際対策の大幅緩和により外国人観光客の増加が見込まれる中、観光で成り立つ高山市の病院では受け入れ態勢の遅れが懸念されていると伝えていた。日本では経済的なメリットも含めて水際対策が緩和され、世界的にも緩和された国が増えている。そうした状況において、高山市ではコロナ禍前に病院で治療を受けた外国人観光客がどれくらいいたのかといったデータと合わせて伝えないのは、いたずらに不安をあおることになるのではないかと感じた。一方で、関市の「刃物まつり」が４年ぶりに例年の規模で開催されることも紹介しており、新型コロナに対する番組のスタンスが分かりにくくなっていた。公共放送としてさまざまな立場や意見を伝えることは大事だが、視聴者の感情に訴えかけるのではなく、データに基づいて物事の両面を理解してもらう番組にしなければ､単に不安をあおり､｢外国人観光客が増えて心配」という誤ったメッセージを発しかねないと思う。｢一五一会」に関しては、どうして指１本でコードを演奏できるのか、ギターや三線（さんしん）とは何が違うのかを掘り下げれば、どこが画期的でどうして簡単に演奏できるのかがより伝わったのではないか。イベント名が「一五一会世界大会」だったが、今回で何回目なのかなど数的な情報が紹介されなかったことも気になった。ただ、楽しそうな雰囲気で、楽器がつないだ岐阜と沖縄の関係や、参加者間のコミュニティーの広がりが映像の力として伝わってきたのは非常によかった｡おおまかな価格やどこで買えるのかなどの情報があれば、「一五一会」を始めたいと思った人に役立つ内容になったのではないか。

○　自分が住んでいる地域のＮＨＫの夕方６時台のニュース番組と比べると、スタジオが華やかで美しいと感じた。取り上げた内容の連絡先などの電話番号が画面に表示されていたのはよかったが、電話をかけない若い人も増えているので、ＱＲコードもあわせて表示するなどの工夫があってもよかったと思う。｢一五一会世界大会」を紹介する際に「コロナ対策を実施して行なわれています」とテロップが出ていたが、参加者はマスクを外して近い距離で歌っており、映像からは観客も参加するコンサートのように見受けられた。参加者、出演者、取材者それぞれが満足している様子がインタビューからも伝わってきたが、観客の声出し自粛が続いてきた中で久しぶりの参加型のコンサートならば感動するは当然であり､｢一五一会」という楽器の力によるものではないと、うがった見方もできるのではないか。主催者の「皆さんいきいきと歌っていて、楽しくてよかった」というコメントを使っていることから、盛り上がりの一因が久しぶりの声出し参加型だった点にあると制作者側も認めていると感じ、その部分をテロップ１枚で済ませるのは説明が足りないのではないかと思った。映像ではコロナ対策が不十分に見えただけかもしれないが、視聴者としては画面で見えているもの

がすべてであり、対策が不十分だと感じられる映像やインタビューは使わないというシビアな判断もあったように思う。あるいは、コロナ禍でコミュニケーションを取りたい気持ちが高まる今、声を出して歌いたい本能的な欲求と自粛すべきという不安を両立させるには「感染対策をしている」という一文だけでは不十分だと思うので、いっそのことテロップを出さない選択肢もあったのではないか。今後、楽器の誕生から２０周年の番組などを制作するのであれば、多くの人が手軽に楽しめる楽器がどのようにできたのかといった開発秘話や、学校教育への導入など可児市を代表する楽器になるための展開などを盛り込むと見応えのあるものになると思う。齋藤記者の丁寧な取材と実際に演奏する姿からは、すばらしい楽器が可児にあるのだと広く伝えたい気持ちがよく伝わってきた。

○　少し前に放送されたニュース番組なので、必要な情報を必要なときに正しく伝えているかを意識して視聴した。最初に、新型コロナの水際対策の大幅緩和を取り上げ、外国人観光客に感染者が多数出た場合の対応準備に懸念があるとして高山赤十字病院を取材していた。水際対策の緩和は突然降ってわいた話ではなく、世間は緩和への期待にあふれていた時期だったのでやや違和感があった。高山赤十字病院は災害や感染症の対応において自律して先頭を走っている医療機関であり、副院長の竹中勝信さんの「でもたぶん（外国人患者が）来たらやるのが医療者だと思う」のことばがすべてのように思え、受け入れ態勢の準備が遅れていることを伝える意図がよく分からなかった。岐阜県内の感染状況を伝える棒グラフで、横軸が日付、縦軸が感染者数となっていたが、横軸の期間が１か月になっていた。これまでの感染者数のピークは大きかったので、長期的な傾向を捉えるためには１年や半年といった期間で示す必要があるのではないかと思った。「一五一会」のリポートは、コロナ禍で制限されてきた人とのふれあいを求める熱い思いがよく伝わってきた。ただ、楽器自体の説明が不足していると感じた。指１本でコード演奏ができるとのことだが、一般的なメジャーコードは１度、３度、５度の３つの音から構成され、マイナーコードは３度の音を半音下げるのでどのように対応するのか気になり自分で調べてみた。すると、「一五一会」は１度と５度とそのオクターブでチューニングされており、弦が４本あるのに３度の音が入っておらず、３度の音は歌やほかの楽器の音で埋め合わせるとのことだった。ここまで説明すれば、名前に一と五の当て字が入っている理由も分かり、ギターのコード演奏が難しくて挫折した人などにも訴求できたと思う。

○　新型コロナの水際対策緩和の話題では、高山市の「外国人のための“ワンストップ医療相談窓口”」を紹介していたが、これまで相談実績がないとのことだった。視聴者がよりイメージしやすいように、実績がある別の自治体の取り組みもあわせて紹介するとよかったのではないか。白川村に新しく展望台が完成した話題では、白山林道管

理事務所の知手裕一所長が「秋の白川郷の雲海は、ことばが出ないほどすばらしい」と話していたが、取材日が雨だったためか雲海の映像がなかった。過去の映像でもよいので、見せてほしかった。「一五一会」は指１本で演奏できる手軽さがお土産などにもよいと思った。宣伝になる可能性もあり難しいとは思うが、値段や購入できる店舗を紹介してほしかった。また、イベント名が「一五一会世界大会」だったが、海外からの参加者がいるのか、いるのであればどこの国の人なのかが気になった。番組の最後の次回予告は、テロップの文字だけだったが、より見たいと思えるような映像もあればよかったのではないか。

○　真面目に制作されてはいるが、一昔前のＮＨＫが放送していた夕方のニュース・情報番組という印象を受けた。「おはよう日本」や愛知県向けの「まるっと！」では、アナウンサーや気象予報士など出演者それぞれの個性が、ニュースとニュースの間をつなぐコメントとして豊富に出てきていると感じる。一方、「まるっと！ぎふ」は昔ながらのスタイルで、演劇で例えれば台本読みの段階を見せられていると感じた。出演者があまり生き生きとしておらず、ニュースの間をつなぐコメントは台本を読んでいるかのような雰囲気で残念だった。「一五一会」のリポートでは、楽器名の由来やギターと三線（さんしん）のよさを合わせ持つとはどういうことなのか、なぜ指１本でコードが演奏できるのかなど、知りたいと思うことが分からず、視聴者の関心に十分に応えているとは言えないと感じた。取材した記者が実際に演奏して歌うという演出は親しみやすくてよかったが、見た人が知りたいと思うポイントはしっかりと押さえてほしかった。また、関市の「刃物まつり」が４年ぶりに例年の規模で開催するという話題でも、例年の規模が何なのかが分からなかった。かつてどういった催しで、それがどう縮小し、どう元に戻るのかという過程があってこその「例年の規模」になると思うので、ことばだけでは具体的に伝わってこず残念だった。ニュースを伝える側が、見ている人も基本的な情報を知っていることを前提として放送しているように感じた。見る人の多くは、それぞれの話題に初めて触れるので、理解してもらうために必要な最低限の情報が含まれていなければ、見た人が欲求不満になってしまうと思う。

（ＮＨＫ側）

感染対策に関するテロップを入れたのは、放送を見た人からイベントの主催者に対して批判が集まるようなことはあってはならないとの判断からだった。「一五一会」のリポートでは、コロナ禍が明けるのではないかという期待感の中、可児市で世界大会が初めて開催され、みなさんが楽しむ様子を最も伝えたかった。地域局としては、地元の視聴者に誇りを持ってもらえるような情報を伝えることが大事だと考え、今回はイベントを

楽しむ様子を中心とした。ただ、楽器の特徴や名前の由来に関する情報なども盛り込めればよかったと思う。今後の改善に生かしていきたい。

○　番組全体を通じて、コロナ禍から平常の状態に戻りつつある様子が伝わってきた。特にそれぞれの業界関係者や地域の人々にとって、ニュースを通じて素直に変化を感じられる内容だったと思う。また、これまで病院や行政の担当者のインタビューはオンラインが多かったが、現場で取材した映像を見せてくれるのはよいことだと思った。「一五一会」のリポートでは、担当した記者の人柄が感じられてよかった。ある番組のキャスターや記者を愛称で呼ぶことがあるように、出演者自身の人柄や個性を出していくことは、視聴者が番組に親しみを感じるために必要なことだと思う。特に夕方の時間帯は、夕飯の支度などをしながら見ている人が多いのではないかと思う。そうした視聴者にとって、親しみやすくなじみのある人が語りかけるニュース番組は非常に大事であると感じた。

○　公共放送としての重要な役割を担っていると思うと同時に、個人的には苦手と感じられる番組だった。各家庭でテレビがずっとついていることを前提とした番組の作りとなっており、視聴者が望んで見にいくような番組ではないと思った。人々がインターネットやアプリを通じて自ら情報を取りにいくことが基本となっている今の社会において、時代にそぐわない番組との印象を受けた。ただ、番組で伝えられていた情報は有用なものが多かったので、情報とそれを必要としている人をいかにつなげるかを考える必要があるのではないかと思う。放送と通信では仕組みが異なるため難しいとは思うが、例えば、動画配信サービスのように個人の興味や関心がデータとして蓄積され、それに基づいて「きょうはこうしたニュースが流れる」と知ることができれば、番組を見てもらえる可能性は高まるのではないか。ＮＨＫが毎日制作しているニュース番組は非常に価値が高いコンテンツのため、その価値をいかに最大化するかを今後検討していってもよいのではないか。また、手製の銃に関する情報提供先や旧統一教会に関する相談窓口といった情報はできる限り多くの人に行き渡らせる必要があり、公共放送として伝える意義は非常に大きいと思う。ただ、こうした情報はインターネットやアプリで情報を得ている人には届きにくい。公共メディアとして、テレビから情報を得ていない人たちに届けられなくてもよいのかと疑問に思った。これまでＮＨＫは、あまねく情報を届けるという大きな役割を果たしてきたと思う。その役割がうまく果たせなくなった場合、日本の社会はどうなってしまうのかと不安を感じる。今後はそうした観点でも検討していってもらいたい。

○　番組内では新型コロナに対して不安を感じさせる要素と、共存しながら前に進もう

という要素がモザイクのように入り交じっており、制作者としてもそれぞれの項目をどの順番で伝えるべきか悩んだのではないかと思った。一つ一つのニュースでは、「刃物まつり」の開催の経緯や具体的なイベントの内容が理解でき、旧統一教会などに関する情報提供先の電話番号を表示するなど分かりやすく伝えていた。情報提供に関するニュースでは、メールでの相談も可能とあったため、メールアドレスをＱＲコードで伝えることもできるのではないかと思った。新型コロナの感染状況を伝える際に、重症者数が１名となっていたが、ほかの病気であれば報道しない人数ではないかと感じた。感染状況について、何をどこまで報道するのが適切なのか考えさせられた。「一五一会」のリポートで、取材した記者が楽器を演奏している様子はほほえましくてよかった。ただ、なぜ指１本で弾くことができるのかやコードの演奏方法についての説明もあるとより分かりやすかったと思う。番組最後の視聴者からの写真投稿コーナーでは、視聴者がおもしろい情報を持っていることが分かり、地域密着のよい番組だと感じた。

○　地方局のニュース番組を視聴する際に、個人的には地域らしさを感じられるスタジオの美術を楽しみにしている。美濃和紙や多治見のタイルのようなイメージのほか、山と川のイメージがスタジオ内で表現されていたり、番組全体のデザインも淡いトーンで統一されていたりと、デザインに統一感があったと思う。一方、番組としては全体的に硬い印象を受け、台本をただ読んでいるようで抑揚がなく、何を伝えようとしているのが明確ではないと感じた。暗いニュースを伝えるときと明るいニュースを伝えるときの話し方のトーンが同じで、見ている視聴者は退屈すると思う。ニュースの内容は、新型コロナの感染対策と観光客誘致とのせめぎ合いが感じられ、伝える順番や構成はよく考えられていると思った。だた、もう少し個性があってもよいのではないかと感じた。「一五一会」のリポートは、どの部分に注目して見ればよいのかがよく分からなかった。可児市で初めて世界大会が開催されたことを中心に伝えるのであれば、もう少し違う伝え方もあったのではないかと思った。イベント中心というのであれば、歌手・ＢＥＧＩＮのメンバー全員分のインタビューを入れる必要があったのかも疑問に思った。

○　高山赤十字病院での新型コロナ対策のニュースでは、地方の病院の特殊な事情が分かり興味深かった。「一五一会」のリポートでは、可児市生まれの楽器と歌手・ＢＥＧＩＮとの関係について初めて知ることができた。各県向けのニュース番組の中に、こうした新鮮で興味深い情報があるというのは新しい発見だった。大阪局発の「列島ニュース」のように、東海北陸の各地域向けのニュースを集めた番組を見てみたいと思った。また、こうしたニュースを個人で選択して視聴できる環境を構築してほしいと思った。

（ＮＨＫ側）

「一五一会」のリポートで、何を中心に伝えたいのかが分かりにくいという指摘については、さまざまな要素を盛り込みたいという思いの強さが影響したかもしれない。ただ、岐阜県向けの番組として、視聴者へ地元に関する情報を伝えたいということが前提としてある。このリポートは沖縄県でも放送され、沖縄の方にも喜んでもらえた。限られた地域に向けた番組ではあるが、地域に密着した情報に価値を感じる人に楽しんでもらえるコンテンツとなっていれば、制作者としてはありがたいと考えている。どのような人間がどういう思いで番組を作っているかを、地域の視聴者に知ってもらうことが重要だと考えている。担当記者らを出演させ、その人柄や個性を生かし柔らかな印象につながる演出は今後も続けていきたい。

雰囲気が硬く一昔前のニュース番組のようだという指摘があったが、東京や名古屋のような大都市圏向けのニュース番組ほど新しい演出などに挑戦できないという思い込みがあったのかもしれない。視聴者の中心は高齢かつ自宅でテレビをじっくりと見ている人だと意識すると、どうしても昔ながらの番組作りから脱皮できない部分もあったと思う。ただ、視聴者は全国向けや大都市圏向けのニュース番組と横並びで見ているのは確かで、率直な意見を聞けてありがたかった。

＜放送番組一般について＞

○　１０月１０日(月)のドキュメント２０ｍｉｎ.「＃コロナ世代と言われて」と１１月８日(火)の「まるっと！」内の企画・ＫＹジャーナル「相続準備は元気なうちに」を見た。どちらも制作者の「体験して感じたことを伝えたい」という思いが出発点となり、それが公共放送の中で実現している番組だと思った。特に「ドキュメント２０ｍｉｎ.」は、大学時代にコロナ禍を経験し喪失感ともやもやした気持ちを抱える入局したての２２歳のディレクターが制作しており、等身大の思いが伝わってきた。大人になってから感じる２、３年と学生時代に経験する２、３年は人生に与える影響の大きさが違うのだと改めて感じた。コロナ禍で学園祭や部活動などの伝統がうまく伝えらえず苦労している様子を見ると、記録としてこうした番組をしっかり残しておくことは大切だと思った。

○　１０月１７日(月)のドキュメント２０ｍｉｎ.「Ｕｎｔｉｔｌｅｄーわたしは、ジャズに生きたいー」を見た。１８歳のサックスプレーヤー・佐々木梨子さんが、丘の上でサックスを吹くシーンから始まり、ライブハウスでの演奏に切り替わったが、すばらしい演奏で非常にインパクトがあった。テレビでジャズを取り上げる場合、見る人の幅が広いためか、演奏形式などの解説から始まることが多い。しかし、この番組ではジャズのだいご味について彼女なりのことばで語られており、かえってジャズの本質をつかんだ番組になっていると感じた。学校の友人が進学や就職を目指す中、プロのミュージシャンを目指してアメリカの名門音楽大学へ短期留学する姿を描いていた。留学を経て、積極的な姿勢やコミュニケーション能力、お互いの理解が必要だと気づいていく様子が伝わってきた。番組全体として、構成が説明的でないところにとても好感が持てた。最後のライブのシーンで演奏されたオリジナル曲の完全版を番組ホームページで聞くことができ、番組の付加価値として大変よかったと思う。

○　１０月２８日（金）のみえＤＥ川柳(ＦＭ 後 6:00～6:50 三重県域)を聞いた。橋爪秀範アナウンサーの軽妙洒脱な司会進行とゲスト選者・丹川修さんのユーモアを交えながらも手厳しい批評、番組途中の老舗和菓子店からの非常に明るい中継など番組を通して楽しく聞くことができた。最後に選者から、お題の「続く」を受けて「継続は力なり」という格言を引用した句が多かったとの指摘があった。私自身もそのような句を作ることが多く、選者の「自分の観点や自分のことばで表現してほしい」というコメントが胸に響いた。今回、396 句もの投稿があり、リスナーに親しまれていることが伝わってきた。月に１度の放送で 100 回も続いている理由は、そこにあるのだと感じた。日常生活の中でふと聞いたラジオのことばが耳に残り、嫌なことも川柳でさらりとユーモアに変え、和ませてもらえる非常によい番組だった。

○　１１月４日(金)の東海　ドまんなか！「続く“見えない被害”　最多“記録雨”の衝撃」(総合 後 7:30～7:55)を見た。番組前半では、静岡県で９月に発生した大雨被害のその後の状況を伝え、気象予報士が発生のメカニズムを解説していた。大雨は台風の接近によるものだと考えていたが、番組では黒潮からの水蒸気による影響が大きいという解説があり非常に参考になった。また、先祖代々、数百年にわたり同じ場所で暮らしてきたという男性の家が被災し、「(昔とは) 気候が全く変わってしまった」と語る姿には気候変動の現実を突きつけられた。後半は、支援の対象とならない被害や生活環境の変化による長引くストレスなどの“見えない被害”について取り上げていた。また、仙台市や磐田市の事例を挙げ、行政の支援がどうあるべきかを解説していた。被災者からの申請を待つのではなく想像力と共感力が必要だと伝え、最後にセーフティネットとしての地域のつながりが必要だとするまとめ方が大変よかった。非常

にわかりやすい構成だと感じた。９月の大雨の被害について、報道されていることは一部であり、まだまだこのような状況が続いていることを改めて知ることができた。名古屋局と静岡局の２局による取材の結果がよく反映された充実した番組だった。

○　１１月４日(金)の東海　ドまんなか！「続く“見えない被害”　最多“記録雨”の衝撃」を見た。大雨被害というと九州のイメージを持っていたが、過去１０年で記録的短時間大雨情報が全国で一番多く発表されたのが岐阜県と静岡県だと知り、非常に驚いた。線状降水帯が出来るメカニズムや黒潮の流れの変化が大雨増加の要因になっていることをＣＧで説明しており､非常にわかりやすかった｡この地域の視聴者にとって、よい警鐘になったのではないか。地球規模での異常気象や温暖化など、いろいろな面で環境が変わってきており、これまでの認識と現実に起きていることの間にずれが生まれてきているように感じる。そのことを改めて教えてくれる非常に貴重な番組だったと思う。後半で“見えない被害”とあったが、これはおそらく“見過ごしてきた被害”だと思う。メディアは床上浸水した棟数などの数字として捉えたり、１週間や１年という区切りごとにリポートしたり、“点”でしか伝え切れていない。しかし、実際には被災した人それぞれの事情があり、その状況の中で日常が続き、大変な思いをしている。メディアがいくら報道しても直接的な援助とはならず、結局は行政に頼らざるを得ない部分がある。番組では仙台市などきめ細かな支援を行っている自治体の例を挙げ、行政に働きかける重要な役割を果たしており非常によかった。

○　１１月４日(金)の中部ネイチャーシリーズ「北アルプス“地図にない温泉”」(総合後 7:56～8:39)を見た｡映像の美しさに感動し､このシリーズのファンになっている。秘湯探検家の渡辺裕美さんはとても明るく、温泉への愛を感じた。美しい山々の向こう側に温泉を発見した時の感動がよく伝わってきて、一緒に山登りをして温泉に入っているように思え、とてもすがすがしい気分になった。

○　１１月５日(土)の探検ファクトリー「番組制作工場！ＮＨＫ大阪放送局を探検」を見た。前半では連続テレビ小説「舞いあがれ！」の美術セットに着目し、ドラマの雰囲気を作り出す大道具や小道具などを取り上げていた。セット内に置かれている雑誌や飲み物の容器は全てオリジナルで細部まで作り込まれており、ＮＨＫならではの配慮と遊び心が感じられておもしろかった。画面にはほとんど映らず、視聴者からは見えにくい仕事ではあるが、働く人の一生懸命さがよく伝わってきた。また、ドラマ撮影に必要な設備が整ったスタジオが全国のＮＨＫに何局あるのか、数多くの大道具や小道具は、撮影終了後はどうしているのかも気になった。後半では、災害発生時に使用する原稿支援システムや首都圏で大規模災害が発生した場合に全国放送をバックアップする機能などが紹介されていた。放送局として社会や人命を守る役割の重大さ

や携わる人たちの真剣さを感じた。１つの番組の中で、娯楽の提供とインフラとしての使命という二面性が表現されており、ＮＨＫが人々の心に潤いを与えながら、人命を守る責務も負っていることが分かるよい番組だった。

○　１１月１１日(金)の東海　ドまんなか！「ドリーム★ネイバーズ【夢応援バラエティー】」(総合 後 7:30～7:55 東海３県・静岡県域)を見た。観光アドバイザーをしているフランス出身のジュリ･ボウさんの挑戦を取り上げていた。夢応援バラエティーという形で何回か放送しているが､今回はどこが応援となっているのか疑問に思った。「ドリーム★ネイバーズ」はドキュメンタリーのように密着していく中で発見があり、苦難を乗り越えて夢を実現していくところが共感し応援できるポイントだったと思う。今回はジュリさんがタレント性のあるキャラクターで、しっかりと企画・構成されているようなスムーズさがあり、番組としてこなれた感じが強すぎるように思った。番組が成熟してきたと肯定的に捉えることもできるが、大切なポイントだった外国人の苦労や日本に対して何かをしたいという気持ちへの寄り添い方が変わりつつあるとも感じた。

○　１１月１１日(金)の中部ネイチャーシリーズ「巨石が支えた山城　岐阜県　苗木城・岩村城」(総合 後 7:56～8:39)を見た。名前は知っていても実際に行ったことはない地元の山城を取り上げていて、訪れる前に知識を得て興味を持つことができるよい番組だった。苗木城の巨岩や石垣の構造、豊かな自然の存在、岩村城の構えや高い標高にある井戸のメカニズムなどは非常に興味深かった。あまり知られていない山城や関連する情報はまだまだあると思う。今後も中部ネイチャーシリーズの中でそれらを取り上げ、さらに充実させていってほしいと思う。

○　１１月１２日(土)の映像ファイル　あの人に会いたい「アンコール　小柴昌俊（物理学者)」を見た。１０分間の番組だがとてもよかった。小柴さんが２６歳でアメリカに留学し、わずか１年８か月で博士号を取得したことを初めて知った。日本では、博士号の取得に通常３年ほどかかるため、日本では考えられない早さだという点にも触れるとよいと思った。今の学生世代にも見てもらい、岐阜ゆかりのすばらしい研究者がいたことを知ってほしいと思った。一方、番組を知ってもらう工夫が不足していると感じた。視聴者に選んでもらう以前の段階で、そもそも番組の存在自体が知られていないのではないかと思う。

○　１１月１３日(日)の高専ロボコン２０２２「東海北陸地区大会」(総合 後 1:05～1:59 中部ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。出場チームの独創的なアイデアを見ていると、日本の科学技術の基礎を担っていく若者の姿が頼もしく感じられた。ただ、放送時間が限られてい

たためかダイジェストとの印象は否めず、実況中継も少なく臨場感がなかった。また、ロボット自体に焦点を当てすぎていたので、出場する高専生のドラマをもっと見てみたいと思った。顧問の先生や部員の名前も許される範囲で紹介すれば、個々人がさらに際立つと感じた。この大会の様子は動画投稿サイトで全編見ることができたが、自分で情報を取捨選択できる社会へと変わっていく中、ＮＨＫの番組をどのように見てもらうかは悩ましい問題であると思う。自分で情報を取りに行く社会では、都合のよい情報ばかりが集まり、中立的な情報を得ることができなくなる懸念がある。そのことによって社会の分断がより進むことを危惧している。義務教育において、公共放送の意義やメディアリテラシーについて学ぶ機会が必要ではないかと感じた。

○　１１月１３日(日)の高専ロボコン２０２２「東海北陸地区大会」を見た。動画投稿サイトで大会当日の様子を視聴したが合計で６時間以上あり、すべてを見ることはできなかった。そのため今回の番組で全体像がよく分かった。ルールの説明や各校のロボットの特徴について、ＣＧを用いた説明は分かりやすく、改めてＮＨＫの編集力の高さを感じた。短時間ながら高専生の数名に着目することで、ストーリー性を高めていたところも非常におもしろかった。一方、動画投稿サイトなどのメディアとＮＨＫの放送との連携については改善の余地が大きいと感じた。高専ロボコンのホームページでは、動画投稿サイトでの大会全体の配信よりも、「ＮＨＫプラス」での番組の配信が強調されていることに疑問を感じた。即時性や情報の網羅性などにおいては動画投稿サイトに強みがあるが、ＮＨＫの番組には編集力やストーリーの構成力という強みがある。お互いの強みをうまく組み合わせることでより大きな効果が出るのではないか。また、世界のロボット競技大会ではトレーニングをしていない操縦者であっても、いかにうまくロボットを操縦できるかという点に焦点が移ってきていると聞く。世界ではこうした動きもあるという将来が展望できるような情報も紹介することで、ロボコンの可能性を広げられるのではないかと思う。

○　１１月１５日(火)のいいいじゅー！！「岐阜・飛騨市」を見た。ドローンの使用目的として、サーモグラフィを使った調査や地形の測定といったイメージが強かったが、農薬の散布やサルの生態調査などさまざまな仕事で活用されていることを知り、大変勉強になった。移住して１年余りでドローンビジネスの会社を起業した男性が「年間売上高で１億円を目指す」と話していたが、そこに向けた苦労やプロセスをもう少し詳しく紹介してほしかった。また、ドローン操縦の難しさは一般の人には伝わりにくいので、それが分かりやすく伝わる工夫があるとより丁寧だったと思う。

○　「ＮＨＫのど自慢」の予選を見た。「ＮＨＫのど自慢」が松阪市で開催されたが、ＮＨＫで本選が放送されたあと、地元のケーブルテレビ局で予選がすべて放送されてい

た。出場者や関係者は楽しんで見たと思うが、なぜケーブルテレビ局で放送されているのか少し不思議に思った。

○　番組審議会の視聴番組をどのように決めているのか知りたい。今回のようにニュース番組が指定されるのは珍しいと感じた。

（ＮＨＫ側）

番組のテーマやジャンルに加えて、中部地方には７つの放送局があるので各地域のバランスなどを勘案して選んでいる。また、委員からの意見をより生かせるように、審議会に出席する局長が所属する放送局が制作した番組を可能なかぎり選んでいる。

中部地方の番組審議会でニュース番組が視聴番組になることはこれまであまりなかった。ただ、ニュース番組は主要な番組であり、特に地域局における夕方６時台のニュース番組は地域向けのサービスとして重要で、基幹コンテンツとして制作者が最も力を入れている番組の一つだ。どのように視聴者から見られているのか、こうした場で意見を聞けることは大変貴重だと考えている。

○　各放送局が力を入れているという夕方６時台だが、そもそもその時間帯にテレビを見ている人がどれくらいいるのだろうか。周囲の学生などに聞いてみると、テレビを持っていない人もおり、ほとんどがスマートフォンで動画投稿サイトなどを利用している。たくさんのテレビ番組の中からいかに選んでもらうかというより、すでに多くの人がテレビ自体から離れてしまっていると感じる。そういった状況を考えると、ＮＨＫプラスはとてもよいサービスだが、配信期間が短いのが難点だ。一方、動画投稿サイトでは、著作権の侵害などで削除されないかぎり映像が長期間残っている。ＮＨＫはこれまで非常によい番組を作ってきており、それらを若い人にも見てもらうためには、配信期間を長くするなど改善が必要ではないか。

○　夕方６時台にはどのような人がテレビを見ていて、経年で比較するとどう変化しているのかなどのデータは公開しているのか。審議会で意見を述べるにあたり重要な情報だと思うので、可能な範囲で共有してほしい。

（ＮＨＫ側）

長期的には、テレビを見る人が減少していると思われる。た

だ時間帯や地域によってその変化には違いがある。結果を公表
している調査があったら、今後機会があれば報告したい。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

２０２２年１０月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、２０日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、、東海　ドまんなか！「ラッコがいなくなる！？水族館・動物園の未来は･･･」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委　員　長	坂田　守史	((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)
副委員長	榊原　陽子	((株)マザーリーフ代表取締役)
委　　員	稲垣　貴彦	(若鶴酒造(株)取締役)
	遠藤　英俊	(名城大学特任教授)
	大西かおり	(特定非営利活動法人 大杉谷自然学校　校長)
	岡安　大助	(中日新聞社取締役)
	成島　洋子	((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)
	平本督太郎	(金沢工業大学ＳＤＧｓ推進センター長)
	廣田　憲吾	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	安井　香一	(東邦ガス株式会社相談役)
	リムリーワ	(岐阜大学工学部教授)

（主な発言）

＜東海　ドまんなか！「ラッコがいなくなる！？水族館・動物園の未来は･･･」
(総合　１０月１４日(金)放送)について＞

○　金曜の夜７時３０分、夕食後に一服しながら見る番組として非常によい作りだった。ラッコはかわいらしく、そのラッコが現在、日本の水族館に３頭しかいないことには驚いた。そこから、国内で飼育されるラッコが激減した理由の説明があり、動物福祉の話に移り、今後の水族館や動物園のあり方につなげていく番組の構成もよかった。さまざまな物事を評価する基準の中で「かわいい」かどうかが最上級という時代が長く続いているように思うが、やはり「かわいい」だけですませてはいけないと感じた。中部大学特任講師の上野吉一さんの「動物の姿だけでなく生活も見てほしい」というコメントでよくまとめていたと思う。ただ、動物福祉について、もう少し根本的な部

分の説明があってもよかったと感じた。日本国内でラッコの数が増やせない一因として、ワシントン条約とアメリカによる輸出禁止を紹介していたが、それに続くような形で動物福祉の概念が広がってきたからだと説明していた。2002 年には動物福祉の概念が確立したと言われているが、その中でワシントン条約の規制対象外の種であっても、野生動物の捕獲は極力減らしていくことがうたわれるようになった。日本でも2015 年にイルカの追い込み漁が問題視され、日本動物園水族館協会が追い込み漁で捕獲したイルカを入手していたことを理由に、世界動物園水族館協会から会員資格の停止を通知されたことが契機となり、動物の習性を尊重してなるべく自然な形で飼育するべきとの考えが広まったと思う。動物福祉について一般的には知らない人もまだ多いと思うので、ラッコの減少と結び付けて取り上げるのは、その理念を広める取っかかりとしてはよいが、世界的には動物福祉の流れが２０年も前から始まっていることはもっとしっかりと紹介すべきだと思った。動物福祉と向き合う大牟田市動物園の取り組みが先進的な事例として紹介されていたが、日本の中では先進的でも世界的にはとても遅れた取り組みだともっと強調してもよかったのではないか。動物福祉について考えるきっかけとしてはよい番組だったので、次の段階としてイルカショーはどうすべきかといった問題までも含めた、動物の福祉全体を考える番組を制作していってほしい。また、ラッコは身近な水族館では見られなくなるので、ぜひＮＨＫの取材力を生かし自然のラッコを撮影し放送していくことで私たちが目にする機会を確保してもらえればと思う。

○　番組はラッコの人気の高さの紹介から始まり、そこから展開して日本国内での飼育数が少なくなった原因や、ラッコ以外の種でも水族館・動物園での飼育数が減っていく可能性などを紹介し、動物福祉の観点に基づいた飼育や来園者にその理念を学習してもらう活動などもしっかり伝えていた。動物の福祉とあわせて人間の福祉にも思いが膨らみ、食事の仕方や日常生活の中に運動を取り入れることの大切さは、動物も人間も同じだと感じた。動物園に行けば当たり前のように見ることができたゾウが見られなくなるかもしれないという話に、喪失感や驚きを感じるとともに、動物が野生で生きている状態に近い環境を維持することの大切さやその環境をどのように作っていくのかを考えるよい機会になった。大牟田市動物園の動物福祉に向き合う取り組みからは、動物が持つ野生と意思について具体的に考えさせられた。さらに、鳥羽水族館のラッコや東山動植物園のキリンの飼育における工夫とつなげて説明されることで、番組のタイトル通り水族館・動物園の未来について問いかける内容となっていて、環境や福祉にも関心が広がるおもしろい構成だった。水族館・動物園の役割について「子どもたちが身近な動物や自然にじかに触れて観察することで、豊かな感性を育み生物や自然環境への関心を高める」と解説していたが、畜産業や漁業を通じて我々の食料となる動物などにもその対象を広げていく必要があると感じた。また、今後のＮＨＫ

の番組制作においては、絶滅危惧種となった動物たちの生息域を確保する活動を伝えることや、水族館・動物園では見られない野生の動物の姿を撮影し、その生態と人間との関わりを伝えることを続けていってほしい。

○　「ラッコがいなくなる！？」というサブタイトルには非常に驚いたので、これに興味を引かれて視聴した人も多かったのではないか。ただ、ラッコがいなくなる理由を知りたいと思って視聴した場合、その期待に十分には応えていないように思った。国内の動物園や水族館で飼育されるラッコが３頭まで激減した理由を番組前半で分析していたが、国内での繁殖が難しくなったことにしか触れていなかったように思う。それも一因だとは思うが、タンカー事故の重油流出によりラッコが激減し、希少種になったためアメリカが輸出を禁止したことが大きな理由なのではないか。「ラッコがいなくなる！？」というサブタイトルを掲げたならば、ラッコがいなくなる理由をしっかり分析し、国内での繁殖が困難になったことだけでなくタンカー事故による汚染の影響を受けた生息地の環境問題も取り上げてほしかった。番組の途中で中学生の作文を引用し、ラッコの減少を知ったことで環境問題に気づくことができたと紹介していたのに、生息地の環境問題ではなく動物福祉の方に話が展開していったことには疑問を感じた。動物福祉に関する新しい知識を得ることはできたが、動物福祉は水族館・動物園で展示される動物だけでなく家畜や実験動物、ペットなど、番組で「心ある存在」と言われていた人間と関わる動物に広く適合する大きな概念だ。ラッコという１種類の動物を入口とするには大きすぎる概念で、断片的な紹介にとどまり中途半端だった。動物福祉という切り口で番組を制作するのであれば、ゲストの上野先生が紹介していた東山動植物園を取り上げるべきだと思った。また、日本の動物園は敷地が狭く、動物福祉の観点から一部の動物にとっては適切な環境ではないので、飼育を諦める場合や動物の輸出をしてもらえない場合があると紹介していたが、これもラッコの減少とは別の問題なのではないか。動物福祉とラッコの減少を一つの番組で取り扱ったことで、鳥羽水族館が動物福祉の観点からふさわしくないためラッコが輸出されないと勘違いされる恐れがあり、残念だった。ラッコ飼育員の石原良浩さんの行動やことばは感動的だった。日本で直接ラッコを見る機会はいつか失われるが、その日を１日でも遅らせたいという使命感や、ラッコに心身ともに元気でいてほしいという気持ちが画面からよく伝わってきた。石原さんの飼育には動物福祉という観点以上のものが確実に含まれていると感じたが、やはり一つの番組内で語られたことで動物福祉の枠にはめた解釈がなされてしまったように思い、その点は気になった。ラッコのかわいい姿に今すぐ会いたいという気持ちになり、短い番組だが映像の力を感じた。非常に丁寧な取材の結果引き出された映像と、石原さんの反応だったのではないか。制作したディレクターがどんな人なのか、会ってみたいと思った。

○　日本で飼育されている犬と猫はあわせて約 1600 万頭と推計されており、これは動物園や水族館で飼育されている動物と比べて桁違いの数だ。ペットは愛情を持ってかわいがられているから問題ないという考えもあるかもしれないが、動物福祉という観点から見ると､本来持っている習性とは異なる生活であることは否定できないと思う。動物福祉を否定したり軽視するつもりは毛頭なく、番組で取り上げていた飼育員たちの餌やりの工夫や動物への思いなどはとても評価できるものだが、今すぐに最優先で取り組むべき課題かどうかといえば､そうではないのではないか｡世界規模で見ると、森林開発や密猟、気候変動により絶滅が危惧される動物がいて、人間世界でも戦争や飢餓、環境破壊などが続いている現状を考えると、最優先の課題ではないと感じ、番組として誰に何をしてほしいと訴えているのかがよく分からなかった。冒頭の「ラッコにはまる人が続出、動画再生回数 500 万回超え」という導入の部分も、動物福祉が必要だとする根拠に直接にはつながっていないと感じた。番組で紹介していた種の保存、教育、調査研究、レクリエーションという、動物園・水族館の４つの役割を正しいことだとするならば、パンダが厳格な交配管理の下、世界各国で飼育・展示されていることは一つの手本になるかもしれない。ワシントン条約による規制があり、日本の現状の設備では不適格とされる可能性もあるが、飼育環境の一定の国際基準を作るなど多くのことがともに成り立つような解決の方向はないのかと考えさせられた。動物福祉の問題は､赤字ローカル線の廃線問題と重なる部分があるように思う｡赤字ローカル線を廃線し路線バスに転換したほうが地域にとってメリットが大きいにもかかわらず、一部のファンのセンチメンタルな意見により延期になり、地域経済の改善や発展を妨げ、当事者である地域を苦しめているという事例がある。解決には「誰のために、どうなるために」という議論が大切という観点は、動物福祉にも当てはまるように感じた。

○　ラッコのかわいらしい映像の力により、２５分間見入ってしまった。丁寧に取材していて、ゲストの上野先生の実直な語り口も取材に基づいたものであると感じられ、番組の雰囲気に合っていた。飼育員の石原さんの「最後のその時まで」ということばが印象に残り、大切にラッコを育てているのだと感じることができた。一方、番組で紹介される内容と環境問題とのつながりはよく分からなかった。途中で紹介された中学生の作文には「ラッコの現状を知り、環境問題について自分には何ができるのか考えた」とあったが、番組は環境問題について特に言及しないまま進み、この作文をなぜ取り上げたのか疑問に感じた。動物福祉に関連して「かわいいだけでなく、動物の生活をじっくり見てほしい」と上野先生が語っていたが、最後に流れた映像ではラッコを見学する来館者のほとんどがスマートフォンをかざしていた。動物をじっくり見ることが果たしてできているのか、ＳＮＳでのかわいさや動画の力に回収されてしまっているのではないかと考えさせられた。サブタイトルに「水族館・動物園の未来

は…」とあり、2030 年という近い将来にはゾウもゴリラもラッコも身近にはいなくなると紹介していたが、動物がいなくなった先の未来がどういうものになるのかまで示されたわけではなかった。サブタイトルを大きく掲げすぎたように感じた。

（ＮＨＫ側）

中学生の作文を紹介したのは、ラッコの減少を「かわいい動物がいなくなる」というのとは異なる受け止め方をする人が実際にいることを伝えるためだった。番組の時間が限られているため、彼が作文で注目していた環境問題の部分を丁寧に取り上げ、伝え切ることができなかったが、もう少し工夫できたかもしれない。ラッコの減少を切り口に、動物福祉と環境問題のどちらにフォーカスするかを議論してくなかで、舞台が水族館・動物園ということで野生の動物が関わる環境問題ではなく、動物福祉を重点的に取り上げた。

また、取材の過程で日本の動物福祉は世界的に見ると遅れていることも分かってきたが、テロップ１枚とスタジオトークの中で軽く触れる程度の紹介にとどめてしまったので、もう少し掘り下げる選択肢もあったと思う。最初にラッコのかわいさを見せてから、動物福祉というテーマを立ち上げ、動物福祉に絞って展開していくという構成も考えたが、ラッコの減少は動物福祉だけが原因ではないため、見やすさを優先すると事実と異なる部分が出てきてしまう。そのため、前半でラッコ減少の理由を丁寧に伝え、スタジオパートでラッコ以外の動物も減少している状況にあると広げたうえで、動物福祉へと展開する構成を選択した。

制作したディレクターは若手の女性で、鳥羽水族館のラッコがＳＮＳで盛り上がっていることをきっかけに、そこから何を伝えられるのかを一緒に考えていった。いろいろな方向に展開できるテーマだったが、今回は動物福祉を一つのゴールとして制作した。

○　制作担当者が、ＳＮＳやインターネットで情報を収集しているのであれば少し気になる。ラッコに関連して言えば、カワウソなど４本足の海獣が日本で絶滅している。三重県には昭和２０年代から３０年代まではカワウソが生息していた記録があるので、なぜ絶滅したのかを分析する方向に展開していくことも一つの選択肢だったと思う。このような情報はインター

ネットでは入手することが難しいはずだ。

（ＮＨＫ側）

取材を始めるきっかけはＳＮＳやインターネットだったとしても、取材源そのものになっているわけではない。私自身は、三重県におけるカワウソの絶滅については把握していなかった。今後機会があれば取材し、三重県向けに放送していきたい。

○　鳥羽水族館のラッコが２頭まで減り、あとは２頭が最期を迎えるまで見守るだけだということが納得できなかった。例えば、国が力を入れれば、トキやコウノトリやパンダのように繁殖できたという実例、いわゆるチャンピオンデータは存在する。ラッコの生息数が増加している地域があるという情報もある一方で、取り引きに国際規制がある現状には複雑な気持ちがある。ラッコの繁殖の難しさは、動物福祉の考え方とは直接的には関係ないのではないかと思う。自然繁殖が難しいのであれば、人工繁殖やクローンを作るという対策もあるのではないか。ＮＨＫとして、動物福祉やラッコの繁殖のために何ができるかを社会に投げかける番組を制作してほしいと思うので、少しもったいないと感じた。動物福祉はアメリカ主導の考え方という印象があり、我々の理解もまだまだ未熟であると思う。ショー的に動物を展示する水族館や動物園の役割と動物福祉という、もともと相いれないものをどう融合させるのかを番組で取り上げるとよいのではないか。ＮＨＫなら、双方を両立させる方向で水族館を盛り上げてはどうかという提案型の番組ができると思う。ぜひ次の番組は提案型を期待したい。

○　限られた時間の中で、動物福祉・アニマルウェルフェアを説明したよい番組で、うまくまとまっていた。番組冒頭で、日本の水族館にラッコが３頭しかいないという現状を伝えることで視聴者を引き付ける構成となっていたのはよかった。ただ、日本の水族館・動物園の状況は伝えていたものの、他国の状況や自然界ではどうなっているのかという情報はなく、そのあたりも知りたいと思った。ケニアのサファリで見た動物たちの姿はすばらしく、その生態にも驚いた経験がある。それに比べて日本の水族館・動物園は大量生産・大量消費社会の中で生まれたものだと違和感を覚えていたので、海外の例がもう少し詳しく紹介されるとよかったと思う。また、ラッコについては、すでに絶滅危惧種に指定されている動物であり、ＮＨＫとしてはそうした背景も基本的な知識として紹介する必要があったと思う。さらに、動物福祉の紹介の仕方には違和感を覚えた。アニマルウェルフェアは、どちらかといえば畜産業界やファッション業界で注目されている考え方であり、農林水産省を中心に規制の検討が進められている。そういった分野で世間の注目が集まっているなかで、動物福祉・アニマルウェルフェアを動物園や水族館の問題として切り離して考えることは、真実と異なる

部分があると感じた。また、伝えようとするメッセージがいろいろな方向に広がっていると感じた。番組として一番伝えたいメッセージは何かを考えながら制作しないと、視聴者はメッセージや方向性がはっきり分からないまま見ることになると思った。ただ、動物福祉・アニマルウェルフェアをかしこまって見るのではなく楽しみながら、そうしたことばや考え方があることを知るよいきっかけとなる番組だったと思う。こうした話題に興味を持った人が、より深く情報を知るために役立つ番組を紹介したり、今後の特集番組につなげていくといった展開があるとさらによくなったのではないかと思う。

○　全国でラッコが３頭しか飼育されていないことに驚いた。国内でラッコの飼育数が減少していることを知らなかったので、番組タイトルは視聴者の関心を引くものだったと思う。減少した原因として、国内での繁殖が成立しなくなってきたことと、ワシントン条約で輸入が難しくなったことが挙げられていた。ラッコの繁殖例が全国でこれまでどれくらいあるのかというデータが示されいなかったので、そもそもラッコは国内で繁殖させて増やすことが前提なのか、それとも輸入が前提なのかが分かりづらかった。野生のラッコも含めて世界のどの地域にどれくらいの数が生息しているのかというデータもないと、地球規模での動きが見えないと思う。また、ラッコの年齢が人間でいうと何歳くらいに相当するのかを示さないと、高齢による繁殖の難しさが視聴者に実感を持って伝わらないのではないか。動物福祉という点では、見せ物として動物を展示する動物園の飼育方法から、本来の動物の生態に近い飼育方法にシフトすることによって、より多くの人に動物本来の姿を見てもらい正しい知識を得てもらうというのは大事な考え方だと思う。珍しい動物を輸入して入園者を増やすという大量消費的なあり方から、それぞれの動物のことをより深く知ってもらうような、量から質への転換が動物園でも起きていることには、違う業界においても学ぶべきことがあると思う。それだけに、動物園の経営状態や動物園自体の数、入園者の推移といったデータもあれば、他の業界でも参考としやすくなったのではないか。人目に触れるエリアに出るかどうかは動物自身が決めるという“自由出勤”の取り組みもユニークで、それによって入園者が増加したとあったが具体的にどの程度増加したのかという数値が示されず、腑に落ちるところまでは至らなかったのがやや残念だった。動物園の敷地面積・飼育頭数について、動物福祉の取り組みが進んでいるという欧米は、どの程度日本と違うのかという情報があると、より具体的に分かりやすくなったのではないか。

○　放送時間に限りがある中、とてもよい番組となっていた。特に、動物福祉ということばがあることをこれまで知らなかったのでとても勉強になった。番組のメッセージとして、動物を単に「かわいい」存在として捉えるのではなく、私たちが動物福祉の

観点からどのような問題に気づいていくべきかということが伝わってきた。ラッコの減少から環境問題について考えさせられたという中学生の作文は、短く紹介されただけだったので細かい内容までは分からなかったが、環境問題について考えるよいきっかけになったのではないか。これまで私たちは水族館や動物園の生き物たちをレクリエーションとして見てきたと思うが、この番組を見た子どもたちは種の保存や環境問題などについても考え始めるきっかけになったと思う。国内で飼育されているラッコが３頭しかおらず、国内での繁殖も高齢のため難しいと伝えていたが、ラッコの年齢は人間だと何歳に相当するのかという情報やラッコの寿命についても情報があるとより分かりやすかったのではないか。動物福祉と向き合う大牟田市動物園の取り組みには感動した。動物本来の生態を配慮し、約２０年の間に飼育する種類や頭数が半分ほどに減ったというのも、動物のためにいろいろと考えながらやってきた結果だと思い感心した。人間にも動物にもプライベート空間は必要で、動物が住みやすい環境になっているかどうか、気にかける人が増えるとよいと思った。

○　ラッコの動きがとてもかわいらしく、思わず笑顔になることが多い番組だった。飼育担当の石原良治さんが、取材に答えるときには真摯で誠実な表情をしていたが、ラッコと触れ合うときには愛あるまなざしで、一転する表情に癒やされた。今回の番組を見て国内で飼育されているラッコが３頭しかいないと知り、とても驚き寂しく思った。ラッコがワシントン条約の規制対象になったことやアメリカからの輸出が減ったのは、世界中でラッコが減少したのが原因ではないかと思ったが、その部分の説明がなかったので気になった。過去にはたくさんのラッコがいた記憶があるので、なぜ減ったのか詳しい解説があると疑問が解消されると感じた。動物福祉の考え方については、この番組を見てどのような取り組みなのか初めて知り、その意義もよく分かった。最近、水族館や動物園における動物の見せ方が大きく変わってきていると感じていたが、こうした理由があったと知り、興味深く感じた。その動物にとってふさわしい環境が整っていないと飼うことができないというのも、やむを得ないと納得したところもある。ゲストの上野吉一さんの「動物は心ある存在だ」ということばも印象に残った。水族館や動物園のあり方、そこを訪れる私たちの見方も、時代とともに変化しているように感じる。水族館や動物園で動物がいきいきと元気な状態でその動物らしい状態でいる様子を見ると、人はうれしくなるという本能的な感情があるのだろうと考えさせられた。動物だけでなく人間も、その人らしく、いきいきとした活力のある状態でいることは大事であり、動物福祉には多様性を受容する心を育てるという意味合いもあるのではないかと感じた。

○　ＮＨＫの地域局で制作される番組は、若手ディレクターがある程度自由な視点を持って制作することができ、いろいろと試すことができる場なのだろうと思う。そう

した意味ではＮＨＫにとってもよい機会になっているのではないかと思う。「東海　ドまんなか！」という番組の枠の中で考えると、どこまで掘り下げて視聴者に情報を伝えるべきかという課題があり、特集番組のように深掘りしたものを出せるものではないと思う。そういった制約を踏まえると、視聴者に誤解を与えない正しい情報となっていれば、それでよいのではないかとも思う。全体を一般的な視点で見たときに、今回の番組はよい内容なのだろうと思う。ただ、２５分間に、ラッコの減少と動物福祉、環境問題と多くのものを詰め込んだ印象を受けた。焦点を一つに絞ったほうがより分かりやすかったのではないか。ラッコの減少から環境問題について考えさせられたという中学生の作文についても、あまり詳しく紹介されず引っかかりを感じた。今回は、鳥羽水族館のラッコだけに絞ってもよかったのではないかと思う。そうすることで、すっきりと視聴できるのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

鳥羽水族館のラッコだけに絞って取り上げたほうがよいのではないかという指摘は、まさにそのとおりで、当初はその方向で制作していこうと考えていた。ただ、ラッコの減少だけで内容を掘り下げていくには、伝えられる事実が少なく、番組として見応えのあるものにはならないと考えた。動物福祉について、畜産業界やファッション業界を取り上げなかったという指摘も、一つのテーマに絞り切れなかった結果かと思う。鳥羽水族館のラッコ、動物福祉、環境問題のそれぞれが中途半端な取り上げ方になっていたという意見は、今後の番組作りの参考にしていきたい。具体的な数値などデータの提示が少ないという点については、本当に正しいかどうかが定かでないことも多々あり、番組として伝えられるデータが少なくなってしまった。ラッコの専門家が少なく、鳥羽水族館の石原さんが国内トップクラスの専門家だと言われているが、鳥羽水族館の飼育環境のデータしかないため、それをもってラッコ全体の現状を説明するのには不十分ではないかと悩みながら取捨選択した結果、詳細な情報を伝え切れなかった部分があり、見る人に分かりにくいという印象を与えたかもしれない。提案型の番組にしてほしいという指摘については、大牟田市動物園の取り組みに該当する要素があったと思うが、世界的に見るとそれほど先進的なものではないこともあり、期待に応え切れなかったかもしれない。海外の先進的な事例を盛り込むことで、ある程度その期待に応えられたかもしれない。北海道におけるラッコの生息数の増加

は非常に興味深く、取材を進めたが現時点では野生のラッコを連れてきて飼育するのは難しく、鳥羽水族館で飼育しているラッコとは異なる種であるといった事情もあり、仮定の話をどこまで盛り込む必要があるのかを議論した結果、今回は扱わなかった。今後の動きに注目しながら、機会があれば番組で紹介していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　９月２０日(火)のニッポン知らなかった選手権　実況中！「第４５回　物置組立競技会」(総合 後 11:00～11:29)を見た。タイトルから、リラックスして見られるだろうと思って視聴した。ふだんはプロレスの実況をしている清野茂樹アナウンサーと職人歴３３年の元チャンピオンの２人がさまざまな情報を織り交ぜながら競技の様子を実況し、４２台のカメラを駆使した映像で職人技の数々を見せていく番組で、約３０分間興味が途切れることなく楽しめた。組み立てる部品は、事前に決められた作業区画の中で自由に配置できるルールになっており、実況として「この段階で頭の中で設計図が出来てないと勝てない」というコメントがあった。要は段取りが大切であるということがこの番組のテーマで、前面に出てくることはないものの、場面場面でその点を訴求しているように感じた。段取りの大切さはモノづくりに限った話ではなく、一般的な仕事や日常生活にも当てはまることで、番組の意図する啓もう点になっていたのではないかと思う。全体のテンポがよく、視聴者に楽しんでもらおうという姿勢も伝わってきた。ただ、「さび止め防止」という表現がナレーションとテロップで出てきたが、これは二重否定になっており誤った表現だと思う。

○　９月３０日(金)のいしかわ令和プレミアム「ひむバス！能登半島スペシャル便」(総合 後 7:30～7:56　石川県域)を見た。地方創生を取り上げる番組はよい部分だけを切り取って伝えるなど違和感を覚えることが多いが、この番組はリアルな部分もしっかりと描いており、非常によい内容だった。地方への移住者が地元の人とほとんど接点がないといった点もきちんと取り上げ、交流のきっかけを作ろうと移住者の若者と地元のお年寄りがバーベキューをする場面があったが、若者の「何か困っていることはないか」という問いに対し、お年寄りが「困っていることはないが、寂しい」と答えていて、とてもリアルだと思った。地元の人にとっては、これまで普通に生活してきたのに、急に「困っていることはないか」と聞かれても困ってなどいないのはある意味当然だと思う。一方、孫などがあまり来なくなって寂しいといった気持ちを持っている人は多く、若者と過ごす時間そのものが貴重であると気づき、だんだんと地域の

ために何ができるか考えるようになっていくことは実際にある。そうした部分をしっかりと描いているよい番組だった。雰囲気が民放の番組に近いと感じ、最初はＮＨＫの番組だと知らずに見たが、内容もよく実はＮＨＫだと知ってよい意味で裏切られた。

○　１０月７日(金)の東海　ドまんなか！「生きるヒント満載！“ハカセのコトバ”」(総合 後7:30～7:55 東海３県ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。東海地方で活躍している現役の科学者たちの研究内容や生き生きとした表情、ことばに触れる機会となるよい番組だと思った。ただ、番組では主に３人の科学者を紹介していたが、その人自身なのか、その人のことばなのか、どちらに焦点をあてているのかが分からず中途半端だと感じた。ことばであれば、もう少しことばを掘り下げてもよかったのではないかと思うし、人自身であれば「プロフェッショナル　仕事の流儀」のような焦点の当て方でもよかったのではないかと思った。結晶スポンジ法などの研究をしている藤田誠先生の「７割くらいいけると思ったらいっちゃえ」ということばは抽象的であまり理解できなかったが、著名な科学者のモットーとしていることばを伝えているという意味ではよかった。カーボンナノベルトの研究をしている伊丹健一郎先生が、仮説を立て答えを求めていく過程を経て、ようやく研究室の仲間と結果を出した感動の場面は、かつて研究に携わった者としておもしろく感じた。時間の関係なのか女性の科学者３人を写真と短い映像だけで紹介していたが、研究内容と名前しか分からずもの足りなく感じた。この女性３人の活躍する姿も見たかった。また、これは男女平等の観点から紹介したのではないかと感じた。科学技術分野の女性研究者は生活や子育てなどの事情もあり、日本では１６％ほどしかいないというデータもある。人数そのものが少ないかもしれないが、ことばだけではなく、その人自身や研究上の困難なところも紹介するとよいのではないか。

○　１０月７日(金)のＵＰっぷ富山　きとラボ「“伝えびと”だけが知っているディープ富山」(総合 後7:30～8:13 富山県域)を見た。ＮＨＫ富山放送局の新局舎への移転を記念し、同じく新局舎をオープンした富山県の民放であるチューリップテレビとコラボレーションした番組だった。５人のゲストを迎え、富山県民の謙遜も含んだ口癖である「富山はなんもないちゃ」という面を掘り下げる豪華な内容だった。富山局のキャラクター「きとっピ」のテーマソングにも「なんにもない」という歌詞があるように、富山と言えば何もないというイメージが定着している。北陸新幹線が開通してからは少し変化してきたが、富山に県外から人が来ると「何しに来たんけ？」と聞き、「こんななんもない所に」と続くやり取りが必ずあるほどだ。しかし、本当は何もないわけではないことを、富山の絶景をＳＮＳで発信する写真家のイナガキヤストさんや、富山の地域情報メディアを運営するインフルエンサーの金子奈央さん、チューリップテレビの記者で富山市議会の政務活動費不正を最初にスクープした砂沢智史さん、

ＮＨＫの記者で用水路事故をなくすキャンペーンを展開した櫻井理沙さん、世界的に注目を集めるレストランのシェフである谷口英司さんなど、幅広い分野で活動する人たちが双方向的に対談しており、ふだんは見えないような各人の一面が見られて非常におもしろい番組だった。政務活動費の不正は富山の暗い部分で魅力とは言えないため、最初は砂沢さんが浮いているように感じたが、富山のよい点ばかりを取り上げるのではなく課題もあることを伝えることで、結果的に番組に奥行きを持たせていたと思った。富山においてＮＨＫと民放がコラボレーションするのは珍しく、楽しく見ることができた。

○　１０月１２日(水)の「ＮＨＫニュース７」について。名古屋テレビ塔が国の重要文化財に指定されるというニュースに比較的長い時間を割き、豊富な内容で伝えていた。この日は全国的に注目を集めるニュースが他にもあったが、テレビ塔のニュースを選定したＮＨＫの本質を見抜く力に感心するとともに、ＮＨＫがこのニュースに決定するまでの過程に興味が湧いた。

○　１０月１２日(水)の中部ネイチャーシリーズ「放送１０年目　蔵出しＳＰ」(総合後 7:57～8:40 東海３県・静岡県域)を見た。総集編としてすばらしい映像の数々を見ることができ、今年度のシリーズにも大変期待が高まった。特に興味深かったのは「雲上の桃源郷薬師見平」で、ガイドと制作スタッフが苦労しながら天空の池を目指す場面は臨場感にあふれており大変よかった。著名人が自然を体験する内容もよいが、ガイドと制作スタッフが頑張る姿ももっと見たいと感じた。また、ＮＨＫの西名健太カメラマンが学生時代に「中部ネイチャーシリーズ」を見てカメラマンを志したという話があったが、非常にかっこいい仕事であると伝わってきた。映像は大変すばらしいが、その反面危険を伴う撮影なのだろうと思う。最近、ＮＨＫの関連会社の社員が番組ロケ終了後に下山中に亡くなったとの報道を聞き、大変危険な撮影と引き換えに美しい景色を番組で見ることができるのだと改めて感じた。私の本業は自然体験プログラムの提供だが、２０年前と比べ、提供できる自然体験のレベルが低くなってきていると感じる。「中部ネイチャーシリーズ」も過去の回になるほど、非常に危険な撮影に挑んで記録映像として残しているが、今もこのレベルを維持できているのかは疑問に感じる。リスクを取れなくなってきている社会情勢の影響もあると思うが、リスクの高い映像も安全に撮り続けられる技術を持ったＮＨＫという“文化”を今後もぜひ継続してほしい。このシリーズについては、娯楽・教養番組としてだけでなく学術的な分野などでも参考にしたいという視聴者が多くいるのではないかと思う。そういう意味では、これまで放送してきた回も含めてＮＨＫプラスで配信するなど、活用できる手段を確保して欲しい。

○　１０月１２日(水)の中部ネイチャーシリーズ「放送１０年目　蔵出しＳＰ」を見た。ふだんは小さな画面のテレビかＮＨＫプラスをパソコンやスマートフォンで視聴することが多いので、偶然大きな画面のテレビでこの番組を見てとても感動した。穂高連峰のジャンダルムや薬師見平は息をのむような絶景で、家族を呼び寄せて一緒に視聴した。ハンマーヘッドシャークの映像も圧巻ですばらしかった。ゲストの俳優・釈由美子さんの登山愛やタレント・辻本達規さんの人柄のよさなどもとてもよく伝わってきた。ＮＨＫの西名カメラマンが紹介していた撮影の工夫は、大変な仕事だと思うと同時に、こうした苦労があるからこそすばらしい景色が見られるのだと思い、本当にありがたいと感じた。また、１０月１４日(金)の中部ネイチャーシリーズ　伊吹山「花と生きものたちの楽園」(総合 後 7:56～8:39 東海３県・静岡県域)も見た。自分が通っていた学校の校歌の歌詞にも「伊吹山」が入っていて身近な存在だったが、番組を通じて新しく知ることも多く勉強になったし、実際に足を運んでみたくもなった。この２つの番組を見たあとにＮＨＫの関連会社の社員が番組ロケ終了後に下山中に亡くなったとのニュースを知り、大きなショックを受けた。中部ネイチャーシリーズを見返した際、すばらしい絶景だと思うと同時に胸が締めつけられる思いで、亡くなったその人がロケに行ったわけではないがつらい気持ちになった。すばらしい番組は安全があってこそだと思うので、ぜひ再発防止に努めてもらいたい。

○　１０月１２日(水)の中部ネイチャーシリーズ「放送１０年目　蔵出しＳＰ」を見た。本当にすばらしい映像だった。各回をダイジェスト的に紹介することで、中部ネイチャーシリーズの「地域の美しい自然から心躍る発見をする」という姿勢がよく分かった。個別の回を見てもその姿勢を感じるが、ダイジェストで山や海、さまざまな地域の身近な自然を見ることでよりはっきりと分かった。今後のシリーズが楽しみになる内容だったと思う。ただ、１０年目の蔵出しに４３分という時間は短すぎる。もし２０年目があるのならば、120 分などもっと放送時間を長くしてほしい。

○　１０月１４日(金)のホクロック！「幸せにはワケがある　学力トップの“タブー”」(総合 後 7:30～7:56 北陸３県ﾌﾞﾛｯｸ) を見た。幸福度ランキングで福井県が全国１位になったことが誇らしいという街頭インタビューから始まり、その根拠として教育熱心さや学力の高さが挙げられ、北陸３県の学力が高い理由を探る番組となっていた。番組タイトルである「学力トップの“タブー”」については、学校や教員側の負担が増えていることや本来子どもたちが学ぶべき体験型の学習に割く時間が減っているなどの懸念点が示され、それらへの対策も取材されていた。ただ、番組の中で、教育熱心さや学力の高さが幸福度ランキングとどうつながっているのかが全く触れられておらず、教育に関する内容に終始していたのが気になった。さらに、学力調査で県ごとの順位が見える化したことが教員のプレッシャーとなっていると、ランキング形式がも

たらすひずみが語られていたにもかかわらず、何も気にしていないかのように冒頭で幸福度ランキングを取り上げたのにも違和感を感じた。仮に幸福度ランキングに実態があるのであれば、幸せとは何であるのかだけを考える番組、あるいは教育についてのみ考える番組とした方がよかったのではないか。また、ゲストのタレント・キンタロー。さんが、あるタレントのものまねをしながらコメントしていたが、ものまねをするのであればキンタロー。さんをゲストとする理由が分からなかった。

○　１０月１４日(金)のホクロック！「幸せにはワケがある　学力トップの“タブー”」を見た。北陸全体の学力の高さという光の部分と、番組で取り上げていた影の部分は、北陸で暮らす人ははっきりと感じていることだと思う。県外から福井県に引っ越してきた教員に話を聞くと、福井の学校では会議が朝と夜にあるなど教員が働きすぎており、それが当たり前になっているのは問題だとはっきりと指摘していた。福井だけでなく、石川や富山でも同様に教員の長時間労働や子どもたちの宿題の多さといった問題を抱えていることは、北陸として考えていく必要があり、「ホクロック！」で取り上げたのはすばらしいと思う。学習指導要領の改訂で多様性や個性、生きる力を伸ばす教育が掲げられているが、教育の現場はまったく追いついておらず、競争原理の中で大人側が空回りしてしまい結局は量的な学習になっている。量的学習から質的学習への転換と言われているが、それはなかなか実現されていない。そうした実態を、リアリティを持って伝えており、教員や保護者など強い関心を持って視聴した人もいたと思う。ＮＨＫに、学力テストのタブーについて投稿してきた石川県の教員に対し、暗い部屋で顔を写さずインタビューしていたが、こういった演出は犯罪に関わる場合などに使われるものだと思う。全体として明るい雰囲気の番組なのでコントラストが強すぎ、インタビューに応じた教員に対しても心苦しくなるような演出ではないか。また、「ホクロック！」はもっと“とがった”番組を作っていくのがコンセプトだと思っていたので、今回はとても真面目で“丸い”番組になっている点が気になった。北陸として考えていくべきテーマの示し方としてはよかったが、番組のコンセプトからすると、もっと食い込んでいくような内容でもよかったのではないか。

○　１０月１４日(金)の中部ネイチャーシリーズ　伊吹山「花と生きものたちの楽園」を見た。身近にあって何度も訪れている伊吹山だが、花やカタツムリの楽園ともいうべき場所だとは、この番組を見るまで全く知らなかった。伊吹山は日本列島のほぼ中央に位置しており、太平洋側からも日本海側からも湿った空気が流れ込むことで霧が発生しやすいとＣＧを用いて説明しており非常に納得できた。霧がもたらす湿った空気が花の生育にプラスになることや、カルシウム豊富な石灰岩を多く含む地質が、殻の主成分としてカルシウムを必要とするカタツムリの宝庫へとつながっていることも全く知らなかった。また、山頂の周囲にはニホンジカの食害を防ぐためのネットが設

置されており、登頂するたびに登山者が扉を開け閉めしていることにも驚いた。新しい知識が得られ、ためになる非常によい番組だった。ただ、ふもとから３合目まで、あるいは３合目から山頂まで登るのにどれくらい時間がかかるのか、花の見頃はいつかといった基本的な情報をもう少し詳しく知りたかった。そうした情報があれば、見ている人たちもより強く登ってみたいと感じたと思う。

○　１０月１４日(金)の中部ネイチャーシリーズ　伊吹山「花と生きものたちの楽園」を見た。花と生き物に焦点を当てた番組で、登山口から山頂までの道のりや歴史や暮らし、文化や地理など幅広く少しずつ紹介されていた。以前、山頂で化石を見たことがあるが、海底火山の噴火で誕生した山がプレートの移動や地殻変動を経て伊吹山となったと知り、このようにしてもたらされたものなのだと想像できた。石灰岩の採石場があることは知っていたが、その石灰岩に含まれるカルシウムを栄養にして育つカタツムリやそれを餌にして育つホタルへと話がつながり、興味深く視聴することができた。伊吹山はこれまでＮＨＫの多くの番組で紹介されてきたが、そうした番組の記憶の断片が我々を山へと誘うきっかけになっていると感じる。今回も同様でよい番組だったと思う。伊吹山への思いやこだわりのある人は数多く、それぞれ求めることは異なるとは思うが、今後の番組では、四季の自然の変化やふもとで暮らす人びとの水の恵みを受けた生活、登山者の表情などを取り上げるとよいのではないか。

○　１０月１４日(金)の中部ネイチャーシリーズ　伊吹山「花と生きものたちの楽園」を見た。東海地方に長く暮らしているが、これまで伊吹山に行ったことはない。実際に行ってみようという気持ちにさせてくれるよい番組だった。　「まるっと！」について。全般的にＮＨＫの番組は情報量が多く好ましく思っている。例えば１０月１９日(水)の「まるっと！」では、名古屋にある老舗のビアガーデンの話題や、美濃加茂市の公園の中にある道の駅の話題など､地域の細かな情報を伝えてくれて勉強になる。

○　「ゲームゲノム」について。レギュラー放送が始まったが、制作を担当したディレクターたちの熱い思いに驚いた。番組のホームページには、レギュラー化されるまでの関連動画や各回を担当したディレクターの思いがつづられた「ゲームゲノムｎｏｔｅ」という文章が掲載されている。その「ゲームゲノムｎｏｔｅ」の解説欄にも「担当ディレクターが番組制作者：ゲーマー＝５０：５０の目線で番組に込めた思いを伝える」と書いてあり非常に生々しさがある。企画を立ち上げたディレクター自身の就職活動時から続く思いや、ＮＨＫに入ってからゲームに関する番組を作りたいという秘めた思いを表に出せなかったといったことも書かれていて、その人個人というものが浮かび上がってくるのが印象的だった。フェイク的な要素が増え、ＳＮＳでも“盛る”人が多い中でリアリティに注目する若者には、こうした生々しさはとても歓迎さ

れる部分だと思う。日常生活の中でも野菜などを誰がどのような思いで作ったのか知りたいという人が増えてきている時代なので、こうした手法はフェイクがなく、リアルさや真実をさまざまな観点から追求するＮＨＫの本質と合っていると思う。番組の作り手側の、ありのままの姿を前面に出していく取り組みがもっと広がっていったとしても、それはそれで新しいＮＨＫの姿としてありうるのではないかと感じた。

○　「Ｅテレ０６５５」と「Ｅテレ２３５５」について。とてもよい番組で、必ず録画して視聴するほどファンだ。魅力的なコーナーがいくつもあり、制作している人がどのような人なのか、会ってみたいと思わせる番組となっている。ただ、「０６５５」のコーナーである「ニャンミカの　朝の１ぷん　ネコササイズ」は体操の内容が分かりにくく、個人的にはなくてもよいのではないかと感じることがある。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

２０２２年９月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１５日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、２０２１年１２月２６日（日）に放送したＢＳ１スペシャル「河瀬直美が見つめた東京五輪」へのＢＰＯ意見について報告があり、議事に入った。

会議ではまず、「２０２２年度後半期の国内放送番組」について説明があり、「２０２３年度の番組改定」についての意見交換を行った。

続いて、東海　ドまんなか！「ドリーム★ネイバーズ　【夢応援バラエティー】」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に､放送番組モニター報告と視聴者意向報告､１０月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	坂田　守史	((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)
副委員長	榊原　陽子	((株)マザーリーフ代表取締役)
委　員	稲垣　貴彦	(若鶴酒造(株)取締役)
	遠藤　英俊	(名城大学特任教授)
	大西かおり	(特定非営利活動法人 大杉谷自然学校　校長)
	成島　洋子	((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)
	平本督太郎	(金沢工業大学ＳＤＧｓ推進センター長)
	廣田　憲吾	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	安井　香一	(東邦ガス株式会社相談役)

（主な発言）

＜「２０２２年度後半期の国内放送番組」および「２０２３年度の番組改定」について＞

○　後半期から金沢局が自動音声による天気予報(R1 後5:55～5:58)を始めると説明があったが、自動音声についてもう少し詳しく教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

天気予報など気象庁が発表する気象データをもとに、ＡＩによる自動音声で伝える仕組みで、決められた放送時間にあわせてアナウンサーのように読む速度などを調整することができる。災害時に夜通しで放送を続けるといった、人の力

だけでは対応が難しいケースを補完することが目的で、今後使用しながら改善を図っていく。中部地方では、静岡局が９月１２日(月)からラジオ第一で運用しており金沢局、福井局、富山局でも順次運用を開始する予定だ。

○　普通に聞いていて、人が話している声なのかＡＩの音声なのか違いは分かるものなのか。

（ＮＨＫ側）

一部のニュース番組ではすでに導入されており、「ＡＩによる自動音声でお伝えします」とことわったうえで放送している。複数のアナウンサーが収録した音声をもとにＡＩがＮＨＫアナウンサーのアクセントなどを再現して、多くの人にとって聞きやすい自然な音声となるよう努めているが、まだ違いは分かると思う。ただ、技術の進歩により、今後はその違いが小さくなっていくと思われる。

○　後半期に新設される「ゲームゲノム」について。新しいＮＨＫらしさを意識しながら番組を開発していくと聞いていたので､その点に注目しながら番組を視聴してきた。「ゲームゲノム」は特集番組として放送された際も評判になり､ＳＮＳでも話題になっていたと記憶している。その後、未放送分を含めた拡大版が放送されるなどのプロセスを経て、レギュラー番組として開始するのだと思う。これからの時代は、新しいＮＨＫらしさを視聴者や地域の人たちと一緒に作っていくことが重要だととらえ、ＮＨＫ全体として動いていると理解している。ただ､「ゲームゲノム」のケースのように新しい番組を開発し、ＳＮＳを通じてみんなで盛り上げ、結果的に新番組として採用されたというプロセスが、ブラックボックス化されているように見えてしまうと非常にもったいないと思う。なぜレギュラー番組になったのか、これまでの番組開発とどういったプロセスの違いがあるのかなどをうまく伝えることで、視聴者や地域の人たちと一緒に進化していくＮＨＫの姿を十分にアピールできるのではないか。これは地域局でも同様で、昨今はプロセスを共有できているかを重視する人が増えてきているので、この点についてどのような感覚を持っているのかを聞きたい。

（ＮＨＫ側）

今までは番組を制作して放送し、それが終われば次の番組の準備といったように、番組の放送が終われば一区切りという感覚で、放送として電波に乗るものだけが視聴者との接点

という意識で進めてきた。しかし、「ゲームゲノム」や「１００カメ」のように、放送はひとつの表れで、根底には視聴者とのつながりがあり、ファンになってくれた人と一緒に番組を支えるという考え方をしていくことが、放送やＮＨＫにとって大切だと思っている。例えば「１００カメ」は、第１期・１１回の放送を終えたあとも番組ＳＮＳで毎日発信を続け、「１００カメ」という番組を支持するコアなグループが存続していた。今回の第３期の放送決定にあわせてＳＮＳでも告知を行い、そのコアな人たちにより番組を楽しみにしてもらい、引き続き支えてもらおうと考えている。こうしたお互いの信頼に基づいたリレーションを作っていくことは間違いなく大事になってくると思う。「ゲームゲノム」もこれから育てていく番組だが、９月に開催された大きなゲームショーで大々的に番組開始をアピールする応援団を結成した。今後、ＳＮＳなども活用して「１００カメ」のようなリレーション作りを進めていく。いただいた視点はさまざまな番組においてぜひ生かしていきたい。

○　最近、夜９時台のニュース番組を見ているとタレントのトークが多いように感じ、チャンネルを変えてしまうことがある。ＮＨＫと民放との違いがわかりにくくなっていると感じる。また、ＮＨＫの番組どうしでも、タレントが出演している同じような番組が連続して編成され、番組の切り替えがわかりにくいと感じる。タレントを出演させるなとまでは言わないが、ＮＨＫのアナウンサーなど力量ある出演者とのバランスが重要だと思う。また、かつての「クローズアップ現代」のようなＮＨＫらしい骨太な番組が少ない印象を受けた。番組編成を検討する際には、そういった面でのバランスも意識して欲しい。

（ＮＨＫ側）

誰に出演してもらうかではなく、あくまでも番組の中身が大事だと思っている。それぞれの番組には、伝えなければならないことや楽しんでほしいことなど、メッセージやポイントが必ず存在する。制作者としては、どういう人が司会やナレーションをやれば、その核となる部分が最も魅力的に伝わるか、心に届くかということを、内容そのものと同じくらい意識している。その結果、内容に合わせて話が上手なタレントにしようとか、落ち着いたアナウンサーや俳優にしようと判断している。

これまで、タレントの力を借りて番組を届けようとするあまり、
その部分が前面に出てしまった番組がなかったわけではない。
今でもそのような番組とならないよう非常に気をつけている
が、いただいた指摘は今後の参考としたい。

○　新しい層の獲得や、いかに見てもらえるかという工夫のひとつだとは思う。しかし、ＮＨＫらしさというものは視聴者もなんとなく感じている部分もあり、民放とは違う楽しみ方がＮＨＫにはあると思う。そのようなＮＨＫと民放の差異、特徴の違いは、ひとつひとつの番組に関係しているように思う。

＜東海　ドまんなか！「ドリーム★ネイバーズ　【夢応援バラエティー】」
（総合　９月９日(金)放送）について＞

○　日本で暮らす外国人は、言語の問題や文化の違い、周囲にどう溶け込むのかといった、さまざまな面で苦労していると思う。番組ではそうした問題には詳しく触れず、冒頭から地域の夏祭りでネパールの踊りを披露したいという話題が取り上げられており、導入部分から楽しく視聴できた。夏祭りは中止になったものの、踊りの発表会として披露する場を実現できたのはよかった。また、踊りを通じた交流もお互いの文化を理解するきっかけとなっていてよかった。ただ、そもそものきっかけとなったごみ出しの問題や外国人と日本人との間で交流が少ないという問題について、もっと詳しく取り上げてほしかった。その後どうなったのか、ごみ出しの問題はどう解決するのか、ネパールの人たちはなぜ日本に来てなぜ苦しんでいるのかというところまで伝えてほしかった。番組の途中で紹介されたハラールラーメンの話題は、別の回で放送してほしかった。ハラールラーメンを努力して作っていたのはよかったし、インドネシアにも店舗ができたという話もよかったとは思うが、単に事実を紹介しただけで終わってしまった印象だった。別の回で、このテーマだけを丁寧に掘り下げてほしかった。番組全体としては見ていて飽きることがなく、ゲストの俳優・柴田理恵さんのコメントもおもしろくてよかった。

○　少子高齢化や人口減少が進む日本において、そう遠くない将来、社会や経済を支えていくために外国人との共生が必要となる可能性があると思う。そういった中で、番組で紹介していたような、お互いの文化を学び合うことを入口として、理解を深めていくことは大事なことだと思う。番組では、上から目線ではなく自然体でお互いを尊重し合っている様子をうまく捉えていたと思う。番組で扱っていたような実例を多くの人が見て、自分ごととして受け止め、機会があれば実際に関わってみるというプロセスが今後必要になってくると感じた。番組として、あまり大きく振りかぶることな

く、コンスタントにリアルな実例を提供し続けることは、とても大きな意義があると思う。ドアから神棚へ赤い手形を床に付けて神様の通り道にするというネパールの風習を見せる場面があったが、文化の違いがインパクトを持って表現されていると思った。ネパール人の女子中学生がネット動画を手本にして覚えた踊りもよかった。日本語と母国語のどちらの言語も年齢に合った発達をしていないため、自分の思いを十分に表現することが難しい状態を意味するダブルリミテッドという問題は知らなかったが、将来外国人が増えたときの教育の課題のひとつになると思う。番組後半、３月に放送した福井のハラールラーメンのその後についての話題が挟まれたが、番組の中だるみを締める効果があったと思う。最後にまとめとして「双方向」ということばが出てきたが、これもよいと思った。今、日本で暮らす外国人はもちろん、将来に向けてもこうした実例の提供をこつこつと積み上げていってもらいたい。

○　このような番組がＮＨＫで放送されていること自体が、日本における将来的な多民族化を象徴しているのではないかと思う。民放でも、外国と日本の踊りを教え合うような、相互理解、国際交流を紹介する番組は目にするものの、将来的には日本の多民族化は避けられないという意図をもって制作された番組は、ＮＨＫにしか制作できないのではないかと感じた。そういった観点では、冒頭のごみ出しの問題は適切な事例だったのか疑問に感じた。ごみをきちんと出せない外国人が困っているならば、日本語表記しかなかったごみ集積場を多言語表記にしたり、外国人の習慣を理解したうえでごみを出しやすい工夫をしたりすることなどが、多文化共生社会としての解決方法なのではないかと思う。もし、そうした取り組みがあるのであれば取り上げるべきだったと思う。ダブルリミテッドということばは初めて聞いた。日本と母国の双方のメリットを生かして“ダブルギフテッド”となる可能性を秘めた子どもたちの能力を十分に引き出せていない状況になっていることを初めて知り、非常に残念に感じた。番組を見て、異なるアイデンティティを持つ人どうしが自身のアイデンティティを披露し合い、交流し、尊重し合うことが、その解決策のひとつであることが分かった。自身のルーツを知ることが自己肯定感や自尊心を育て、自分たちが少数派である社会においても堂々と生きられる力になることが伝わってきた。自治会で活動してる人は高齢の方が多かったが、すばらしい交流の機会を作り出しており、見習いたいと思った。ただ、次の世代にこのような活動がつながっていくのか少し心配に思った。

○　多文化共生がテーマで、地域住民同士の交流に加え、日本で暮らす外国人の悩みにも焦点が当てられており、気づきを得られた。印象的な場面としては、畳と赤い手形の組み合わせがあった。日本では恐怖を感じる組み合わせだが、ネパールでは真逆で幸運のおまじないという意味があり、文化の違いを示す例としてよく表現されていたと思う。また、外国にルーツがありながらも幼い頃に日本に来たことで母国のことば

や文化が分からず、アイデンティティに悩む子どもたちの存在や、ダブルリミテッドという問題について新しい視点を得た。今回の主人公であるネパール人のウプレティさんは、友人から日本の話を聞き、日本に興味を感じて来日したと紹介していたが、具体的に日本の何に興味を持ったのかを詳しく知りたかった。外国人が日本に対してどういう思いを持って来日したのかを理解することで、より身近に感じられるのではないかと思う。ゲストの柴田さんも言っていたように、共生社会を作っていくためには、踊りという各国共通の文化をきっかけとして交流を図っていくような、小さなことの積み上げで相互の理解を深めていくことが大事だと感じた。ごみ出しの問題については、集積場には日本語表示しかなく、看板も色あせて薄くなっており、外国人にとって分かりやすい表示にはなっていなかったと感じた。結局、それがどう解決されたのか示されず消化不良だった。また、ネパールのあいさつを紹介する際に、ネパール語のテロップで表記が出たものの、どのような発音なのかは分からずじまいだった。発音が日本人には難しく、広く知られている「ナマステ」でもよいとのフォローはあったものの、相手の文化を理解したいという気持ちを阻んでいるようでもったいなく感じた。

○　「ハロー！ネイバーズ」キャンペーンが始まってから、「ドリーム★ネイバーズ」はこれまで２本作られていると思うが、日本で暮らす外国人の夢を応援するというポジティブな内容で、いろいろなテーマを取り上げており非常によいと思う。特に、地域で外国人との交流に取り組む喜多村隆さんたちが、みんなでアイデアを出し合いながら、名古屋弁の軽妙な語り口の中で楽しみながらやってみようという姿勢におおらかさを感じた。ダブルリミテッドについては、日本に生まれ日本語だけを使って育った子どもでも発達過程でうまくコミュニケーションが取れなくなり社会から距離を置いてしまうことがあり、ことばの壁を乗り越えるためには隣人との関係作りが大切だと番組を見ていて感じた。ＭＣのタレント・副島淳さんと、ナレーションを担当した声優のファイルーズあいさんもおそらく同様の悩みを乗り越えてきたのではないか。その力が異文化の橋渡しとなる仕事において強みになっているように感じた。そのような人が出演することで、同じような悩みを持つ人たちの励みにもなっているのではないかと思った。外国人の視聴者がこの番組をどのように受け止めたのか、把握しているのであれば教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

ごみ出しの問題については、取材していく過程で情報を取捨選択した結果、短い時間となったが、大切な要素も含まれており、冒頭だけでなくもう少し詳しく取り上げてもよかったかもしれない。番組を見た外国人からの反応は直接届いて

はいないが、そうした人にも響くような内容にしていくことが、これから番組を育てていくうえで大切ではないかと思う。ダブルリミテッドという概念については、収録の際に副島さんがまさに自分もそうだと熱く語ってくれた。父がアメリカ人で、日本語も英語もあまり話せず、小学生の時にとても苦労した経験があり、同じような状況にある人たちへの理解と共感の視点を持っており、スタジオトーク部分でもかなりの時間を割いた。

○　非常に重要な番組だったと思う。視聴者の反応も大事だが、今後の日本のことを考えると、ＮＨＫだからこそ、こうした番組をできるかぎり多くの人が目にできるよう、いろいろな種類の番組を作っていくべきだと思った。多文化共生について取り上げる際に最初に必ず出てくる話題ばかりで目新しさがなく、軽い番組だと感じたが、その軽さが逆によかった。多文化共生を扱うと深い番組ばかりになって視聴するのに労力が必要となる場合が多いなか、この番組は何か別のことをしながら見てもキャッチアップが容易で最後まで見ることができ、非常によい意味で軽い番組だと思いながら視聴した。一方で、番組審議会の視聴番組でなければ視聴しなかったと思う。私自身、多文化共生に興味がある方だと思うが、定期的に見ている動画共有サイトの番組などに比べると、身近で興味のある内容とは感じられず、番組を通じてどのような気づきが得られるのかが分かりにくいからだ。実際、今回はネパールとの多文化共生を題材にしていたと思うが、番組を見てネパールについて分かったことが少なく、知人に共有できるような話がなかったように思う。例えば、番組の中心となるネパール人と日本人が、こうした機会でなければ聞けないような身近な質問を１０問１０答し合うコーナーなどを番組の中心に置き、前半・後半部分に今回のような話があれば、視聴者が知りたいと思えたり、共感したりできる部分が増え、得られた知識を誰かと共有することもできるのではないか。視聴者が身近に感じる部分を増やしていくことで、よりよい番組になるのではないか。

○　ネパール人と地域の人たちとの交流を取り上げ、スタジオでのコメントなどもとてもよい番組だったが、２５分という放送時間に対して内容が薄く感じた。冒頭から１０分ほど見ると、その後の展開が大体見えてしまい、この先が分かるなと思ったタイミングでハラールラーメンの話題が挿入される構成になっていた。ネパールの踊りを披露することを発案した人自身が実は踊れないことや踊りが好きなネパール人の中学生たちも、誰かから踊りを教わったのではなく動画共有サイトで学んでいること、新型コロナウイルスの感染拡大によって夏祭りが中止になってしまったことなど、夢の実現に向けた一つ一つの物語がさらりと描かれていて、このあとは問題なく踊りが披

露されるのだろうと予想できてしまった。ダブルリミテッドという課題やお互いを理解するには出会いが一番大事だという話、あるいはごみ出しの問題など、掘り下げるトピックをもうひとつ加えてほしかった。

○　１回目に番組を見た際に、最初は音だけを聞いて途中から画面を見たが、ＭＣの副島さんのいかにも外国人的な外見が、流ちょうな日本語から想像していたものとは大きく異なっていた。勝手な先入観を持っていたことに気づき、驚くと同時に番組にふさわしい人選だと感じた。番組の最後に自身の体験を話しており、大変熱い思いを持っていることがよく伝わってきてとてもよかった。ただ、ネパールの踊りを披露したいという夢の発案者として、ウプレティさんを中心に据えたことは気になった。踊りを披露したかったのはダンス好きのネパール人の中学生たちであり、披露したいという熱い思いがあった。また、地域の活動をまとめる喜多村さんには、日本人とネパール人との関係をよいものにしたいという夢と情熱があった。ウプレティさんは学者肌で、物事をふかん的に見て改善に向けたよい意見をいくつも出していたが、夢を実現するのだというパワフルさという部分では、焦点をほかの人に持っていったほうがよかったのではないかと思う。夏祭りが新型コロナウイルスの感染拡大で中止になるなど、制作側にとっても予期せぬ事態の中、みんなで力を合わせ、日本語教室で踊りを披露することができ、結果として心温まる場になっていたことは本当にすばらしいと思った。ハラールラーメンの話題は、以前取り上げた内容が今はこうなっているのだと継続的に知らせてくれるもので、楽しく見ることができた。ＮＨＫらしく、番組そのものが夢の実現の後押しをしているように感じ、価値あるものだと思う。ダブルリミテッドということばは聞いたことがあったものの、改めて見聞きすると本当に難しい問題だと感じた。それぞれの人が自身のアイデンティティをどのように作り上げていくかはこれまで以上に大切になってくると感じたので、とてもよいことばを取り上げたと思う。

○　一人の普通の住民のように見えるウプレティさんが、ネパールの踊りを地区の夏祭りで披露したいと提案する流れは、導入としては唐突だと感じた。「ハロー！ネイバーズ」のホームページでは、ウプレティさんが地区の人たちと災害時などを想定した協力関係を築く活動をしていたことなど、番組では取り上げていなかった内容が掲載されていたが、そうした関係性があったうえでの提案だという背景を番組で紹介したほうが分かりやすかったと思う。ハラールラーメンの話題は、前回取り上げた話題のその後を知ることができ、とてもよいと思ったが、ほんの短い時間だけ出演していた店主のコマラ・デヴィさんの妹に関する説明やインドネシアに出店した２号店を誰が運営しているのかといった情報がなく気になった。また、「ハロー！ネイバーズ」のホームページで出演者を募集をしているが、番組に出演している人は応募した人なのか、

ＮＨＫが取材を行う中で見つけた人なのか教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

今のところ、番組で取り上げた人は取材の中で出会った人だ。こうした取り組みがあることを広く伝え、情報を提供してもらいながらともに作っていきたいと考えており、今後は応募者の中から番組で紹介する人を取り上げていきたい。この番組は、柔らかいテイストで身近な部分を入り口にして見てもらえるよう意識しながら制作している。役に立つポイント、家族や周囲の人に伝えたくなるようなポイントは何か、視聴後の満足感はどうかといった点をより意識して、番組のテイストを守りながら制作してくことが今後の課題であり、取り組んでいくべきことだと思う。

○　明るく前向きな雰囲気がとてもよかった。アメリカ人の父と日本人の母の間に生まれ、幼いころからいろいろな悩みを抱えてきたであろう副島さんは進行役として適任で、楽しい会話が得意な柴田さんが随所で発することばには嫌みがなく、よい合いの手になっていたと思う。外国人が多く住む地域ではごみ出しのマナーや深夜の騒音など、日本人が眉をひそめるような問題ばかりがクローズアップされがちだが、解決には相互理解が不可欠として、多文化交流に取り組みはじめた明治学区の人たちはすばらしいと思った。喜多村さんたちの努力が、ネパール人などのネイバーズと地域に住む日本人との接着剤の役割を果たしているのだと思う。夏祭りの準備段階から、ＮＨＫの取材が入ることで地域がいっそう盛り上がっていたように感じた。ウプレティさんの明るいキャラクター、中学生３人のたおやかな踊り、新型コロナウイルスの感染拡大による夏祭りの中止から日本語教室での踊りの披露という流れもスムーズでよかった。以前放送したハラールラーメンのその後を取り上げ、番組の途中に挿入したのは、間を設ける演出だったと感じた。評価が分かれる部分かと思うが、個人的には嫌いではなかった。こうした多文化交流の取り組みがほかの地域にも広がってほしいと思えるよい番組だった。

＜放送番組一般について＞

○　７月２２日(金)の東海　ドまんなか！「課外授業　東海の私たちが地球を救う！」(総合 後7:30～7:55 東海３県・静岡県域)を見た。ＳＤＧｓに先進的に取り組む静岡の高校生たちが、三重県で最先端の技術を学ぶという内容だった。高校生たちのふだんの様子を取材しており、ただ学ぶだけでなく実際に行動に移してＳＤＧｓに取り組む姿も取り上げていたので、とても応援したくなる作りになっていた。コメンテーター

として出演していたタレントのキンタロー。さんはとにかくおもしろく、高校生たちの自然なコメントを引き出す役割も担っていたと思う。高校生たちとコメンテーター、田所拓也アナウンサーがロケに一緒に出て議論する形式になっていて、内容をより深めていたように感じた。一方、自然エネルギーの負の側面にまったく触れていないことが気になった。例えば、盛り土の上に建つメガソーラーや巨大風力発電施設など、日本各地で原生林を切り開くような開発が計画されている事例がある。自然エネルギーの循環性や再生可能性が環境に優しいと表現されているだけで、そのエネルギーを得るための施設を建設すること自体は環境に優しくない面もあることには触れられていなかった。今回のようによい部分ばかりを紹介すると、負の側面を踏まえることなく自然エネルギーの利用を推進する力が働いてしまうのではないか。また、学校の授業のように１限目と２限目で分かれる構成となっていたが、どちらも三重県の話題だったことがとても意外だった。コメンテーターが愛知県出身、高校生たちは静岡県の学校の生徒、１限目が三重県の話題ときたので、２限目は岐阜県の事例が来ると予想していた。番組には岐阜県の要素は入っておらず、東海４県をバランスよく取り上げることにこだわりがなかったのであれば、三重県の高校生が地元のＳＤＧｓに関する取り組みを学ぶという内容でよかったのではないかと思った。

○　８月９日(火)のＮＨＫスペシャル　混迷の世紀「第 1 回 ロシア発 エネルギーショック」(総合 後 10:00～10:49)を見た。内容を少し詰め込みすぎていると感じ、細かい点では気になる部分はあったものの、シリーズの初回ということでかなり力を入れていることが伝わりよくできていると思った。番組の放送後にも事態が進展したが、サハリン２などは非常に影響が大きい事柄なので当事者意識を強く持って視聴した。視聴にあたっては、情報の量や質、情報源や精度、視点の多面性に加えて、エネルギー業界の歴史や仕組み、政策の関与や将来展望、そして取材先がどこで誰が登場するかなどに注目した。資源エネルギー庁の担当者や発電会社の副社長、資源開発会社の社長、当時の経済産業大臣などが出演しており、政府の政策に基づく確度の高い情報を中心に構成されていたと思う。ロシアによるウクライナ侵攻が始まった時のような感情的な意見が入っていない点もよかった。一方、ＬＮＧの歴史という観点からは、欧米では天然ガスが広大な大陸に作られたパイプラインで気体のまま取り引きされているのに対し、日本や韓国、台湾などではコストをかけてでもＬＮＧという液体の形で海を渡って輸入せざるをえなかったという前提の説明が不足していると感じた。電力不足についても取り上げていたが、電力需要のピーク時間帯に耐えられるどうかが問題なので、発電容量のグラフだけを見せると太陽光発電の過大評価につながるように思った。また、電源ごとに出力を調整する難易度が異なることも紹介するべきだったと思う。ガス田をみずから開発すれば輸入に頼らず長期にわたって安定的にガスが入手できるものの、資源を探し当て生産できるようになるまでは１０年から２０年の

年月を要し、投資額も数兆円規模になることがあるため、脱炭素の時代に将来的にガスという化石燃料の需要があり続けるのか判断が難しく新規投資ができないと紹介していた。脱炭素に向けたプロセスのロードマップが重要だという大事な提言につながるのでよかったと思う。ＬＮＧの開発プロジェクトがなぜ数兆円もの規模になるのかについて、特に初期の探鉱の部分などをもう少し掘り下げて説明していれば、長期契約の必要性を含めより理解が進んだのではないか。カタールの企業との大型契約を更新しなかった件では、地域分散や価格の問題だけを紹介し、ホルムズ海峡という不安定要素を抱えていることには触れておらず、すっきりしなかった。脱炭素の取り組みでは、二酸化炭素から合成メタンを作るメタネーションなども取り上げるとよかったのでないか。

○　８月１７日（水）の病院ラジオ「高齢者医療専門病院編」（総合 後 10:00～10:44）を見た。高齢者医療を専門とする病院について詳しくない人にとって、どのような病院なのか、どのような人たちが関わっているのかを知ることができ、そこから考えさせられるものがあるよい番組だった。母親がアルツハイマー病の親子、妻がアルツハイマー病の夫婦などが出演していたが、どの人も入院患者ではなく外来患者のようだった。これまでの「病院ラジオ」で、がん専門の病院などを取り上げた際には、入院患者が出演して病院での生活を紹介していたが、今回はその部分がなかったので不思議に思った。サンドウィッチマンの２人が話を引き出すのが非常にうまいのはもちろんだが、魅力的な人や興味深いエピソードがそろっていたのは、スタッフが事前に取材を重ね、いろいろな人のエピソードを集め、その中から選抜した結果だと思う。時代を反映し、認知症患者の介護をしている人や患者本人の本音を引き出すなど興味深く、取材力やサンドウィッチマンの話を引き出す力などが際立ち、感情移入しやすい番組だった。ＮＨＫプラスなどでもぜひ多くの人に見てほしいと思った。ただ、最後のまとめとなる部分がなく、唐突に終わってしまったように感じたので、「サンドのお風呂いただきます」のようにまとめのコメントをフリップに書くなどの演出があってもよかったように思った。

○　８月２６日(金）の東海　ドまんなか！「東海が誇る！おもちゃ花火！コスプレ国際交流！大特集」（総合 後 7:30～8:13 東海３県ブロック）を見た。どちらの話題も歴史や社会環境の変化といった視点からコメントしていて、興味を引く内容だった。おもちゃ花火の話題では、子どものころに小銭を持って駄菓子屋に行き、どれを買おうか悩んだ思い出がよみがえってきた。花火の遊び方を知らない大人が増えるなど環境が変わっていく中でも、なんとか普及させようと活動する花火職人や地域の人の姿に感動した。コスプレサミットの話題では、名古屋市にある大須商店街の近くを練り歩く姿などを紹介していて、かなり大きいイベントなのだと実感できた。最初は、参加

者が衣装やパフォーマンスになぜこれほどこだわるのかが理解できなかったが、アニメのキャラクターに憧れ、同化したいと思っている人が、同じ思いを持った人たちと衣装やパフォーマンスを競い合う楽しさがあるのだろうと感じた。コスプレイヤーの人たちは衣装作りやパフォーマンスをいつも考えていて、生活の一部になっているのだと思う。子どもや高齢者も年相応の楽しみ方ができる文化になっていくのかと想像が膨らんだ。コスプレサミットの舞台裏をしっかりと紹介していて、取材したフランス代表チームが知名度の高いキャラクターのコスプレで優勝するなど、取り上げ方がよかった。入国にはビザが必要な状況なので、海外から来た人たちは相当苦労しただろうと思う。その点はあまり掘り下げてはいなかったものの、参加者の背景などはしっかりと説明しておりよい番組だった。ただ、技術的にやむをえないのだろうが、どちらの話題でもスタジオと中継先とのやり取りでタイムラグがあったのが気になった。

○　８月２６日(金)のＵＰっぷ富山　きとラボ「国をこえて　ここで生きる」(総合 後7:30～7:56 富山県域)を見た。中部地方のＮＨＫ全体で取り組んでいるという多文化共生のテーマに沿った番組だった。多くの外国人が暮らす富山県射水市で、空き店舗を活用した交流施設「ブレイブス」を設立した、日本語が堪能ではない日系ブラジル人の山下アランさんを取り上げていた。日本人も外国人もコミュニケーションを取り、笑顔になってほしいという熱い思いがよく伝わってきた。ただ、そもそもどこに施設があるのか、教室やお店を開きたい場合はどうするのかといった、興味を持った人が施設にアクセスするために必要な情報がなく、もったいないと思った。多くの日本人にも訪れてほしいというアランさんの思いがあるのだから、特定の施設の宣伝にならないよう配慮が必要なのかもしれないが、何らかの方法で情報を提供してもよかったのではないか。日本人の利用者をもっと増やしたいアランさんがイベントを通じて苦手とする日本語でのあいさつを練習する場面や、日本の子どもたちが母親の助けを借りながらイベントに参加し、「ブレイブス」に入ってさまざまな国の子どもたちと友達になっていく場面など、ストーリーとしてきれいにまとまっていた。「ブレイブス」は勇者たちといった意味だと思うが、施設名の由来も紹介してほしかった。後から調べたところ正式名称は「ブレイブス・カルチャーセンター」ということだが、「ブレイブスに入る」という音の響きはスポーツチームに入るかのように感じられた。施設ではブラジリアン柔術も教えていたので、最初は、柔術チームの名前なのかと勘違いした。施設名の由来を紹介したり、「ブレイブス・カルチャーセンター」と正式名称をコメントしたりしたほうが、途中から番組を見た人にも分かりやすいのではないかと思う。

○　９月２日（金）の東海　ドまんなか！「“さまよう若者たち”とどう向き合うか」(総合 後7:30～7:55 東海３県・静岡県域)を見た。コロナ禍における女性の貧困に注目して取材する中で、若者たちが夜の街で危険な状況に陥っていることを知り、今回の

番組の制作につながったとのことだった。今回のテーマは、コロナ禍によって加速・拡大した現象のひとつとして記録しておくべきものであり、時代の記録として非常に重要な番組となっていたと思う。一方で、番組を見るだけでは、この現象を構造的に十分に理解できないと感じた点がある。まず、今だからこその現象とは何かという点だ。社会全体の中で不安がまん延し、若者が絆や自由を求めたり、承認欲求を満たすための行動に移すことは、これまでもずっと起きてきた現象だと思う。それらと今回取り上げられた現象とは何が同じで、何が違うのかが分からなかったので、明確にしてほしかった。次に、最近の若者全般に共通する行動と夜の街に集まる若者特有の行動が混在した状態で取り上げられていた点だ。例えば、最近はお互いの居場所がわかるアプリで、連絡を取らなくても相手の位置を確認しながら集まると紹介されていたが、これは夜の街に集まる若者に限った話ではない。このアプリが使われることによって、夜の街に集まる若者の数やリスクが格段に増えたといった事実があるのであれば、この時代特有の話として取り上げるのにふさわしいと思う。もし、明確な関連性がないのであれば、最近の若者全般が使っている情報共有手段を、あたかも夜の街に関連した特徴的な話だと誤って視聴者に伝えてしまう危険性があると思う。

○　９月２日（金）の東海　ドまんなか！「“さまよう若者たち”とどう向き合うか」を見た。番組冒頭で、未成年への取材にあたっては必要に応じて保護者の承諾を得るなどＮＨＫのポリシーの告知があり、個人が特定されることでリスクを被る可能性がある未成年が出演するシーンでは、音声を変えてボカシをかけた状態となっており配慮が感じられた。今の夜の街の姿は昔とはまた違っており、ＳＮＳ上での関係性や夜の街にいること自体が自傷行為のような意味合いを持っているということ、若者たちを支援しようとする大人と仲介役のような同世代の若者が支援側にいて話を聞く体制が必要だといったことは、とても関心を持って見ることができた。全体として、若者の声を聞くことが必要になってきていると考えさせられる番組だった。また、番組の中でコメンテーターとして出演していた全国こども福祉センターの荒井和樹さんのインタビュー記事も、番組内で表示されていたＱＲコードから読むことができ、文字として読む分かりやすさがあり、問題の構造を理解することに役立った。番組としては大変意義深いものだったと思うが、音声を変えて、ボカシがかかっている映像が多く、一回聞いただけでは本人が何を話しているのか聞き取りにくい部分があった。もう一度巻き戻して聞いたり字幕に頼ったりしないと何と言っているのか聞き取れず、このような番組を制作する上で難しいところだと感じた。音声を変える場合には、高い声に変換するのではなく、聞き取りやすいながらも本人の声と特定されないような音声に変えることはできないものだろうか。

○　９月２日（金）の東海　ドまんなか！「“さまよう若者たち”とどう向き合うか」を

見た。番組冒頭で、未成年への取材にあたっては必要に応じて保護者の承諾を得るなど配慮したと明確な説明があった。この番組を放送するうえでの誠実さが感じられ、ＮＨＫらしくてよかった。昔から、家や学校に居場所がない子どもたちが夜の街をさまよったり非行に走ったりということが、非常に多く報道されてきたと思う。そうした子どもたちが、特に悪い子でもないのに犯罪に巻き込まれてしまい、その後の人生が困難なものになってしまうというところも、今の時代と共通点が多いと感じた。昔は、いわゆる熱血先生が街に出ていって子どもたちの話を聞いていたと思うが、今は支援の場に産婦人科の先生や同世代の若者がいると知り、そういった点が支援の形として今と昔とでは大きく変わっていると感じた。取り上げられたテーマは普遍的であり、昔からある思春期の子どもたちの行動だと思うが、その中でずっと変わらないものと今だからこそというものをもう少し明確に見せてもらえると、番組の内容がより理解できるのではないかと感じた。ただ、若い女性のファッションの特徴を示す地雷系や量産型ということばや、スマートフォンの位置情報や動画共有サイトの動画を見て集まってくる様子は、今の若者たちの姿が反映されていると感じた。

○　９月２日(金）の東海　ドまんなか！「“さまよう若者たち”とどう向き合うか」を見た。かつて深夜に街を徘徊していた若者たちは非行少年・少女と呼ばれ、暴走族とつるんだりドラッグを使ったりということもあったと思うが､それはあくまで｢不良」と呼ばれる特殊な人々だった。ところが、番組で紹介されていた少女たちは親と折り合いが悪いなど家庭に居場所がないというだけのどこにでもいそうな今どきの少女ばかりだった。そんな少女たちが深夜の街にたむろし、性被害や犯罪と隣り合わせの状況に陥っていたり、市販薬の大量摂取におぼれていたり、風俗店で酷使されていたりする実態が次々と紹介され、田所キャスターのことばではないが「親として胸がつまる思い」で見た。月二回、性の啓発活動をしている「街角保健室」の取り組みの中で、かつて自傷行為をしたことのあるスタッフのひかりさんが、ある少女に対して風俗から抜け出だすよう勧める会話のやりとりが細かく描かれていた。同じような経験をもつ同世代からのアドバイスだからこそ、素直に聞き入れてもらえるのかもしれないと思った。本気で彼女らを救おうとするならば、ひかりさんのような相談相手をもっともっと増やしていくことしか、大人にはできないのではないかと無力感にも陥った。取材の端緒となったテーマがコロナ禍における女性の貧困だったこともあり、少女中心になったのだろうが、少年の例があってもよかったと思う。また、メディアが最も力を入れるべきは防災報道だとの考えから、毎年９月は必ず防災関連番組を視聴してきたが、今年は名古屋局制作の防災関連番組が見当たらず、残念に思った。

○　９月２日(金）のザウルス！今夜も掘らナイト「福井が誇るショッピングセンターＳＰ」（総合 後 7:30～7:57　福井県域)を見た。「福井方式」と呼ばれるショッピング

センターの運営方式は、地元でも意外と知られておらず、福井のショッピングセンターは特殊な形態をしていると県民が改めて気づかされるきっかけとなる番組だったと思う。地元の商業者が協力して大手のショッピングセンターを誘致し、高齢者向けの施設を併設するといった独自性を発揮しているなど、福井のショッピングセンターの特異性にしっかりとフォーカスされていたと思う。それぞれの商業者へのインタビューからは、地域との密着度の高さや地域に対するまなざしが感じられた。住んでいると当たり前のように思っていることでも特殊だと改めて知ることができ、確かに福井のショッピングセンターは誇らしいと感じることができた。最近の「ザウルス！今夜も掘らナイト」のスペシャルで取り扱う内容はおもしろい。福井らしい切り口で番組作りをしていると思い、最近よく見るようになった。

○　９月１０日(土)のＤｅａｒにっぽん「歩き出そうと　決めた島で　～三重・渡鹿野島～」を見た。地域おこし協力隊の“あるある”が満載で、大変引き込まれた。協力隊として渡鹿野島へやってきた峠広之さんに対する、喝とエールが止まらなくなるようなとてもよいドキュメンタリーだった。ただ、峠さんが島で萎縮してしまった原因として挙げていた失敗というのが具体的にどういったものだったのかが分からなかった。企画書をたくさん書き、それがすべて採用されなかったと紹介してはいたが、実際の行動に移したうえで何らかの問題が起きたことを失敗と呼ぶと思う。視聴者が理解しづらく、受け止め方に違いがでやすい内容については編集などで意識的に補う必要があるのではないか。地域の祭りのあと、峠さんが「きょう、やっと笑えた」と言う場面や、番組の最後に地元でのラジオ体操に参加する場面があった。冒頭では峠さんの姿がないラジオ体操の映像があったため、祭りのあとに島の人たちとのわだかまりが解け、ラジオ体操に参加するようになったと感じたが、実際にそうなったのかが気になった。取材が長期になればなるほど、取材される側がカメラを意識して演じてしまう部分もあると思うので、土曜の午前中というハッピーエンドが望まれる放送時間帯を意識し過ぎた演出でなければよいがと思った。また、渡鹿野島の売春に関する歴史が、売春ということば自体は使わずとも、島の人たちのインタビューから徐々に引き出されており、島を支える重要な産業だったと認識されていることが伝わってきた。ただ、売春産業の衰退により島が寂れたことと峠さんの地域おこし協力隊の話には、直接的には関係がないように感じた。

○　「まるっと！みえ」について。加齢によりテレビの音声が聞きづらくなった人もたくさんいると思うので、視聴者投稿で寄せられた花の写真が何の種類なのかといった情報は、コメントで紹介するだけでなく文字テロップも入れてほしい。また、特に高齢者はリモコンを使って字幕を表示させる方法が分からない場合や持っているテレビが字幕に非対応の場合があるので、字幕だけでなく、なるべく文字テロップによる情

報を増やしてほしい。

（ＮＨＫ側）

「まるっと！みえ」などのニュース・情報番組において、視聴者から投稿された写真の情報などをコメントだけでなく文字テロップでも補足してほしいという件については、制作担当者に検討を指示する。また、リモコンのボタンを押すことで表示される字幕放送については、耳が不自由な方のために、対象となる番組を増やしてきている。今後、各地域向けの番組についても、字幕放送の対象となる番組を増やせないか検討していきたい。

○　高齢者に対するサービスや配慮といった点は、障害者に対するものとの境目にあるともいえ、こぼれ落ちてしまう部分もあると思う。すべてに対応するのは大変だと思うが、そうした声もあるということは伝えておきたい。

○　「ＮＨＫオンデマンド」で配信される番組と配信されない番組の選定基準が気になっている。今では、「ＮＨＫプラス」でもさまざまな番組が見られるようになっている。「ＮＨＫプラス」で見逃しても、よい番組であれば「ＮＨＫオンデマンド」で見られると期待して検索したら、見られず残念に思ったことがある。「ＮＨＫオンデマンド」であれば昔の作品が何でも見られるのではないかという勝手なイメージを持っており、そういう期待感は多くの視聴者にもあるのではないか。「ＮＨＫプラス」がない時代から「ＮＨＫオンデマンド」はあったと思うが、今後どのような考え方で進めていくのかを知りたい。

（ＮＨＫ側）

過去に制作された番組をネットで配信するためには、出演者の許諾や著作権など権利関係をクリアにすることが必要となる。ただ、過去の名作と言われるようなドラマなどの人気番組を配信しようとした場合、当時は配信を前提にして制作されていなかったため、すべての出演者の許諾を得たり音楽などの著作権を確認したりするのが難しいことが多い。そういったものをすべてクリアできた番組が、「ＮＨＫオンデマンド」で配信されている。一方、「ＮＨＫプラス」の場合、一部コンテンツを除き、全国向けの番組については原則配信対象となっているため、制作する段階で配信を前提とした権

利処理を行っている。

○　「ＮＨＫプラス」の東海・北陸プレイリストをよく利用しているが、配信されている番組がとても少ないと感じる。配信期間が放送終了から２週間と限られているからだと思う。全国の番組をすべてまとめれば２週間程度の配信がボリューム感としても適切だと理解できるが、各地域ごとに切り分けた場合、番組数が少なくなりすぎる。地域向けに放送された番組に限っては、配信期間をもう少し延長することで、ある番組を見て興味を持った人が、また別の番組を見てみようという接点が増やせるのではないか。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫプラス」において地域向け番組の配信が少ないという問題意識は我々も持っている。担当部局にも要望を伝えており、改善に向けた検討が進むものと考えている。夕方６時台のニュース・情報番組の見逃し配信については、すでに配信を開始している名古屋局を含む全国の拠点局の番組に加え、１０月からは関東甲信越と関西の地域局の番組の配信が開始される。現状、地域向けの番組については、見逃し配信のみで放送と同時の配信はないが、技術面などで地域向けのサービスを拡充するよう積極的に要望を伝えていきたい。

○　「ＮＨＫプラス」で視聴された回数は、いわゆる視聴率には反映されているのか。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫプラス」での視聴回数は視聴率には反映されていないが、毎週１回、担当部局では前週の番組がどのように見られたのか検証している。視聴率も見ているが、「ＮＨＫプラス」の視聴数も視聴率と並ぶ重要なものだと考えている。これらの指標を考慮しながら、番組改善に向けて取り組んでいる。テレビで見てもらうだけでなく、より多くの人に番組を届けようという施策の一つとして捉えてほしい。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

２０２２年７月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、２１日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、ショートストーリーズ「＃３２　ハレの日に家族を写す」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、８月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	坂田　守史	((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)
副委員長	榊原　陽子	((株)マザーリーフ代表取締役)
委　員	遠藤　英俊	(名城大学特任教授)
	岡安　大助	(中日新聞社取締役)
	玉井　博祜	(能楽師・玉井屋本舗社長)
	成島　洋子	((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)
	平本督太郎	(金沢工業大学ＳＤＧｓ推進センター長)
	廣田　憲吾	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	安井　香一	(東邦ガス株式会社相談役)

（主な発言）

＜ショートストーリーズ「＃３２　ハレの日に家族を写す」
(総合　６月２４日(金)放送）について＞

○　カメラマンの花井達さんが撮影した、実家の仏壇に結婚を報告する新郎新婦をのぞき込む祖母の後ろ姿の写真はとてもよい作品で、のぞき込むポジションや角度、雰囲気など何とも言えないものが伝わってきた。花井さんが結婚式を中心に撮影するきっかけとなった、新郎からのメッセージを読む祖父の後ろ姿もよい写真だった。披露宴の主役は新郎新婦であり、家族は脇役、ほかの出席者がその間を埋めて気ままに楽しむという構図が多いと思うが、そこからは出てこない特別な感情が家族の間にはあるのだと気づかせてもらった。生まれ育った実家の姿を残したいと前撮りの依頼を受けた花井さんが、ただ単に建物を写すのではなく、家族がいてこその家だという気づきから､それをテーマに撮影していったのはストーリーが一貫していてよいと思う反面、同じ説明を二度聞いているような感覚が少し残った。それほど広くないスペースを走り回って空間を切り取ろうとする花井さんと、それを追いかけるテレビカメラ。負担

ともいえる状況を許容してくれた多くの当事者や関係者とのコラボと言える番組に仕上がっており、カメラワークもよかった。技術の進歩により、画像表現のバリエーションが増えていくことが楽しみである一方、写真という表現手段がなぜ人の気持ちに届くのかを教えてもらったように思う。

○　とてもおもしろい番組で、感動するシーンもありすばらしかった。通常、結婚式では新郎新婦の写真が多く撮られるが、家族に焦点を当てるというのはとても興味深い切り口だと思った。また、その切り口がどのようにして生まれたのかもしっかりと描き出していてよかった。新郎新婦の依頼に対して、花井さんが写真を撮りながら依頼に込められた本当の意味を探っていくシーンがあり、どのように１つ１つの作品が出来ていくのかもよく分かった。生まれ育った実家の姿を残したいとの依頼を受け、家の空間のみを撮影していた花井さんが違和感を感じ「空間に人がいないといけないのではないか」と気づいたシーンを入れ込むことによって、共感しやすい番組になっていたと思う。見ていて大変温かな気持ちになれた。２５分という時間の制約があるのでこれ以上改善の余地がないが、このすばらしい番組を審議会の委員でなければ見なかったと思い、残念だと感じた。最近はさまざまな動画配信サービスがあるが、それらには利用者の視聴傾向を反映し好みそうな動画のＰＲが出てくるなど、人と動画をマッチングする機能が搭載されている。ＮＨＫはよい番組を制作していると思うが、人と番組が出会う機会を増やすという観点では動画配信サービスの機能に比べて工夫が足りず、もったいないと思う。ＮＨＫオンデマンド、ＮＨＫプラスなどでいろいろな工夫を行っている最中だとは思うが、人と番組のマッチング機能の強化にも取り組んでほしい。

○　「ショートストーリーズ」は、これまで何度か視聴しどれもよい番組だと思ったが、今回も心温まる番組になっていた。結婚式では新郎新婦が主役で、友人や同僚が盛り上げ役、両親は最後に少し話す程度の場合が多い。本来はもっと中心にいてもよいはずの両親や家族が、いろいろな思いを持って式に臨んでいることを、写真という形でうまく切り取っているところに共感した。長い期間、カメラマンが常にそばにいることで、予期しないよい瞬間を撮ることができるのだと感じた。生まれ育った実家の姿を残したいという依頼を受けた花井さんが、最初は家の外観や部屋だけを撮っていたものの「やはり人がいないと」という気づきがあったとなっていた。しかし、依頼の意図を考えたら、初めから家族を一緒に撮るのが当たり前ではないかと思った。そのことは花井さんも初めからわかっていたが、番組の演出としてあのような言葉を入れ、気づきのシーンに仕立てたのではないかと感じてしまった。ただ、全体としては非常にいい番組だった。

○　タイトルに「ハレの日」とあるが、家族は「ハレ」と「ケ」では「ケ」にあたると思う。結婚式という「ハレ」の日に、家族という「ケ」の部分を写すというのが番組のポイントではないかと感じた。結婚して新しく家族をつくっていく新郎新婦と、これまで家族として一緒に生きてきた両親らの双方の時間を写すというのが、花井さんの目指すところではないかと考えた。花井さんの写真の撮り方自体が、対象の人たちに密着するドキュメンタリーで、さらにその様子をＮＨＫが外側から撮影して番組にするという作りで、ドキュメンタリーが入れ子構造になっていると感じた。写真と比較して、映像はナレーションや音楽が加わり、そのときに誰が何をどう感じたのかといった情報量が多いメディアだと思う。この番組を通じて、花井さんが写真を撮る際の視点の新しさや視点の持ち方に番組スタッフが触れることで、テレビのカメラ側に画角など何らかの変化があったりしたのだろうかと考えた。

（ＮＨＫ側）

制作の過程で映像と写真の違いについて考えることがあった。映像でも一瞬のイメージを残すことはできるが、写真は瞬間を１枚に切り取り、その１枚が形として残ることで、見る人にさまざまなことを想像させる余白がある。その点に写真の可能性を感じた。テレビのカメラ側の画角などがどういうふうに変わったかは、カメラマン本人ではないので想像するしかないが、花井さんの姿に影響を受けた部分はあると思う。制作した番組をより多くの人に知ってもらい見てもらう工夫が必要との視点はとても大事であり、さらに力を入れていくべきだと改めて感じた。家を写す際にはそこで暮らす家族も一緒に写すのが当然ではないかという指摘も、確かにその通りだとは思う。ただ、コロナ禍で結婚式のような家族の喜怒哀楽があらわれるシーンに直接触れる機会が少ない状況のなか、改めて家族とは何か、家とは何かといったものが見えてくる番組になればと思って制作した。

○　「ショートストーリーズ」は短い実話を紡ぎ合わせて作られたよい番組であり、ストーリー立ても相当よく考えられていると思う。ハレの日というのは結婚式だけではなく、入学や成人、高齢者なら還暦、喜寿、金婚式などいろいろあると思うが、家族１人のハレの日が家族全員のハレの日でもあり、特に結婚式ではそこにたまたま立ち会った人も自分自身に置き換えて少しだけその喜びが共感できる、そのことが番組のメッセージとして伝わってきた。番組では写真家の花井さんの思いや活動の原点に触れられており、その作品が普遍的に多くの人が共感できるものであることも伝わって

きた。花井さん自身の個人的なエピソードがあまり紹介されなかったと思うが、むしろ花井さんが活動する姿をしっかりストーリーとして表現することで、彼の思いが間接的に伝わってくるよい番組になっていた。

○　「ショートストーリーズ」は毎年放送しているシリーズだと思うが、よく見つけたなと思わせる主人公やストーリー、丁寧な作風に心温まり毎回感銘を受ける。花井さんが写真家としてのキャリアをスタートさせたころ、結婚式の撮影を依頼してきた新郎にもっとも気に入られたのが、新郎新婦を美しく撮った自信作ではなく、新郎からの手紙を見つめる祖父の横顔の写真だったという経験から、華やかな場面だけでなく家族との絆を映し出すことを意識するようになったという背景を分かりやすく伝えていた。初めて花嫁姿の新婦を見る新郎の表情や両親が子どもの晴れ姿を目にした感無量の表情を捉えた写真も喜びにあふれ、見ていて気持ちがよかったが、やはり仏壇に結婚を報告する２人を手前の部屋からひざまずいて見守る祖母の後ろ姿の写真が秀逸だと感じ、花井さんの写真の魅力がよく分かった。生まれ育った実家で結婚式の前撮りをして欲しいという新郎一家の撮影では、家族の日常をそのまま写しており、新郎の父が得意とするハンバーグを式用の和服姿のまま台所で立って食べる場面は演出ではないかと思うほどだった。ハンバーグのレシピが新婦に渡され、全員で手を振る最後のシーンからは、結婚式はまだでもすでに新しい家族として十分成立していると感じた。

○　よくできたドキュメンタリーで興味深く見た。結婚式といえば普通は新郎新婦の２人が主役であり、写真も多くの場合は２人のものが中心となるが、番組で取り上げた写真は家族や家を加えることで心のふれあいを加えたものとなっていた。花井さんの写真家としての腕というか、そうした新しい視点で切り取っていたのがとてもよかった。ただ、番組では新郎側の家族を主に取り上げ、新婦側の家族が見えてこなかった点が気になった。結婚は家と家との結び付きという側面もあると考えると、もう少し新婦側の視点や家族との接点も盛り込まれるとよかったと思う。

○　心温まるよい番組だった。自分の家族が結婚する際にはこのような写真を撮ってもらえたら本当にうれしいだろうと感情移入しながら見た。コロナ禍により人と人との関わりが希薄になっている中で、人と人との温かいつながりを感じられる番組は大切だと思う。花井さんがなぜ結婚式当日の新郎新婦だけでなくその家族や何気ない日常も含めて撮影するようになったのかも、とても分かりやすくすっきりと伝わってきてよかった。仏壇に手を合わせて結婚を報告する新郎新婦を見守る祖母の写真や、新郎からの手紙を読む祖父の写真からは、しみじみと温かさと愛が伝わってきた。一方、冒頭で番組内容を紹介する２分程度の映像が流れたが、その中に新郎新婦を見守る祖

母の写真や父親が作ってくれたハンバーグを新郎が食べるシーンが含まれていた。新郎の実家で結婚式の前撮りをする際、花井さんが実家の姿を思い出として残すにはどう撮影すればよいか悩む姿を見ても、最初に楽しそうにハンバーグを食べる映像などを見ているので、「結局は建物だけでなく家族も一緒に撮影するのだろう」と思ってしまい、核となる部分を事前にばらされてしまったように感じた。番組の冒頭で見るかどうかを決める視聴者が多い中、そこで心をつかむことは大切だと思うが、結論まで見せてしまうと「そういうことか」と最初から分かってしまう。一人の視聴者としては盛り上がりに欠けてしまったと感じた。

○　落ち着いたトーンがとても心地よい番組だった。生まれ育った実家の姿を残したいと実家での結婚式の前撮りを依頼してきた坂さん一家と出会えたことが、番組にとってかなり大きかったと感じた。もし密着する時期が違っていたり、取材相手が変わっていれば、また違うストーリーになっていただろうと思う。番組の構成上、もっとさまざまな要素を盛り込むことはできたと思うが、半分くらいの時間を坂さん一家の話にあてていた。花井さんの写真のトーンや伝えようとしていることと、坂さんの家族という背景がマッチしており、それらがうまく切り抜かれていたことが、よい番組となった重要な要素だと思う。番組を見終わったあとの印象が「写真家としての花井さんやその作品」ではなく、「家族や結婚とは何だろう」となるよう、直接的ではなくそれとなく匂わせてくれる点に、制作した若いディレクターのセンスと編集の妙を感じた。どれくらいの期間、密着して制作されたのか知りたいと思った。

○　結婚式を中心に撮影してきたカメラマンの花井さんを取り上げることで、間接的にさまざまな家族の形を切り取っており、心温まる番組だった。コロナ禍により３年以上式ができず、ようやくその日を迎えた夫婦、７年前に結婚しその時を振り返る夫婦、新しい生活を前に実家で前撮りをする家族と３つのエピソードがあり、現在、過去、未来の姿が印象的だった。単なる映像の記録ではなく、その時の心情を写し出すことにより、時間がたっても記憶を再生できるのだと感じた。「心を捉えるには心のシャッターで」という花井さんのことばは強く心に残った。一方、「大丈夫」という刺しゅうが入ったお守りがアップで映されるシーンがあったが、そのお守りが花井さんにとってどのような意味を持つものなのかが番組内で紹介されず、やや消化不良だった。また、カメラを構えた人をさらにテレビカメラで捉えるという構造的な難しさもあり、花井さんがファインダーをのぞいている姿が多く、表情が見えず映像的にはやや伝わりにくい印象を受けた。さらに、花井さん自身に焦点を合わせるのか、花井さんの仕事を通じて家族の形に焦点を合わせるのか、やや絞り切れていない印象を受けた。

○　「ハレ」ということばの捉え方にやや違和感があった。冠婚葬祭など「ハレ」の場

では、衣装も言葉遣いも通常では使わない非日常のものに変化する。坂さん一家の前撮りの場面では婚礼衣装は着ていたものの、家族に対する坂さんの愛が素直に満ちあふれており、これは日常の素の姿、つまり「ケ」であるように思えた。「ハレ」ということばをサブタイトルに持ってきた制作者の気概は感じられたが、前撮りは「ハレの日」に含まないほうが正確だったのではないか。番組からは、担当ディレクターがミレニアル世代であることの影響が感じられた。デジタル環境の中で成長し、個人主義だが多様性を尊重できると定義されるミレニアル世代。個人を大切にしようという視点が、花井さんのことばなど随所に表現されていたと思う。自分自身という個を見つめ直すことは共感を生む相互理解や自己受容、他者理解につながる歓迎すべきことだ。その反面、個人だけを大切にしすぎると日本の文化である「ハレ」と「ケ」の存在が薄まっていく。「ハレ」の意味やよさを強め、広く伝える番組の制作もぜひ検討してほしい。また、ミレニアル世代よりもさらに若い世代に目を向けると、今の多くの人に共通する文化や価値観は、もはや多数派ではなく、多様性の一種として残っていくことになるかもしれない。あることばや文化が、現在の社会の共通認識としてどのように受け止められているかを見極めながら、番組が伝える意味や視聴者の認識、受容も徐々に変化していくことを理解しておく必要がある。若い制作者が、世代間ギャップを感じさせる新しい感覚で番組を制作する際には、ＮＨＫを支える高齢者層がこれまで正しいと思ってきた認識にどの程度合わせていくのかを確認する体制が必要だと思う。

（ＮＨＫ側）

取材期間は全体で２か月弱だった。坂さんの家族についても１週間に満たない程度で、その間もずっと密着していたわけではない。番組冒頭の見せ方は永遠のテーマだが、どのように本編に入れば最後まで見てもらえるのか常に追究している。まだうまくいっていない部分もあると思うので、今回の意見を生かしていきたい。焦点を合わせているのが、花井さん自身や写真そのものなのか、花井さんを通じて見る家族なのか絞り切れていないという部分については、写真とそこに写る大切な日を迎えた家族のどちらも重要だと考えながら制作した。「大丈夫」と刺しゅうされたお守りは、花井さんが撮影を前にして不安になる気持ちを勇気づけるためのものだが、番組内では取り上げていなかったため、わかりづらかったかもしれない。

＜放送番組一般について＞

○　６月５日(日)のＮＨＫスペシャル「～新・全国ハザードマップ　水害リスクを総点検～」を見た。ハザードマップの被害想定が「100 年から 200 年に１度」から「1000 年に１度」の雨に置き換わり、避難のトリガーや避難方法を考え直す必要に迫られている。そこで、国や都道府県が策定している新しいハザードマップをＮＨＫが取りまとめ､全国どこでも誰でも見られるようにしたというのが番組の訴求点だったと思う。渋谷のハザードマップが例として紹介されていたが、すり鉢状の地形に街が立体的に形成されているため浸水エリアや深度が大きくなるなど切迫感が分かりやすく伝わり、納得できるものだった。出演者が建物の２階相当の高さに上がりＣＧで水位を重ねることで、３メートルだと２階の床程度、５メートルだと２階の天井近くに達することを分かりやすく見せており、ハザードマップが避難方法を決める判断材料になることがよく分かった。浸水エリアの人口が短期間で増加しており、その発端は宅地開発が抑制されてきた市街化調整区域における規制が緩和されたことだと伝えていた。広い土地を安く買いのんびり暮らすことを望む住民と、人口を少しでも増やしたい行政、事業の拡張を目指す開発事業者それぞれにメリットがあるため一気に開発が進んだということだが、特定の誰かを悪者にせず、偏りなく公平に報じる姿勢がよかった。一方､「1000 年に１度」の意味合いについて「地域ごとに毎年 1000 分の１で発生しうる大雨」という解説があったが、ことばの定義の正確さよりも切迫度合いをうまく伝えるほうが大事ではないかと思った。また、地域の共助という難しいテーマにまで踏み込んだのはＮＨＫの真骨頂だと思ったが、紹介された内容は部分的な個別の取り組みの域を出ておらず、少し残念だった。

○　６月１７日(金)のホクロック！「北陸発！ＲＯＣＫな働き方」(総合 後 7:30～7:56 北陸３県ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。今回は働き方がテーマで、会社員のかたわら副業でイベントクリエーターとして活躍している福井県出身の男性、料理人から俳優へ転身し現在の朝の連続テレビ小説に出演している富山県出身の男性、動画配信による年商が１億円を超える石川県出身の男性が紹介されていた。自分が好きなことを仕事にしたり副業を本業とは異なる自己表現の場にするといった働き方が本当に成立するのかどうか、若者が知りたいと思っているであろう内容が盛り込まれていた。出演している人たちと同年代の若者にも番組を視聴してもらったが、紹介された３人は話題性と親近感があり、年齢が自分たちと近くロールモデルとして身近で、番組の長さや３人それぞれの情報量がちょうどよく最後まで飽きずに視聴できたなど、ポジティブな意見が多かった。しっかりとターゲット層の気持ちをつかんだ番組作りができていたと思う。一方、きれい事を言っているように感じたので多少厳しい現実や本音も紹介してほしかった、就活生が抱える悩みについて出演者とディスカッションする場面がほしかったなど、よりリアリティや等身大の若者の視線を取り入れてほしいといった声があった。また、ＮＨＫだからこそ、若者を励ますだけではなく、働き方や仕事に対する考

え方が変わってきていることを親世代に理解してもらえるような内容にしてほしいという声もあった。若者世代はＮＨＫに対してかなり期待していると感じたので、今回のように若者との対話を繰り返しながら「ホクロック！」をよりよい番組へと成長させていってほしい。

○　６月１７日(金)のホクロック！「北陸発！ＲＯＣＫな働き方」を見た。働き方が本当に多様になってきていると感じる。今回の番組では、収入を補うという意味での副業としての働き方に焦点を当てていたと思うが、若者たちの働き方に対する意識はどのように変わってきているのだろうかと感じた。自分自身を表現するために働くというのと、とにかく収入のために働くというのとでは、全く違うのではないかと思う。働き方の多様化が進む現在の状況を踏まえると、今回の番組は副業としての側面に注目しすぎているようにも感じた。

○　７月９日(土)の釣りびと万歳「春のクロダイはカキで釣れ！～山西惇　三重・的矢湾～」(総合 前9:30～9:59 東海３県ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。ナレーションを担当した生瀬勝久さんと釣り人役の山西さんとの掛け合いが楽しく、的矢湾の風景もすばらしかった。安心感があって心が癒やされる番組で、とてもよいと思った。また、７月１６日(土)のＵｔａ－Ｔｕｂｅ「ＫＥＹＴＡＬＫ＆向井太一＆Ｍｓ．ＯＯＪＡ蔵出しＳＰ」を見た。楽しく気楽に見られる番組だった。ただ、身近な若者からは、出演していた歌手の３組すべてを知らないと聞き、趣味や好みが多様化している若者に向けた番組作りは難しいだろうと改めて感じた。関連する「Ｕｔａ－Ｔｕｂｅラジオ」の紹介もあり、Ｌｉｔｔｌｅ　Ｇｌｅｅ　Ｍｏｎｓｔｅｒの２人に音楽活動をしている学生たちが質問していた。質問に答えてもらった高校生がとても感動していた様子を見て、このような機会を提供しているＮＨＫはすばらしいと思った。

○　７月１５日(金)の東海ドまんなか！「巻き返せ！立浪ドラゴンズ」(総合 後7:30～7:57 東海３県・静岡県域)を見た。中日ドラゴンズが下位に低迷する中でも、名古屋局はローカル中継の内容を中日ドラゴンズを中心としたものにしたり、このような番組を制作したりしている。ＮＨＫが特定のチームに寄せた放送をすることに批判の声もあったと思うが、個人的には地元チームの盛り上げにつながるよい取り組みだと思う。番組では「京田選手の２軍降格」「若手とコミュニケーション」「根尾選手の投手転向」という３つをキーワードに、立浪監督の流儀と哲学を紹介していた。元監督の星野仙一さん譲りの厳しさで、立浪監督が京田選手を２軍に降格させたという話題では､降格を告げられた京田選手のそばにいた岡林選手の｢非常にショックで背筋が凍った」というコメントが使われていたが、ここでは京田選手本人のコメントを取ってほしかった。３つのキーワードとそれにまつわる話題はどれも明るい兆しを感じるもの

で、シーズン序盤は２位につけたこともあったチームが最下位まで転落してしまった理由が番組を見ても分からなかった。また、ゲストの元プロ野球選手の和田一浩さんは、今後の巻き返しのポイントとして投手の大野選手を挙げていたが、データを見ると打力不足が最下位の原因であるように思う。よい番組だったが、なぜこのような状況になっているのかが分析できていないと感じた。打てない理由は打者の技術が足りないのか、心構えの問題なのか、それとも戦略がよくないのか、もっとしっかりと分析して伝えてほしかった。

○　７月１５日(金)に再放送された目撃！にっぽん「妹が生まれなかったかもしれない世界～出生前診断と向き合って～」(総合 前 2:45～3:15)を見た。出生前診断で障害を持つ可能性が分かり確定した人の９割が中絶を選ぶという統計結果を受け、ダウン症の妹を持つディレクターが「もしかしたら自分の妹が存在しなかったかもしれない」と考えて制作した番組で、実体験や実感に基づいている点がよかった。ディレクターの両親の「当時出生前診断が一般的に行われていて、障害を持つ子だと事前に分かっていたら産まなかったかもしれない」という衝撃的な発言から番組が始まり、出産しなかった選択を後悔している人、障害があると知りながらも出産をした人、ダウン症の子どもの生活ぶりを伝える活動をするＮＰＯの担当者などを紹介していた。問題提起となるような番組は、何が正しく何が正しくないと押しつけるようなものであってはならない。ディレクター自身の話がベースになっていることで、何が正しいのかを押しつけることなく、出産を選んだ場合と選ばなかった場合、その選択の先にあるそれぞれの未来を考えさせてくれる番組になっていたと思う。

○　７月１６日(土)に再放送されたドキュメント７２時間「何を打つのか　雑居ビルのボクシングジム」(総合 前 9:02～9:32)を見た。世相を反映し、こんな世界もあるのだと教えてくれるようでいつも楽しく見ている。駅前の雑居ビルにある、アマチュアから世界チャンピオンまでが所属するボクシングジムを取り上げていた。熊本県出身の東大河さんは学校にもほとんど通っていないいわゆる不良だったということだが、父親が亡くなる直前に残した「ボクシングに集中しろ」ということばを受け、プロボクサーを目指してひたすら練習に励む姿に感銘を受けた。元チャンピオンの吉野弘幸さんに憧れて会員になった会社員の男性や日頃のストレス解消のために通う女性医師、自分の殻を破りたいと週に６日も通う大学生の女性、２０年以上アルバイトで生計を立てながら再度チャンピオンを目指す男性など、さまざま人が紹介されていてよかった。2014 年に放送した回のアンコール放送だったが、当時出演した人たちの８年後の姿を取材したパートを追加していたことも評価したい。デビュー戦を控え食事がキャベツの千切りとブロッコリーのみだと紹介されていた長野県出身の荻原惇さんは、プロボクサーを引退したあとは姿の美しさ競うフィジークの競技者となり、フィジカル

トレーナーとしても活躍していた。不良少年だった東さんは沖縄で清掃会社の社長、そして３人の子どもの父親になっていたが、あのジムでトレーナーの小口忠寛さんに出会ったことで今の自分があると語っていて、非常によいストーリーになっていたと思う。

○　７月１９日(火)のキュレーターバトル！！「＃ナゾすぎるアート」(Ｅテレ 後 10:45～11:14)を見た。山田五郎さんと研ナオコさん、美術史家の安村敏信さんが出演していて、とても緩い雰囲気でスタッフも含め楽しんでいる様子が伝わりほほえましく見た。番組の内容だけでなく、ＳＮＳやホームページと番組を連携させた仕掛けがすごくよかった。地域局においても、ＳＮＳを活用して地域とのコミュニケーションをどうつくっていくかを考えるうえで参考になると思った。視聴者との接点を生み出すためには、ＳＮＳやホームページでさまざまな工夫をしていくのが効果的ではないかと可能性を感じた。

○　７月２０日(水)に再放送された、にっぽんトレッキング１００「百花繚乱！夏のフラワートレッキング～白馬岳・秋田駒ケ岳～」(BSP　後 9:50～10:49)を見た。登山の場合は山頂を目指すことが主な目的だと思うが、番組で取り上げられていたトレッキングは途中の行程や高山植物を楽しむという点が大きな違いかもしれないと感じた。さまざまな高山植物が写真集のように紹介されており、アルバムを見るような感覚で視聴した。高山植物は、季節や生えている岩の種類、風向きなどによって異なる姿を見せることを教えてもらった。見ていて楽しい番組だった。

○　「ラジオ体操」と「テレビ体操」について。３年ほど前からラジオ体操を毎日行うようにしたところ､悩まされていた手のしびれがなくなった｡｢カムカムエヴリバディ｣にラジオ体操の風景が何度も登場したことも続けるための原動力になった。効果には個人差があるとは思うが､ＮＨＫはもっとＰＲしてもよいのではないか｡｢テレビ体操｣は、映像で動きを確認することができバリエーション豊かでダンスの要素もあり楽しい番組だ。最近は男性アシスタントが出演するようになり、新鮮に感じている。体格がよい男性が体操することで、より一緒にやっていると感じられる部分があり非常に好感を持って見ている。青年の男女だけでなく、高齢者や子どもなどさらに幅広い年代のアシスタントが出演してもよいと思った。今後も工夫を凝らした番組を続けていってほしい。

○　ＮＨＫの報道について。安倍元首相の銃撃事件をはじめ、コロナの感染拡大やウクライナ侵攻など暗いニュースが多く、そうした報道によって国民のメンタルヘルスに影響が出ているように思う。そういった社会の状況を踏まえ、国民のメンタルヘルス

によい影響を与えるような番組作りも検討していってほしい。

○　６月１７日(金)のホクロック！「北陸発！ＲＯＣＫな働き方」を見た。今回は働き方をテーマにしており、既存の働き方にとらわれない新しい働き方をしている若者たちを取り上げていた。しかし、副業といいながら仲間との飲食代に消えてしまう程度の収入しかないという会社員の例は、本当に副業といえるものなのか疑問に感じた。そのほか、連続テレビ小説「ちむどんどん」に出演している若手俳優などが取り上げられていたが、若者にとってどれだけ共感や示唆に富んだものになっているのかは疑問が残った。若者というテーマにこだわるあまり、内容の幅が狭まってしまっているように感じた。北陸にはさまざまな仕事をしながら多方面で活躍している才能ある人たちがいると思うので、若者に限定するのではなくもっと視野を広げる必要があると思った。北陸の３県からそれぞれ出演者を選ぶという今の形式が続くかぎり、内容が散発的となり、番組として一貫性のある構成にすることは難しいのではないか。改めてテーマと構造を再構築する必要があるように思う。

○　６月２５日(土)のＤｅａｒにっぽん「最期を託し、託されて」を見た。この番組は地方で真摯に生きる人を取り上げるとてもハートフルな内容で大変好感を持っている。しかも、地域局制作の全国放送番組という点がよい。今回は、身寄りのない人たちに「最期」を託されたＮＰＯの話だった。今後、同じような境遇の人が増えていくと思われるなか、自身の将来と重ね合わせながら見ていた人にとっては満足のいくものではなく、消化不良気味で伝えたいメッセージが絞り切れていないと感じた。最も残念だったのは最後の部分だった。８８歳の男性が探していた兄はすでに亡くなっていたが､その娘と連絡が取れ会いに来てくれたところで終わった｡血縁者と出会えて良かったという既存の価値観から抜け出せていないように感じた｡番組の途中で紹介された、ＮＰＯのスタッフが孤独死した男性の葬儀や財産処分を行ったという話や別のスタッフが９０代の女性に似合うピンクの寝巻を選んであげる場面、５０代の引きこもり女性に「いっぱい喜んで楽しんで欲しい」と語りかける場面を最後に持ってきた方がよかったのではないか。家族や身寄りでなくとも最期を看取ってくれる人がいること、その優しさが伝わってくるような最後とすることで、見た人が希望を持てるような構成にした方が番組の趣旨にあっていたのではないか。

○　７月８日(金)のニュース「安倍元首相銃撃事件」について。制服姿の女子高校生にインタビューしていたが、未成年や学生は重大事件を目撃したことによる心身のダメージをケアされなければいけない存在であるのに、なぜ彼女らを選んだのか疑問に思ったし、見ていて大変心配になった。さらにその映像が何度も繰り返し放送されており、配慮が足りないと感じた。また、現場の女性記者から「政治テロ」であるかの

ような発言があったことにも疑問を感じた。多数の人が集まる場で銃撃されたことは事実だが、その時点で政治テロかどうかは定かではなかったはずで、わかっている事実だけを伝えるべきだった。国政選挙期間中の応援演説という多数の人が集まる場が狙われたことは憂慮すべきことであり、全国で同様の事件が発生する可能性があることを踏まえながら、事実をしっかりと生放送で伝えていた点は評価できる。血痕や銃声がそのまま放送されていることに対する批判も目にしたが、血痕は生放送で見るかぎりでは気づかないレベルであり、銃声等も警告の意味が込められているのだと解釈できた。このような突発的な事件はどの放送局の管轄内でも起こる可能性があると思う。今後、同様の事件があった場合にどのように報道すべきか検討していってほしい。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

２０２２年６月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１６日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、ザウルス！今夜も掘らナイト「福井の揚げ物大集合！テンション↑↑ＳＰ」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、７月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	坂田　守史	((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)
副委員長	榊原　陽子	((株)マザーリーフ代表取締役)
委　員	稲垣　貴彦	(若鶴酒造(株)取締役)
	遠藤　英俊	(名城大学特任教授)
	大西かおり	(特定非営利活動法人 大杉谷自然学校　校長)
	岡安　大助	(中日新聞社取締役)
	玉井　博祜	(能楽師・玉井屋本舗社長)
	成島　洋子	((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)
	平本督太郎	(金沢工業大学ＳＤＧｓ推進センター長)
	廣田　憲吾	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	安井　香一	(東邦ガス株式会社相談役)

（主な発言）

＜ザウルス！今夜も掘らナイト「福井の揚げ物大集合！テンション↑↑ＳＰ」
（総合　５月２０日(金)放送）について＞

○　全体的にとてもよい番組で楽しく見た。福井市は多くの揚げ物の購入額が日本一というデータの提示から始まり、それはなぜかという専門家の考察を加え、揚げ物に親しむ人々の様子を織り交ぜながら、ご当地揚げ物を紹介していく構成はスムーズで分かりやすかった。食材をむだなく使う揚げ物や練り物には、日本の“もったいない”精神が表現されている部分もあると感じ、世界に誇れる食べ物だと思った。天ぷら屋台や総菜店の話題にも心が和み、金曜日の夜７時半という時間帯にぴったりな内容だと感じた。ＭＣのパックンことパトリック・ハーランさんと羽生ちひろキャスターの掛け合いもとてもよかった。一方、福井市で揚げ物の購入額が多い理由のひとつとして、古くから精進料理に油揚げが出されていたためとの説明があったが、油揚げの話

題を出しておきながら、揚げ物同様に油揚げも購入額１位であることに一切触れなかったのは不思議だった。今回の番組で取り上げる揚げ物の定義に油揚げは含まれないのか、最後までよく分からず、すっきりしなかった。油揚げ以外の揚げ物に注目すると決めていたのであれば、冒頭で「福井の油揚げは有名だが今回はそれ以外の揚げ物に注目する」と明確に示してほしかった。

○　金曜日の夜７時半という時間帯にふさわしく、家族で見ながら会話が弾むようなとても楽しい番組だった。福井県在住ではない人が見ても、興味深い構成で、楽しみながら見た。昔から人気のある揚げ物と新しく開発された揚げ物、Ｉターンした男性が新規開業した天ぷら屋台や一度は廃業したものの復活した総菜店など「新旧」をバランスよく取り上げており、ＮＨＫならではの切り口が感じられた。ただ、民放でも同様の切り口で番組を作ることはできると思う。金曜日の夜７時半に家族で楽しむ番組として、ＮＨＫでしか扱えないテーマや切り口となっているかどうかも意識するとよいのではないか。番組について調べてみたところ、放送開始から３年目を迎え、これまでに４０回以上も放送されていると知り、好評を得ているのだと思った。また、各放送回のタイトルを見るだけも、地元愛にあふれていることが伝わってきて視聴意欲をそそられた。

○　パックンさんと羽生ちひろキャスターが、だじゃれも交えながら掛け合う様子はおもしろく、肩の力を抜いて見られる番組だった。福井市で揚げ物の購入額が多い理由を３つ挙げていたが、いずれも納得できるものだった。揚げ物が世代を超えて愛されている理由も複数紹介されており、とても分かりやすかった。ただ、理由のひとつであるソースカツがなぜ福井で愛されてきたのか、ソースがかけられた状態で売られている理由についてはあまりよく分からなかった。健康面から揚げ物を控えようという人が増えたり、揚げ物に使われる食用油の値段が高騰したりしているが、そういった逆風にさらされているからこそ、おいしいものを楽しく食べようという制作者の思いが伝わってきた。番組のコンセプトを調べてみたところ「福井の眠れる宝を掘り起こし、福井ライフを応援します」とあった。その掘り起こす手法が、歴史や文化的な由来、調査データ、関係者へのインタビューなど、はっきりと分かりやすく、年代を問わず受け入れられる番組だと感じた。おなじみのＭＣとキャスターが掛け合いながら進行する演出は、オーソドックスながらも情報過多にならず順を追って理解できるもので、番組が長く支持されている要素のひとつなのではないかと感じた。

○　以前、この番組の坂井市三国を訪ねた回を見たが、ドローンで撮影した東尋坊の景色や地域のお祭りを紹介しており、実際に訪れてみたいと思う内容だった。今回は、最初から最後まで揚げ物愛と笑顔にあふれ、実際に食べてみたいと思う内容だった。

福井市は多くの揚げ物の購入額が日本一とのことだが、食材に恵まれた土地であることも理由のひとつではないかと思った。スーパーで揚げ物を購入していた客には女性だけでなく男性も多く、家族みんなで楽しく食卓を囲んでいる様子が想像できた。福井で揚げ物が愛される理由を３つ挙げていたが、すべてが納得いくものだった。敦賀市のご当地揚げ物「フジバーグ」を紹介していたが、人の体温が素材に伝わらないよう、揚げるまでの下処理が１５秒という早さで行われていることや、１日に1,200個も手作りされていることには驚いた。どのご当地揚げ物もほかでは食べられない味だと思うので、ぜひ訪れて食べてみたいと感じた。福井では一般的とされる、揚げ物にソースがかけられた状態で売られているのを目にしたことはないが、パックンさんと羽生ちひろキャスターも当たり前と明言していたので、県全体に浸透した文化なのだと感じた。

○　見ていてとても楽しく、好感の持てる番組だった。パックンさんと羽生ちひろキャスターの掛け合いはとてもよかった。パックンさんが揚げ物に関するだじゃれを言おうとしたところ、羽生キャスターに先に言われてしまい悔しがるやりとりもおもしろかった。なぜ福井で揚げ物は人気があるのか、３つの理由と専門家の見解を挙げていたが、とても分かりやすく納得できた。カツにあらかじめソースをかけて提供する食文化については特に紹介していなかったが、福井県のみでの放送であり、当たり前と捉えている人が多いと理解した。ただ、これだけ揚げ物をたくさん食べていて健康面は大丈夫なのか気になった。福井県の健康寿命などのデータを使って、健康面への影響も紹介してもよかったのではないか。

（ＮＨＫ側）

福井市は油揚げの購入額も日本一ということは認識していたが、番組で取り上げるかどうか、揚げ物と区別するかどうかを意識的に検討したわけではない。油揚げも含め、揚げ物すべてにおいてナンバーワンだと取り上げることで、より充実した内容になったかもしれない。

○　まとまりやメリハリがいまひとつで物足りなさを感じた。「ニュース７」の直後かつ金曜の夜とはいえコロナ禍で在宅率が高いと思われる時間帯なので、訴求したいことや共有・共感したいことを多くの人に届けるよい機会だと思うが、特定の地域内での内輪受けの話にとどまってしまっていたように感じた。北陸の食と聞くと、まず新鮮な海産物が思い浮かぶので、揚げ物という切り口には意外性があった。福井県で揚げ物が好まれる３つの理由には、なるほどと思った一方で、もっと歴史的・地理的な掘り下げができたのではないかとも感じた。福井市、小浜市、鯖江市、敦賀市と県内

各地を順番に取り上げていたが、横並びを意識しすぎたためか内容が散漫に感じられた。敦賀市のご当地揚げ物「フジバーグ」の製造工程が、実は手作業だという紹介も定番のパターンだと感じた。揚げ物を試食したパックンさんのコメントには、ソース味への思い入れや食感の表現に工夫が見られた。番組のメッセージは地域の活性化なのだと思うが、そのためにはみんなが地域への思いや地産地消の意識を持たないといけないのか、それともそれだけでは足りないということなのか、結局はよく分からなかった。

○　福井市は揚げ物の購入額が日本一ということだが、住民のコレステロールや中性脂肪の数値が気になった。揚げ物人気の要因として専門家が「油揚げ」「ソースカツ文化」「共働き・三世代同居が多い」の３つを挙げていたが、単純に集約するのではなく、歴史的背景やデータに基づいた独自の分析を加えてもよかったのではないか。全体としてはよい番組だったが、ご当地揚げ物のカタログのような印象で、インパクトに欠けもの足りなさを感じた。最後のまとめの部分に歴史や文化といった視点や、研究者のコメントなどを加えると、もう少し厚みが出たのではないか。

○　肩の力を抜いて見ることができ、とてもよい番組だった。福井の揚げ物といえば、ソースカツ丼や厚揚げといったメジャーどころが出てくるかと思ったが、「タイカツ」や「サバエドッグ」など、北陸に住んでいても聞いたことがないものを取り上げていて新鮮だった。食事時である夜の７時半という時間帯もあり、お腹が空いてくると同時にご当地の揚げ物を通じて地域の魅力が伝わってくる番組だった。ご当地揚げ物の値段が気になり調べたところ、揚げ物としては高価だった。値段も含めて紹介されると、比較的高価であっても地域に愛されているということがより伝わったと思う。福井で揚げ物が好まれる３つの理由はよく分かったが、それぞれの具体的な数値が気になった。例えば、浄土真宗の報恩講で出された料理のうち、当時は高価だった油揚げを家族に分けるために持ち帰ったことが揚げ物好きが増えた原因の１つだと紹介していたが、福井で浄土真宗を信仰している人の割合を数値で示せばより伝わったと思う。共働き世帯が多いという理由も、数値で示せば納得感が高まるのではないか。また、福井には 100 年ほど前からソースカツ文化があると説明していたが、なぜ 100 年ほど前に福井で広まったかについてももっと踏み込んでほしかった。天ぷらの屋台で地域を盛り上げようという男性や一度は廃業した惣菜店のハムエッグを復活させた親子の話題は、ＮＨＫらしい心温まるものだった。地域に根づき愛される揚げ物店はどの町にもあり、それがちょっとした豊かさや地元への愛着につながっていると感じた。一方、天ぷらの屋台を出店していた「博物館通り」について、どういった博物館があってなぜ衰退してしまったのかといった背景の説明が少なかった。そういった説明があれば、店主の男性がどうして盛り上げたいと思うのかがより伝わったのではないか。

○　和気あいあいとした楽しい番組だった。スタジオのインテリアも楽しい雰囲気であか抜けていて、出演者２人の明るい人柄もよく伝わってきた。福井の人々の揚げ物への愛の深さがよく分かった。福井のソースカツはＢ級グルメとして無理やり作ったものだと思っていたが、こんなにも地域に密着し親しまれていることには驚いた。スーパーや総菜屋でインタビューを受けていた買い物客には中高年の男性が多かった。男性が揚げ物を購入し、それをどうやって食べるのかといった計画を立てるのは、中高年世代では特に珍しいように思うが、ジェンダー平等に配慮した結果なのか、それとも福井は共働き世帯が多いので当たり前のことなのか気になった。番組後半で取り上げていたご当地揚げ物はどれもおいしそうで、それぞれのエピソードも心温まるものだった。地域密着で小さな話題をうまく探してくるところにＮＨＫの情報収集力の高さを感じた。揚げ物を食べた小学生の感想や町の人のインタビューから、揚げ物が地元の人に本当に愛されていてなじみ深いものだとよく伝わってきた。総菜屋を営む親子が幼いお客さんから手紙をもらった時の笑顔、おいしくなるように願いながら揚げ物を作る女性の笑顔などがとても印象的で､揚げ物にまつわる人々の愛が感じられた。最後にスタジオで試食していたが、時間の関係で３つの揚げ物のうち１つの感想しか聞けなかったのは残念だった。

○　スーパーの揚げ物売り場から県内各地のご当地揚げ物を紹介しつつ、屋台や街の総菜屋など規模・業態の異なるさまざまな店を取り上げていた。多様な世代の人が登場し、世代間の心温まるエピソードもあってよかったと思う。ＢＧＭも庶民的で揚げ物というテーマに合っていた。単に食品を取り上げるだけでなく、それを作り売る人の思いを伝え、食卓を通じてその思いが福井の人にしっかりと伝わっていることが分かる構成だった。一方、揚げ物という１つのテーマで３０分近い番組だったため、少し長く思え飽きを感じる場面もあった。また、揚げ物をたくさん食べることで健康に悪影響が無いのか気になった。

○　福井県では、ソースカツ丼と厚揚げは頻繁にメディアで取り上げられている印象があるので、それ以外の揚げ物を中心に据えたことはよかった。取り上げる地域も県内各地からバランスよく選んでいたと思う｡福井県は共働き率が高いため､総菜屋やスーパーの総菜コーナーの需要も増える。総菜には腐りにくい揚げ物が多いため、総菜を購入する人は揚げ物を購入する割合も高くなり、揚げ物の購入額が増えるというつながりがあるのではないか。こうした社会的背景も含めた情報の整理や伝え方には、もう少し工夫があってもよかったと思う。また､敦賀市の「博物館通り」は福井県に住んでいても知らない人が多いと思う。「博物館通り」は、景観の整備が進められ、にぎわいを生み出していこうとしているエリアなので、そういった情報も加えながら、一般のスーパーや総菜屋の紹介とは違う切り口で丁寧に伝えてもよかったのではないか。

（ＮＨＫ側）

スタジオ部分の構成を検討していく中で、時間的な制約もありやむなく落とした部分があり、揚げ物が愛される複数の理由のうち十分に伝わりきらなかったものもあったかもしれない。視聴者に疑問を感じさせずスムーズに見てもらい、納得感を持ってもらうため、どのような構成がふさわしいのか工夫を続けていきたい。

○　スーパーのインタビューで中高年の男性が多かったのは、ジェンダー平等を意識した結果なのか。

（ＮＨＫ側）

特に意識して選んだり配慮したわけではない。実際に取材をしてみると思ったより男性が多かったということだ。

＜放送番組一般について＞

○　５月２０日(金)の東海　ドまんなか！「拡大スペシャル▽ウクライナ避難民▽起死回生狙う地方百貨店」(総合 後7:30～8:42東海３県ブロック・静岡県域)を見た。示唆に富んだよい番組だったが、金曜の夜７時半という放送時間を考えるとウクライナ避難民は重いテーマで、見ようと思うには何らかのきっかけが必要だと思った。家族で楽しむ番組としては、後半の百貨店の話題の方が広く受け入れられるのではないかと感じた。コメンテーターとしてタレントのサヘル・ローズさんを起用したのはとてもよかった。コメンテーターは、視聴者の代弁者かテーマについての専門家が多いと思う。サヘルさんは自身が避難民だったという弱者の立場からコメントをしており、映像では伝わりにくい部分を伝えていて共感できた。弱者の視点でコメントをできる人は少ないと思うので、唯一無二の人選だったと思う。東海地方が持つ外国人労働者受け入れのノウハウが､避難民への仕事の提供につながっていることは勉強になった。仕事を求める避難民と労働者不足の企業のどちらにとってもよいことだと思う。これは人口減少が続く日本の未来にもつながっている話だと感じた。今のところ、日本では避難民や永続的な外国人労働者を受け入れる積極性はあまりないが今後はどうなるか分からない｡そのヒントが東海地方にあるように思えた｡従来の支援は仕事や学校、衣食住など環境を整備することが中心だったと思うが、ウクライナで日本語教師をしていた葛西孝久さんやサヘルさんは、心のつながりがとても大事だと話していた。多

様性のある社会を目指すという視点から、心のつながりや共感という切り口が大事なのだとよく分かった。後半の百貨店の話題では東海地方の百貨店がまだまだ元気だと分かりうれしくなった。ただ、三重県の百貨店の取り組みを紹介する際に使われていたアニメは不要だと思った。伝わりやすくしようとアニメを使ったのかもしれないが、分かりやすさを優先して映像に頼った表現を多用しすぎると、ことばだけでは何が起きたのかを理解できない視聴者が増えてしまうのではないかと危惧している。

○　５月２０日(金)の東海　ドまんなか！「拡大スペシャル▽ウクライナ避難民▽起死回生狙う地方百貨店」を見た。見応えのある非常によい番組だったが、７２分は長く疲れを感じた。サヘル・ローズさんがコメンテーターとして出演していたのが本当によかった。自身も避難民として過ごした経験があり、発言にとても重みがあった。サヘルさんの話から難民の支援では、ことばが通じないと疎外感を感じてしまうためことばが大事であることや、居場所を作ること、自分たちを思いやってくれる人の存在の大切さ、働くことは自分が必要とされていると感じ自尊心を守るうえでも欠かせないことなど、物資だけではない心のつながりが重要だとよく分かった。ウクライナ避難民の支援だけでなく、いじめやヤングケアラーで孤立している若者、１人で働きながら子育てをしている母親、孤独死の不安を抱える高齢者など、日本のさまざまな人にも当てはまる話だと強く感じた。長久手市に避難している人やウクライナで日本語を教えていた葛西さんの取り組みなども、非常に丁寧に取材されていた。百貨店の話題も楽しく見ることができた。百貨店の落ち込みは新聞など比較的歴史のある業界にも通じるように思えた。

○　５月２０日(金)の東海　ドまんなか！「拡大スペシャル▽ウクライナ避難民▽起死回生狙う地方百貨店」を見た。ウクライナからの避難民の生活と彼らに対する支援のありようを伝えており、興味深く見た。ゲストのサヘル・ローズさんは、幼い頃に戦争で肉親を亡くした経験をもとにコメントしており、的確な人選だと思った。ことばのハードルや住居､仕事､教育など避難してきた人たちにとって何が必要なのかがテーマだったが、ドラマチックに見せたいという思いからか、日本での暮らしぶりをやや叙情的に描いているように感じた。また、個人のボランティアによる献身的な支援自体はよいと思うが、あくまで稀なケースであり、広く行き渡る自治体による支援があまり紹介されていなかったのは残念だった。自治体からの支援額の少なさを知り、行政による支援の難しさを感じていたので、避難民が困らない程度の十分な支援を行っている自治体を探し出して取材してほしかった。ウクライナの人たちへの支援につなげる狙いがあったのかもしれないが、見ている人が今後どのような支援ができるのか具体的な提示がなく、単なるドキュメンタリーで終わってしまった印象だった。番組後半の、百貨店の１フロアに水族館を作ったという話題では、入館料が必要と知り、

宣伝になってしまうのではないかと思った。百貨店に水族館を作る大変さに注目するのではなく、そもそも百貨店の売り上げがなぜ落ち込んでいるのかという本質的な問題を、ＮＨＫの取材力を生かして伝えてほしかった。

○　５月２７日(金)のＵＰっぷ富山　きとラボ「藤子不二雄　Ａ　富山の“まんが道”をたどって」(総合 後7:30～7:57 富山県域)を見た。藤子不二雄Ａさんをしのぶ内容で、特別にスタジオを設け、生前に親交のあったタレントの中川翔子さんをゲストに迎えるなど、力の入った番組だった。藤子不二雄Ａさんの生まれ故郷である氷見市での取材では、同級生にインタビューし、意外な一面を聞き出すなど多方面から人物像に迫っておりおもしろかった。また、生前のインタビューや富山新聞で働いていた際に書いた記事など、藤子不二雄Ａさんがどう成長して漫画家になったのかを時系列順にスムーズに追うことができた。一方で、舞台が富山から離れ上京した後の「藤子不二雄」としての活躍については内容が薄く、一番活躍していた時代のはずなのにほとんど取り上げないのは、彼の人生の中核部分が抜けているような印象を受けた。晩年に氷見市の地域おこしに協力したエピソードもあり、藤子不二雄Ａさんの人生をたどる番組としてはまとまっていたが、一番活躍していた上京後の時代の内容がかなり薄くなっていたのはやはり残念だった。

○　５月２８日(土)、６月４日(土)の「Ｕｔａ―Ｔｕｂｅ」を見た。土曜日の午前１１時台に放送されていて、音楽番組としては珍しい曜日と時間帯だと感じたが、非常によい番組だった。１組のアーティストをゲストに迎え、１回あたり２０分、２週連続放送という形式は間延びせずシンプルで、今の若い世代にも受け入れられやすいと思う。ゲストのＳＡＲＤ　ＵＮＤＥＲＧＲＯＵＮＤはＺＡＲＤのトリビュートバンドということだが、ＺＡＲＤに敬意を払いながら活動していることがよく分かり、番組の構成としてもその敬意が伝わってくるものとなっていた。ＺＡＲＤへの敬意があるのがこのバンドの魅力なのだというファンからのメッセージから始まり、彼女らの思いを伝え、バンド結成のきっかけがＺＡＲＤのプロデューサーからの提案だったと紹介していく流れは、ＺＡＲＤのファンも気持ちよく視聴できるものだったと思う。５月２８日はＺＡＲＤのカバー曲のみを放送し、６月４日はオリジナル曲を放送するという２部構成もよかったが、そのことを番組の最初で明示してほしかった。６月４日もカバー曲が聞けると思っていたので、少し期待を裏切られたような気持ちになった。

○　５月２８日(土)の「コウケンテツの日本１００年ゴハン紀行ミニ」(総合 前11:42～11:52)を見た。料理研究家のコウケンテツさんが100年先まで残したい日本の食を探すという番組で、今回は東京で作られるワインとチーズがテーマだった。都内に６８件の牧場があるという話から始まり、２３区の農地の４割程度が練馬区にあるとい

う情報、栽培されているブドウの品種名が掲げられた看板の映像という冒頭の流れで一気に引き込まれた。ワインの話題では、都内では不可能とされたワイナリーを立ち上げた女性を取り上げていた。収穫したブドウを人力の大きな機械で搾る映像が出てきたが、大変な力仕事なのに作業している人がみな楽しそうにやっていることが印象的だった。それもそのはずで、ネットでの呼びかけで手伝いに集まった人たちということだった。東京だからこそ、こういった人を集めやすく、短い期間に集中的に人手が必要となるワイン作りにメリットがあるのだと納得した。チーズの話題では、青梅市のチーズ職人の女性を取り上げていた。ウォッシュチーズに焦点を当て、日本酒を混ぜた塩水で表面を洗い熟成させていく行程や、地元産の食材にこだわっていることなどを紹介していた。チーズを食べたコウさんのコメントは、料理研究家だけあって、感覚的な面でも味の根拠となる材料や成分に関しても説得力があり、「濃厚」や「クリーミー」といったありふれた表現でも納得感があった。１０分という限られた時間だからこそエッセンスがむだなく詰め込まれていて安心感があり、１つ１つのシーンが短すぎることもなくよくまとまっていた。地域の食材を取り上げ、地産地消の取り組みや地域のつながり、手作業による熟練の技などを１０分でまとめたこの番組は、地域局が同様のテーマを扱う際に参考になると感じた。

○　６月３日(金)のたっぷり静岡＋「静岡×鹿児島　お茶のミライ」を見た。ともに有数の産地である静岡県と鹿児島県で行われている、お茶の消費量が少ない若い世代に向けた取り組みを紹介していた。静岡大学の学生たちの取り組みは商品化前の実験的な段階であったのに対し、鹿児島の日本茶店の取り組みは自社商品を若い世代向けにアレンジして販売するところまで進んでおり、商売として軌道にのる前と後、それぞれの違いとよさが表れていた。茶葉の生産量日本一を競う静岡県と鹿児島県をむやみに敵対させるのではなく、若い世代にどうすればお茶を消費してもらえるかという共通の悩みに着目し、問題解決の糸口を紹介する構成には好感が持てた。生放送で鹿児島局のスタジオとつなぎ、両局が取材した内容を紹介するなど、全国に放送局を持つＮＨＫの強みを生かした番組だと感じた。

○　６月３日(金)のＵＰっぷ富山　きとラボ「高校生が映画をつくっちゃったスペシャル」(総合 後 7:30～8:20 富山県域)を見た。南砺市の高校生が制作した４０分ほどの映画をノーカットで放送しており、ＮＨＫが制作した部分はわずか１０分ほどだった。映画のメイキング番組という位置づけだとすれば、制作時の苦労や工夫、作品への思いに焦点を当てるべきであり、完全に主客が逆転していた。どういった意図で制作されたのか、疑問に感じた。

○　６月１１日(土)のゆる山へＧＯ！スペシャル「２０２２　春」(総合 前 9:30～9:55

東海３県ブロック・静岡県域)を見た。絶滅危惧種のアオベンケイソウを発見したと盛り上がっていた場面で、ＮＨＫプラスでの配信では実際には別の種類だったとのテロップが出ていた。内容の修正として適切な対応だったのか、疑問に思った。別の種類であったのならば、該当するシーンを配信しないという判断をすべきだったのではないか。ただ、全体としては、ゆったりと楽しめる番組だった。

○　６月１１日(土)のゆる山へＧＯ！スペシャル「２０２２　春」を見た。絶滅危惧種のアオベンケイソウとは異なる種類の植物を紹介したことについて、ＮＨＫプラスでは訂正のテロップが入っていた。ただ、何がどう違っていたのかが説明されておらず雑な印象を受けた。「ウイークエンド中部」のコーナーとして時折見ているが、中部地方のさまざまな山の情報を知ることができるだけでなく、一般に情報が少ない傾向にある低山に関する情報も伝えてくれ、とてもありがたいと思っている。短い放送時間でいくつかの山を紹介していたが、とてもよくできていた。登山を楽しむ人にとって必要だと思う情報は、その人の山の楽しみ方によって異なるが、番組ではさまざまな情報を網羅して伝えており、多くの愛好家にとって役立つ内容だと感じた。登山の所用時間や問い合わせ先など多くの情報を紹介していたが、欲を言えば駐車場の情報も紹介してほしかった。また、登山しながらの撮影は大変だとは思うが、手ぶれが気になる場面がいくつかあった。加えて、登山ルートの状況を伝える広角カメラで撮影されたふかん映像から、通常のカメラの映像に切り替わる際に画面酔いをした。ふかん映像は切り替わるタイミングが早いと思うことが多く、配慮してもらえるとよりよい番組になると思った。

○　６月１２日(日)に再放送された目撃！にっぽん「妹が生まれなかったかもしれない世界～出生前診断と向き合って～」(総合 後 1:05～1:35 東海３県ブロック)を見た。とても考えさせられるよい番組だった。ダウン症の妹がいるディレクターが、自身の両親や実際に出生前診断を受けた人たちにインタビューしており、命をめぐる決断をした人たちの生々しい声から本当に重要な問題であることがよく分かった。出生前診断の結果が出てからわずかな期間で出産するかどうかの決断を迫られるため、社会がどうフォローしていくかが大切だと思った。出生前診断が認められることは多様性の受け入れという観点からは必要だと思うが、ダウン症の人たちに対する偏見につながってしまうとすれば恐ろしいことだと思った。

○　６月１５日(水)のヒューマニエンスＱ(クエスト)「“イヌ”ヒトの心を照らす存在」を見た。ほかの動物がほとんど家畜化されていない 12,000 年前の遺跡から人間と共に埋葬されたイヌの骨が出てきたことや、イヌと人間が見つめ合うと異なる種であるにもかかわらず親子の絆を深めるオキシトシンというホルモンが分泌されることなど、

新しい知識を得ることができた。イヌが人間のことばの意味と込められた感情のどちらも理解していることには驚かされた。ただ、それを確かめる実験で人間でも苦痛なＭＲＩにイヌを入れていて、いくら訓練されているとはいえ大丈夫なのかと気になった。おもしろい内容だったが、ほかの回に比べるとテーマの持つ歴史や心情的な部分があまりうまく表現されていないように思えた。

○　明治用水の大規模な漏水をめぐる報道について。行政のホームページに掲載されるメッセージやライブカメラの映像は見られるものの、より具体的な情報は報道からしか伝わってこない。日々変化する状況や事故の原因、今後の見通しなどは解説がなければ分からない。発生初期の段階では、状況が分からず現地に向かった人もかなりいたと思うし、なぜ農業より工業用水が優先なんだという声や石を投げ込めば解決するのではといったさまざまな意見が飛び交っていた。本当に焦っている人から出てくる意見を抑えることは難しく、やはり誰かが受け止めて誰かが説明をする必要があると思った。「まるっと！」では映像や図を使って深掘りをしていたが、パイピング現象と推定される事故の解説は非常に分かりやすく、対策が難しいことや復旧に時間を要することが理解できた。事故から１か月が経過してようやく応急工事のめどが立ってきたが、復旧や補償問題などの対策は長期化する様相だ。梅雨に入ると洪水被害の準備も必要となってくる。今回の事故は老朽化した社会インフラのリスク対策とも共通する部分があると思う。報道機関は事故の原因だけでなく対策も含めて理解しやすく伝えることが大切だと思うので、今後もＮＨＫには機を捉えた報道を期待している。

○　テレビ欄を見ると、多くの番組が「ＳＰ」や「スペシャル」といったことばを使用している。今回の視聴番組だった福井局制作の番組にも使われている。放送時間が拡大している場合などは確かにスペシャルなのだと思うが、そうでない場合も多く、少しも特殊とはいえないのではないか。ＮＨＫには「スペシャル」ということばの使い方をぜひ研究していってほしい。

○　タイトルに「スペシャル」や「ＳＰ」を使用する番組が多いと感じている。「スペシャル」とうたっているが、実際にはスペシャル感のない番組もあり疑問に思う。

（ＮＨＫ側）

全国向けの番組については、「ＮＨＫスペシャル」があるため抑制的に使用している。毎週決まった時間に放送している定時番組では、あるテーマを大きく取り上げる際には使用することがある。また、不定期で放送する番組では、番組名自体が認知

されていないこともあり、取り上げるテーマや内容に特別感がある場合には使用することがある。ただ、実態をともなわない番組に安易に使用するべきではないと思うので、今後考慮していきたい。

夜７時半にどのような番組を放送するべきかは、制作担当者や編成担当者にとって重要な課題だ。家族で見ている人が多い時間帯であるのは事実だが、明るく楽しいものばかりが見られているわけではない。重いテーマであっても自分に関わりがあると思ってもらえるものであれば、見てもらえると考えている。

○　夜７時５７分など正時の少し前から始まる番組は、民放の番組との切れ目を意識しているように感じる。録画機器によっては、民放の番組と予約時間が重複して録画できないという声も耳にする。受信料で運営されているＮＨＫといえども、視聴率を意識した編成をしているのではないかと感じてしまう。

（ＮＨＫ側）

視聴率を意識しているというよりは、皆様から頂いた受信料で、時間と労力をかけて丁寧に制作した番組を、ひとりでも多くの人に見てもらいたいという考え方に立って編成している。ご理解いただきたい。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

２０２２年５月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１９日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、たっぷり静岡＋「異変！？初潜入！“うなぎパイ”の舞台裏」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、ならびに「２０２１年度中部地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」についての報告と６月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	坂田　守史	((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)
副委員長	榊原　陽子	((株)マザーリーフ代表取締役)
委　員	稲垣　貴彦	(若鶴酒造(株)取締役)
	遠藤　英俊	(名城大学特任教授)
	大西かおり	(特定非営利活動法人 大杉谷自然学校　校長)
	岡安　大助	(中日新聞社取締役)
	玉井　博祜	(能楽師・玉井屋本舗社長)
	成島　洋子	((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)
	平本督太郎	(金沢工業大学ＳＤＧｓ推進センター長)
	廣田　憲吾	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	安井　香一	(東邦ガス株式会社相談役)

（主な発言）

＜たっぷり静岡＋「異変！？初潜入！“うなぎパイ”の舞台裏」
（総合　４月２２日(金)放送）について＞

○　毎日生放送しているから、これほど内容が薄くなったのだろうと思っていたが、毎日の放送ではないと聞きとても残念に思った。タイトルに「初潜入」とあったが、企業の広報担当者に案内されて工場内へ入っているはずで、ふさわしくない表現だと思った。パイ生地が手作りされているとは知らなかったが、ほかには驚きをともなうような新しい情報は無かった。企業を取り上げる際には、企業の広報活動と報道との間で、どう一線を画すのかがとても重要だと思うが、企業の広報だと受け取られかねないような内容だと感じた。うなぎパイの抱える課題をいくつか挙げていたが、コロナ禍による売上の減少と小麦の値上げの影響は、企業による値上げを正当化している

ようにも受け取れた。また、後継者育成を課題として挙げておきながら、どう技術を引き継いでいくのかの説明はなく、後継者候補による新商品開発への期待という内容にいつの間にか変わっており、ＮＨＫ内で複数の目でチェックしたのか疑問に思った。花粉症の話題では、静岡県は花粉の飛散量が全国２位というデータを紹介していたのはよかった。一方、解決策として花粉が全く出ない無花粉スギの研究を紹介していたが、単に今後広まっていくのを期待するというコメントだけで終わったのは残念だった。広めていくには、どういった課題があるのかや、今後どのような研究を行うのか、いつになると広がっていくのかという肝心な部分の説明が無く、とても残念だった。

○　２５分の放送の中で相互に関連のない２つのテーマが詰め込まれており、「ニュース７」の後に放送する番組としてはやや軽い内容だと思った。１つ目のテーマでうなぎパイを紹介していたことも原因のひとつだと思う。うなぎパイの売上高や全国の土産ランキングでの順位などを紹介するだけでも、内容の重みは増したのではないか。番組ではうなぎパイの抱える３つの課題を提示していたが、後継者育成に向けた独自の師範制度の紹介が多くを占めていた。パイ生地の作り込みを機械ではなく手作業で行っていたが、最終的に触感がポイントになるとはいえかなりの重労働であり、独自の師範制度が解決策という結論には疑問を感じ、もう少しほかの手だてがないのかと思った。自分なりに調べてみると、何かと話題性のある商品であり、うなぎパイだけで２５分の番組が出来たのではないかと感じた。花粉症の話題では、静岡県で花粉の飛散が多い理由を、スギの数の多さや強いからっ風、乾燥しているので飛びやすい、スギ林に囲まれていてどの風向きからも飛んでくると細かく分析しており、納得感があった。一方で、数字やデータの扱い方には疑問を感じた。数字で物事を判断する上では、全体の数字の分布や平均値、年ごとのバラツキ、変動幅などが重要であり、有効なサンプル数が３桁台の調査結果のみで判断すべきではないと思った。花粉の飛散量が全国２位ということに力点を置いていたわけではなく、静岡は花粉症に悩む人が多いと伝えたい気持ちは分かるが、統計の数字の一部を切り取ることはあまり好ましくないと感じた。また、無花粉スギの話題では、山林をスギ林のような人工林に戻すこと自体の是非について賛否があることも紹介してほしかった。

○　見ていて楽しい気持ちになれた。うなぎパイが、あんなに多くの職人たちの手ごねによって作られているとは知らなかったので、すごいと思った。職人トップの後継者候補である社員が、同じくパイ職人だった父親との思い出を語る中で、「バターの香りは父親の香り」と語っていたのはすてきだった。一方で、企業の宣伝のような印象も受けた。花粉症の話題では、静岡県は花粉の飛散量が多いと経験的に感じていたことが、データなどを使って明確に示されており、ある種の感動を持って見た。紹介されていた無花粉スギは、花粉症対策としては楽しみな一方、生命をつないでいくうえで

大事な部分のないスギが、これから植えられていくこと、人間が利用するためにスギを植えて、花粉症に悩んだからといって、今度は花粉の出ないスギを植えるという行為は、地球や環境にとって、どういった意味を持つのだろうと、恐ろしいような気もした。番組では、この点には特に触れていなかったので気になった。スタジオのセットは、やや洗練されていない印象を受けた。取材を担当した記者の椅子がとても高い一方、ゲストで俳優の水谷果穂さんはとても低いソファに座っており、お互いの距離が近いにもかかわらず目線に高低差があったことは気になった。全体としてはとてもおもしろい番組だった。

○　ふだん自分の地域では見られない静岡県の話題をじっくりと見られてよかった。製菓業界では、ある程度大きな規模の会社でも、１人の職人が一から仕上げまでを担う会社があるなど、人の手による作業を大切にしているところが多いが、うなぎパイもその１つとは知らなかった。職人の育成に向けた独自の師範制度があり、生地を練られるようになるまで最低でも１０年かかるとのことで、侮れない技だと思った。定年を迎えた師範が、次の師範候補である師範代を指導していた。長く製造現場を離れていた師範代は、かつて身につけた技を取り戻すのに苦労していたが、今後、ほかの人たちの見本となり指導していくことは厳しくもあり、やりがいもあるだろうと思った。彼は、新商品の構想も練っているとのことで、楽しみにしている。花粉症の話題で紹介されていた無花粉スギは、スギという種をつないでいくという観点ではどうなのかと思った。

○　うなぎパイに対する静岡県民の思いが、企業の宣伝にならない程度に、もっと伝わってくるとよいのではと思った。販売開始から６０年もの歴史があるということは初めて知った。うなぎパイが抱える３つの課題に焦点を当てていたが、実際には後継者問題に絞って伝えていたと思う。テーマを絞って掘り下げるのであれば、なぜ生地作りを手作業でやらなければいけないのかも伝えてほしかった。紹介されていた工場を見学したことがあるが、バターの量の多さや職人の思い、挑戦を続けていく企業努力といったものは見学では分からない部分であり、一度訪れたことがあるだけに新たな感動も得た。花粉症の話題では、試験林での無花粉スギの実用化に向けた挑戦を紹介しており、ほかに根本的な解決策はないとも思えた。ただ、このテーマについても、もう少し掘り下げて伝えてほしかった。スギやヒノキの国産材の利用拡大は、品質や価格面、あるいは製材業や建築業などの構造的な問題もあって複雑な問題だと思うが、花粉症という問題から森林資源に目を向けたことはよかったので、今後さらに掘り下げた番組を期待したい。

（ＮＨＫ側）

タイトルの「潜入」ということばは、静岡県の皆さんにとってなじみのある題材でも、興味を持って見てもらえるのではないかと考えて加えた。うなぎパイの宣伝になるような部分をなるべく除きながら、静岡県の皆さんでも知らない部分を深掘りしたいと思って制作した。うなぎパイが抱える課題を３つ取り上げたが、もう少しテーマを絞り、掘り下げて伝えられるとよかったかもしれない。例えば、単に職人の後継者の育成という観点だけでなく、商品開発部門の経験者が職人トップの後継者に抜てきされたように、新たなうなぎパイを生み出し、付加価値をつけていかなければならない状況になっていることなどを、うまく掘り下げられるとよかった。花粉症の話題でも、品種の改良や生殖機能を変えることで、どう影響が出るか分からず導入が遅れている事情もあることを伝えるべきだった。

○　商品名がかなり前面に出ていてＮＨＫらしくないと感じたが、地域で話題になっているニュースを見るバラエティに近く、肩の力を抜いて見る番組として視聴した。とても有名で多数販売されているものが、職人によって手作りされているなど新鮮な知識が得られた。静岡県向けの番組なのであえて説明しなかったのかもしれないが、なぜウナギをパイに練り込んだのかなど歴史的な面を掘り下げてもよかったのではないか。職人の師範制度を取り上げていたが、師範、宗家、範士などそれぞれの段階に何人くらいいて、どうすれば昇格するのかなど、人材育成のシステムとしてどういうものなのか具体性がなく、表面的な伝え方だと感じた。師範が後継者として師範代を指名していたが、この二人の間にあるつながりが分からず気になった。一緒に働いていた時代のエピソードなどが紹介されないまま、師範代の親子の物語に焦点がずれ、技の継承ではなく精神論的な心の継承の話になっていき、番組として何を伝えたいのかがあいまいになってしまったと感じた。花粉症の話題で出演していた大学教授が浜松出身だと強調されていた。わざわざ浜松出身の人を探したのか偶然なのかは分からないが、番組としてここまでローカルにしなければいけないのかは疑問だ。静岡は花粉の飛散量・花粉症だと自覚する人の割合がともに全国２位ということだが、飛散量１位の鳥取が自覚する人の割合ではトップ３に入っていなかった。飛散量と自覚する人の割合にどうして違いがでるのか、あまり納得できる説明もなく、掘り下げが甘いと思った。無花粉スギは富山などでも先進的な研究がなされているので、静岡以外の取り組みも紹介することで、新しい発見やほかの地域とのつながりも見えてくるのではないか。リラックスして見るにはよいが、気づきや発見、新しい知識という面では物足りなさを感じる番組だった。

○　うなぎパイの課題として、職人の後継者問題を挙げていたが、こうした問題を扱うならば、若い人が入社してきているのか、２０代・３０代の社員がどれくらいいるのかなど、この会社の現状を数値で示してほしかった。番組で紹介されていた取り組みで、本当に問題が解決するのか分からず、もやもやした気持ちが残った。うなぎパイの会社がある浜松はオートバイやピアノなどモノづくりが盛んで、東海一帯も同様に盛んな地域であり、技能継承問題や後継者問題などへの関心が高いと思う。より多くの人の興味を引きつける別の切り口もあったのではないかと残念に思った。また、うなぎパイの技能継承の話を、職人トップの後継者に指名された男性個人の親子の話としてまとめており、課題が一般化できていないと感じた。うなぎパイが厳しい状況にあるから、買って応援しようという宣伝的なメッセージに捉えられないか心配になった。コロナ禍による売り上げ不振や小麦価格の上昇など、菓子業者はどこも同じような課題を抱えていることを、統計や数値で示すことは可能だったと思う。うなぎパイの窮状を取り上げるだけでなく、最後に一般化して共通の課題として扱い、広く地元のお菓子全般を応援しようというメッセージを発信することで、宣伝的になることは避けられたのではないか。

○　うなぎパイと花粉症という２つのテーマがあったが、１つに絞ってもう少し掘り下げたほうがよかったように思う。番組の最初に挙げたうなぎパイが抱える３つの課題のうち、売り上げ減少や小麦価格の上昇はあまり扱わず、後継者の育成を中心に取り上げていたが、その取り組みでさえ成功したのか失敗したのか結果が番組からは分からず、気になった。ある企業の内部情報を取り上げること自体は興味深かったが、もう少し取り上げ方を工夫する必要があったと思う。花粉の飛散量に地域差があることは知っていたが、特に静岡で多いことがよく分かった。一方、花粉症の症状には、風の強さや空気の乾燥といった地域特性やスギの数だけではなく、黄砂などほかにもさまざまな要素が影響すると思うので、もう少し掘り下げてほしかった。やはり、２つのテーマがあるため、それぞれを短い時間で扱わなければいけない点に問題があったのだと思う。無花粉スギを使うアイデアはよいと思ったが、実際に効果が出るまで時間がかかるため、番組を見ている人の花粉症をすぐに解決することはできない。「ガッテン！」で花粉症にはワセリンがよいと紹介していたと思うが、ＮＨＫはこうした“財産”を持っているので、静岡の特徴を示すだけでなく、具体的にどうすればよいのかまで見せてくれるとよかった。

○　２つのテーマを扱うことで、それぞれの内容が薄まってしまい、それゆえに疑問に感じる点が多くあった。うなぎパイの課題として、コロナ禍による売り上げ減少、ロシアのウクライナ侵攻による原材料価格の高騰を受けた値上げ、技術の継承という３つが挙げられていたが、それぞれにインパクトがあり印象に残るものだったため、番

組内ですべてに触れられるのだと期待していた。しかし、実際は技術の継承のみにフォーカスした番組構成だった。最初に課題を挙げる際に、コロナや物価の上昇というインパクトのある表現が無ければ､もっと違う形で見ることができたと思う｡もし、そういったインパクトの強いものを挙げるのであれば、それぞれを丁寧に説明する必要があると思う。花粉症については、町の人のコメント、花粉の飛散量や症状を自覚する人が多いといったデータ、有識者のコメントという流れで取り上げていて、なるほどと思いながら見られるものだった。ただ、花粉を出さないスギの話題では、ＮＨＫらしくない伝え方だと思った。ＮＨＫは多面的な角度からニュースを扱うことが重要だと思う。この番組を見て、スギを伐採して花粉症になりにくい木を植えればいいではないかと考える視聴者もいるかもしれない。しかし、森林法に関連して別の樹種を植えることは難しいことや、スギは育ちやすくある樹齢まではＣＯ２の吸収量が大きく温暖化対策に役立つこと、日本の固有種であり各地の文化と強い結びつきがあるため文化保持の観点からも問題があることなど、スギを大切にしていく意義がさまざまあり、だからこそいろいろな問題がありつつも品種改良が進んでいることまで伝えなければ、多くの疑問が残ったまま番組が終わってしまうと思う｡「たっぷり静岡＋」の再放送枠である日曜の午後１時５分に放送するならばよいと思うが、金曜午後７時３０分に放送する番組としては踏み込みが足りず、ＮＨＫらしさに欠けていると感じた。

○　バラエティ番組なのかニュースを深掘りする番組なのか、目指す路線がどちらともつかない状態だったのではないか。うなぎパイが抱えるさまざまな課題が提示されていたが、それぞれに対して深い取材がないまま進行し、問題点が番組の中で徐々にすり替わっていき、紹介された取り組みが本当に解決策になっているのかがわからないまま終わってしまった。番組の目指す路線が曖昧だった影響もあるのか、ゲストの水谷さんのコメントもはっきりしないものだった。職人の技術継承を目指して導入された師範制度は、企業としては一定の成果を感じているとは思うが、社員のやる気や技術の向上にはつながっているものの、技術継承の問題を解決するまでには至っていないと感じた。自身の父親もパイ職人だったという社員が父親との思い出を語る中で、バターの香りが父の香りだったという、映像では伝わらない記憶を喚起させるエピソードが挿入されていたのはよかった。花粉症については、スギを植えなければいいという短絡的な解決策にしか見えなかったのが残念だった。

○　うなぎパイが抱える３つの課題を提起したにも関わらず、職人の技術継承的な話だけが強い印象として残った。課題をすべて見せるのか、それとも１つのポイントに絞るのか、どこかで判断するべきだったと思う。また、うなぎパイが特定企業の商品であることも問題ではないかと感じた。静岡はモノづくりが盛んな地域であり、うなぎ

パイの課題として挙げられた材料費高騰などは他の企業にも共通するものだと思うが、なぜ今、この社会状況の中でうなぎパイだけを取り上げたのか引っかかる部分があった。無花粉スギの紹介も、単なる情報番組として見るにはよいかもしれないが、花粉症で苦しんでいる人にとって、具体的にどうすればいいのか、手助けになるような情報もあるとなおよかった。

（ＮＨＫ側）

今回は２つのテーマだったが、熱海の土石流のようなテーマの場合には、１つのテーマのみで構成する場合も出てくると思う。地域の人に見てもらうために、２５分という限られた放送時間の中で、何をどのように伝えていくのか、試行錯誤を続けている。視聴者にとって、より意味のある情報を伝えていくため、いただいた意見を生かしトライアルを繰り返しながら番組のスタイルを固めていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　５月６日(金)の「まるっと！」を見た。かつては地域や学校、各家庭が、他者への理解や共感する気持ちを育む場となっていたと思うが､そういった場が失われていき、多様性を受け入れられない社会になりつつあると感じている。さまざまな事情により社会に参加できない人たちが居場所を失い、生きづらさを感じる人が増えていると思う。その解決策として家でも学校でもない“第三の居場所”となる施設を紹介していた。これまでも社会の中で居場所を失う人たちの問題は顕在化していたと思うが、解決策が見えてこないがゆえに、前向きな番組として取り上げにくかったのではないかと思う。今回、ひとつの解決策が見えたことにより、番組として成立しやすくなり取り上げたのではないか。今回は番組内のコーナーで時間の制約があり、制作者の意見をそのまま聞かせるような雰囲気があったが、今後は見た人に解釈を委ねるようなドキュメンタリーとして制作してもよいテーマだと思った。社会問題として顕在化し、解決策が見えたテーマは番組で取り上げやすいと思うが、問題になり始めた早い段階で取り上げてもよいのではないか。ＮＨＫの番組を見ていると、そういった社会問題の種を見つけるためにインターネットを利用している印象を受けるが、ネットに頼らず実際に多くの人に会い、話を聞くことで社会問題の種を早く拾い、良質な番組作りにつなげてほしい。

○　５月７日（土）の土曜ドラマ　１７才の帝国（１）「帝国誕生」（総合 後 10:00～10:49)を見た。インターネット上での評判も大変よく、若い世代の視聴者の心をつかんでいる番組だと思う。高校の新しい必修科目として「公共」が導入され、主権者教育が重視されているタイミングでの放送は意義が大きいと感じている。教育の現場で使えるよい教材にもなりうるし、若者の主権者教育への興味を促す効果もあると思う。番組では、ＮＨＫらしく１つの事実を複数の視点から描く場面が多く、若き“総理”が改革を進めるにあたり、市民と双方向で意見を交わしながら取り組んでいることがとても分かりやすく表現されていた。市民の間で賛否が分かれていた場面もあり、１つ１つの要素に着目して是非を考えるだけでも主権者教育の教材になりうると思った。全国向けの番組だが、地方創生がテーマとなっているので、ＮＨＫが地域の方々とともに未来を作っていくための連携活動や教育活動で積極的に有効活用するとよいのではと思った。

○　５月１３日(金)の東海　ドまんなか！「わたしたちの茨木のり子“対話”のメッセージ」を見た。詩人の茨木のり子さんを、ゆかりのあるさまざまな人のことばを通じて紹介していた。愛知県西尾市にこのようなすばらしい人がいたことを知ることができてよかった。随所で引用される茨木さんの詩は、現代でも非常に考えさせられるものが多いと感じた。特に「自分の感受性くらい」という詩は、すべての現代人の心に刺さることばではないかと思う。高校の授業で詩を読み、時代や社会状況のせいにせず、自ら行動することの大切さを知ったという生徒の感想なども紹介されており、今の時代に茨木さんの精神を知るきっかけとなるよい番組だった。

○　５月１３日(金)の東海　ドまんなか！「わたしたちの茨木のり子“対話”のメッセージ」を見た。詩人の茨木のり子さんを、ゆかりのあるさまざまな人のことばを通じて紹介していた。愛知県西尾市にこのようなすばらしい人がいたことを知ることができてよかった。随所で引用される茨木さんの詩は、現代でも非常に考えさせられるものが多いと感じた。特に「自分の感受性くらい」という詩は、すべての現代人の心に刺さることばではないかと思う。高校の授業で詩を読み、時代や社会状況のせいにせず、自ら行動することの大切さを知ったという生徒の感想なども紹介されており、今の時代に茨木さんの精神を知るきっかけとなるよい番組だった。

○　５月１３日(金)の東海　ドまんなか！「わたしたちの茨木のり子“対話”のメッセージ」を見た。出演していた茨木さんゆかりの人たちは、語り口が優しく、よい笑顔で話していて、茨木さんに対する思いが伝わってきた。山根基世さんのナレーションは、静かだがしっかりとした口調で、まるで茨木さんが乗り移ったかのように感じた。田所アナウンサーが案内人として、かつて茨木さんが暮らした西尾の街を歩きながらゆ

かりの地を訪ねることで、番組の深みが増し魅了された。
　以前の東海３県向けの番組はバラエティ的な中途半端さを感じる部分もあったが、「東海　ドまんなか！」になってからは印象がとてもよくなった。

○　５月１３日(金)の東海　ドまんなか！「わたしたちの茨木のり子“対話”のメッセージ」を見た。茨木さんと親交のあった人や母校に通う高校生、俳優の磯村勇斗さんなどそれぞれが詩に寄り添い、茨木さんを語るよい構成だった。戦時下に学生時代を過ごした茨木さんが感じていた思いやことばに、ウクライナ情勢の中を生きる現代の高校生が触れることで、その感受性が直接伝わってくるようで新鮮だった。茨木さんが最後に過ごした自室の風景とともに「倚りかからず」という詩が朗読され、戦争の記憶や、対話を通して相手に寄り添い自らを確立する姿勢が紹介された。自らの感受性に従って生きることは現代では困難に思えるが、いったん自分自身から離れて人や物や自然と対話することだとすれば、誰にでもできるとても単純なことでもあるように思えた。茨木さんの「寄りかからずに対話を通して寄り添う」ということばは、そうしたことに改めて気づかせてくれる、とてもおもしろいメッセージとなっていた。番組を制作した人たちの感受性までもが伝わってくるようだった。

○　５月１３日(金)の東海　ドまんなか！「わたしたちの茨木のり子“対話”のメッセージ」を見た。ゆったりと見られて考えさせられる番組で、茨木さんの魅力にいっそう心引かれた。なぜ「茨木のり子」という詩人が生まれたのか、母との死別や戦争といった西尾市での経験や、彼女が生きた時代背景を交えながら浮き彫りにできればさらによかった。キーワードに挙げられていた“対話”についての説明はやや物足りなかったが、自分で詩集を読もうというきっかけにはなった。茨木さんの詩に込められたメッセージである、「対話の延長線上において相手と自分の感受性を信じる」ことは、生きていくうえで必要な考え方だと思う。自分もこういった詩に触れ、人生を振り返る機会を持たなければと思った。地元ゆかりの隠れた魅力的な人物を取り上げたことはとてもよく、見た人の生活や人生に影響を与えるよい番組だと思った。

○　５月１３日(金)の東海　ドまんなか！「わたしたちの茨木のり子“対話”のメッセージ」を見た。以前「クローズアップ現代＋」で取り上げていた内容と、名古屋局が今回の番組のために取材した内容がうまく組み合わさっていた。茨木さんが育った西尾市で、ゆかりのある人たちに取材した内容が丁寧に伝えられており、とてもよかった。番組ホームページに、制作を担当したディレクターのブログが掲載されており、取材で出会った方々とのエピソードや茨木さんとの思い出が、ディレクター自身のコメントとともに紹介されていた。茨木さんとゆかりのある人たち自身が気に入っている詩の話題もあり、番組とは違った紹介のしかたとなっていてよかった。茨木さんは、最

近ＮＨＫで何度か取り上げられているため、背景など情報の厚みが増していることに加え、現在のような世界情勢もあり、彼女の詩はより多くの人の心に響くと思う。

○　５月１３日(金)の金よう夜きらっと新潟　ホクロック！コラボ「北陸ＬＧＢＴＱ～生き生きと暮らすために～」を見た。初回の「ホクロック！」でも指摘したが、番組コンセプトが定まっていない状態のままで、２回目にして新潟局との共同制作となっていたが、なぜあえて「ホクロック！」や「コラボ」ということばを使ったのか分からなかった。北陸の各局と新潟局が協力して制作した、とするだけでよかったのではないか。制作者には何らかの意図があったのかもしれないが、特に新潟県の視聴者からすると「ホクロック！」と唐突に言われてもよく分からないと思い、ミスマッチなタイトルだと感じた。「ホクロック！」は、北陸の話題を放送する番組であるとの意思表示があればまだ分かりやすいが、コンセプトが定まっていない中での新潟局との共同制作となり、なおさら分からなくなってしまうと感じた。ただ、番組の内容はとてもよかった。ＬＧＢＴＱをテーマに、各県の性的マイノリティーの人たちの意見を取り入れながら進行していた。北陸の地域特性も織り交ぜつつ、問題を取り上げていたのもよかった。ＬＧＢＴＱといった一般的にマイノリティーとされる人だけではなく、観点を変えれば誰しもマイノリティーとなりうる部分を持っているとのメッセージにはとても共感できた。地域に開かれたＮＨＫという意味では、地域局でとてもよい番組を制作した場合、その後どのように展開していっているのか疑問に思った。

○　５月１３日(金)の金よう夜きらっと新潟　ホクロック！コラボ「北陸ＬＧＢＴＱ～生き生きと暮らすために～」(総合 後7:30～7:57 北陸３県ブロック・新潟県域)を見た。「ホクロック！」の２回目の放送となるが、初回の「ホクロック！」同様、番組のコンセプトがよく分からなかった。共生社会の実現を念頭に置き、ＬＧＢＴＱをテーマに生きづらさを抱える当事者たちの声を伝えていた。冒頭の街頭インタビューで「突然ですが、ＬＧＢＴＱを知っていますか？」と尋ねていたが、「ＬＧＢＴ」に比べて「Ｑ」は認知が進んでいないと感じるので、その意味を説明するべきだったと思う。また、前置きなく「トランスジェンダー」「Ｘジェンダー」「アライ」といったことばが使われており、共生社会の実現をうたう番組であるにも関わらず、どこか特殊な世界の話のように進んでいったのは残念だった。スタジオに出演していた性的マイノリティーの人たちは、それぞれ自身の考え方を主張していたが議論が尽くされずに終ってしまい、番組としてどのような結論につなげたかったのか着地点が見えなかった。とても難しいテーマであり、番組のコンセプトが定まらない中、北陸３局だけでなく新潟局も制作に加わったことで、伝えたいメッセージを明確にすることは大変だったと思うが、今後は番組の持つ魅力や視点、強みを前面に出していくとよいのではないか。

○　４月２２日（金）のパラレルニッポン「幻の“第二山手線”プロジェクト」(BS ﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 10:00～10:59)を見た。実現しなかった大プロジェクトが実現していたらどうなっていたのか、専門家がシミュレーションしパラレルワールドを楽しむという趣向の番組で、今回は 100 年ほど前に計画された山手線の外側を通る環状線計画を取り上げていた。現在の価格にしておよそ 950 億円という膨大な事業費を賄うため、派手なカラー刷りのパンフレットを作って株主を募集したことや、線路を掘り割り式にしようとしていたことなどが紹介されていた。掘り割り式にすることで踏切が不要になり路線が高速化し、掘った土で東京南部の湿地帯を埋め立てて宅地開発を進め、沿線が発展すれば軌道をトンネル化してその上を街として利用するなど、当時の実業家の情熱や、どれだけ知恵を絞ったのかが番組を通じてよく伝わってきた。ドキュメンタリーとしてよくできていた一方、番組後半で取り上げた、実現していた場合のシミュレーション結果には気になる部分もあった。都心部が広がって東京の国際競争力が向上し、人口もさらに増えていたなどバブルの再来かと思うようなものだった。国のレジリエンスや災害対策など、東京への一極集中の是非が議論されている中で、東京目線から抜けきらぬ東京巨大化礼賛という印象を受け気持ち良く見終えることができなかった。

○　ＮＨＫプラスは、自分が住んでいる地域以外のニュースや、テレビを見られない時間帯の番組などを見ることができるのでとてもありがたい。ただ、同じ東海地方でも、名古屋の「まるっと！」は見られるが静岡のニュース番組は現状見ることができない。配信対象の放送局が広がり、いろいろな地域の番組が見られるようになれば、ＮＨＫが持っている財産をより多くの視聴者に届けることができると思う。

○　地域局が制作した番組を見ていると、よい番組ではあるものの、情報番組の中の一つのコーナーとしてではなく、ドキュメンタリーとして放送したほうがよいのではないか、放送時間を拡大してスペシャル版を作ることができないのかと思うことがある。地域局がミクロな視点で社会的課題に向き合い、さまざまな角度からメッセージを発していこうとすると、限られた放送時間内では、その表現も制限されてしまう部分があると思う。放送は時間の枠が決められておりなかなか難しいとは思うが、地域に開かれたＮＨＫという観点では、地域局が制作した番組を放送する枠を新たに作れないのか、番組を展開していく工夫ができないのか、実態を知りたい。

（ＮＨＫ側）

地域放送は、平日の午後６時１０分からのニュース・情報番組と金曜午後７時３０分の番組をメインにしている。各放送局の判断で、全国向けの番組を差し替え、新しく地域向けの番組

を開始することも可能ではあるが、制作にかかる要員や予算などとの兼ね合いもあり、現在ある枠に特化して取り組んでいる。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

２０２２年４月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、２１日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、ホクロック！「１８歳、叫びます。」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、５月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	松田　裕子	（三重大学学長補佐）
副委員長	坂田　守史	（(株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役）
委　員	稲垣　貴彦	（若鶴酒造(株)取締役）
	岡安　大助	（中日新聞社取締役）
	玉井　博祜	（能楽師・玉井屋本舗社長）
	成島　洋子	（(公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長）
	平本督太郎	（金沢工業大学ＳＤＧｓ推進センター長）
	廣田　憲吾	（愛知県農業協同組合中央会常務理事）
	安井　香一	（東邦ガス株式会社相談役）

（主な発言）

＜ホクロック！「１８歳、叫びます。」

（総合　４月１５日(金)放送）について＞

○　福井・石川・富山の北陸３県をまたいだ新番組として、制作には苦労もあるかと思うが、とても期待している。民放含め各県の放送局が北陸全域を対象とした番組を制作する場合には、それぞれの県の視点から制作することになり、内容にどうしてもバイアスがかかると思う。今回の取り組みは、あくまでも各放送局が一緒になって制作するもので、そういったバイアスを取り除ける可能性があり、ＮＨＫならではの取り組みになるのではないかと応援している。若者による叫びや街の活性化、俳優の町田啓太さんの１８歳頃の振り返り、映画監督の細田守さんのメッセージなど、さまざまな内容がありとても興味深かった。町田さんは、ナビゲーターとしてそれぞれの話題をうまくつないでおり、ナレーションの口調も優しく好感を持てた。ただ、番組として成長できる余地は大きいと感じた。ホームページでコンセプトを確認したところ「見た人の魂を揺さぶるようなロックな番組を作りたい」とあったが、今回の内容とは少

しギャップがあるように感じた。特に、タイトルの一部である「ロック」は、若者が叫べばロックだという理解であれば、とても安易だと感じるうえ、ナビゲーターとしての町田さんや細田監督へのインタビュー、相撲部屋に入門する木村翔さんのパートの意味が薄れてしまうと感じた。“ロックな番組”とは何なのか、結局よく分からなかった。「ナビゲーション」でも複数の放送局が制作に関わり、コンセプトや伝えたいメッセージがぶれたことがあったように、複数の放送局が連携して制作することでコンセプトがぶれがちになるのではないかと思う。だからこそ、「見た人の魂を揺さぶるようなロックな番組」とは何なのか、制作者の間で意見を統一しておく必要があったと思う。コンセプトや伝えたいメッセージのぶれが、内容にも表れていたようで残念だった。初回の放送ということもあり、多様なアプローチをしていた。多様な視点で一つの物事を描き出すことで本質に迫ることはＮＨＫの強みだと思うので、何をどう深掘りしていくのかをあらかじめ決めておくことで、よりよい番組になっていくのではないかと思った。今後の取り組みにとても期待している。

○　タイトルに「ロック」とあるとおり、若者の心の叫びをテーマに据えており、初回放送としてとても印象がよかった。町田さんのナレーションは爽やかで、野田洋次郎さんが歌うテーマ曲にも親近感が湧いた。駅前や自動車学校、ショッピングセンターなど、若者が集まりそうな場所で各放送局がうまく分担して取材しており、北陸について思うことや、地元を出る人・残る人など、多面的な捉え方をしていたと思う。細田監督のメッセージは最も印象的で、地方からいきなり都会に出て感じたギャップが原点になっていると聞き、自分も含めた多くの人にも同様の経験があるのかと感慨深かった。相撲部屋への入門が決まっている木村さんのパートでは、幼なじみとの関係性がしみじみと伝わってくる、よい取り上げ方だと思った。金沢美術工芸大学の学生が制作したタイトルＣＧはとてもよかったが、調べてみても何なのか分からないキャラクターが複数いたので、どこかで説明があるとよかった。ロックには年代を問わず訴えかける力があるとは思うが、若い制作者ならではの同世代に響くテーマ、メッセージなのかと思い、テーマ曲の歌詞も相まって、若者には強く感じるところがあったのではないか。街頭で人々の声を聞く番組は多く存在するが、コロナ禍が長引くなか、マスクを取って思い切り叫ぶという行為には新鮮さがあり、初回のテーマとしてとてもよかった。

○　冒頭で町田さんが登場し、細田監督のインタビュー映像や１８歳の人たちが思いを叫ぶ映像のダイジェストを見せる構成になっていたが、やや地味なオープニングだと感じた。町田さんは、途中で自身の１８歳頃の思い出を紹介してはいたものの、全体の流れとの関わりがあいまいで、彼の役割がナレーターなのか、それとも別の何かなのか、よく分からなかった。若者たちがカメラに向かって叫んでいた場所が、金沢、

福井、富山と順番に移っていたのは、北陸各県の視聴者に参加意識を持ってもらいたいという意図だとは思うが、場所と思いに関連性はあまり感じられず、それぞれの印象が薄まったように感じた。敦賀市の若者たちが、人口減少や高齢化に苦しむ地元商店街の活性化に取り組む姿を紹介する場面あたりから、前向きな感じが盛り上がり、細田監督の「抑圧の苦しみを引き受けて、十分にもがいて、１８歳の時間を大切に」ということばが、番組としての結論のように思えた。最後に登場した相撲部屋への入門が決まっている木村さんの「海はしゃべらない友達、親友は海的存在、しゃべる海」ということばは、番組最後の余韻としてよかった。街頭で人々の声を聞く番組はよくあるが、ややシリアスな話題の際に、紹介された人の声だけを聞いて、世間ではどちらの意見が多数派なのか納得してしまいがちなところもあると思う。意図せぬミスリードとならないように、放送する前にどういった配慮がなされているのか気になった。

○　制作した人たちが、本当に手応えを感じて放送したのか疑問に思うほど、久しぶりにひどい番組を見たという印象を受けた。北陸３県の各局が協力して制作したことは分かるが、それぞれ文脈が異なる内容がつなぎ合わさった印象で、終始よく分からず、最終的に何を見たのだろうという疑問が浮かんだ。北陸の各局が手探り状態の中で制作したと感じざるを得なかった。また、テーマとストーリー構成とディテールも合っていなかった。各局の制作者が話し合い、コンセプトを共有して制作したとは感じられなかった。冒頭で町田さんが登場して、すぐに今回のテーマに入っていたが、そもそも「ホクロック！」はどういうことを伝える番組なのか説明がなかった。新番組の初回放送の冒頭において、そういった説明がないと、見る側としては手がかりを失ってしまう。次回の放送も見たいと思えるようなメッセージ性もあまり感じられなかった。北陸３局で制作していくことには期待したいが、制作者が本当に自信を持って放送に出したのかが疑問だった。

○　今年度から成人年齢が１８歳に引き下げられたことを受け、若者の卒業・入学・就職・旅立ちに関することばを引き出そうとしたのではないかと思った。街なかにマイクを持ち出し、その前に１８歳の若者を立たせることは、そう簡単ではないだろうと思った。しかし、最初に取材に応じた女性は、有名な尾山神社の宮司の孫娘で、祖父の姿に憧れ、将来は神職になりたいというインパクトのある話を聞かせてくれた。なかなか思いもつかない将来図だと感じた。次の若者たちが、コロナ禍で修学旅行にも行けず、黙食を強いられた日々を脱し、自由になりたいと語っていたのには、もっともだと思った。八村塁選手や馬場雄大選手を輩出した富山県に、バスケットボールのコートが少ないとの声は意外だった。細田監督は「１８歳で感じたことが、その後の人生にものすごく関係してくる」と言っていたが、マイクの前で叫んだ経験は、彼ら

の一生の思い出になっただろうし、人生の重しにもなると思った。相撲部屋への入門が決まっている木村さんと、彼を応援する幼なじみが海で語り合うエンディングもよかった。

○　１８歳というのは、卒業・入学・就職など人生の新たな一歩を迎える年齢だ。北陸に住む１８歳が、今何を考えているのか、成人年齢が引き下げられるタイミングで聞いてみようという番組だったと思うが、多様で率直な声が紹介されていた。日頃から「これを叫ぼう」などと考えている人はいない中で、マイクを向けられてから、自分でいろいろと考えて、祖父のような神職になりたい、声優になりたいといった思いを叫んでいた。叫ぶことによって、思いが誰かに届くし、町田さんが「叫んだら自分の気持ちが分かったみたいですね」とコメントしていたように、自分で自分の思いをもう一度かみしめる効果があったと思う。その叫びをまんべんなく、多くの人に聞いていたことが、この番組の一番よかった点ではないか。その中には、北陸には足りないものがあり、自分の夢をかなえるためには出て行くしかないという共通した声があり、北陸の抱える問題が少しだけ浮かび上がっていたように思う。生まれ育った町を人口減少で潰したくないとの思いから、フリーペーパーを 6,000 部配布している敦賀の女性を紹介していたが、本当に１８歳の人たちだけで運営しているのか気になった。そのあたりも、もう少し詳しく伝えてほしかった。番組の最後に紹介された相撲部屋に入門する木村さんも魅力的だったので、この２人をもっと取り上げてもよかったのではないか。また、細田監督の話は、納得できる正しいものだったが、こういった大人のことばが番組の締めくくりのようになってしまうよりも、若者たちのことばだけでまとめたほうが、よりよかったのではないか。テレビに取材されるのは一般の人にとってはとても大きなことだと思うし、日頃あまり考えていないことを懸命に考えて叫んだにもかかわらず、放送されなかった人が多かったとすれば、少し心が痛んだ。

○　新番組なので、冒頭でどういった番組なのかを紹介するなどして、見る側の視点を定めてほしかった。第１回はさまざまな若者の声を取り上げていたが、これは若者が見る番組なのか、それとも大人が見て、今の若者の考えや置かれた状況などを知る番組なのか分からず、居心地の悪さを感じた。番組名は北陸とロックなのだろうと予想はついたが、北陸道が昔は「ほくろくどう」と呼ばれていたからというのは金沢局の報告で初めて分かったので、放送でも紹介してほしかった。若者たちの決意や悩みといった生々しい叫びが紹介されていたが、中でも、コロナ禍でも人によっては旅行などで出歩く大人がいる一方で、自分たちは抑圧されているという叫びには納得できる部分があった。非常に攻めた発言だと思うので、見た大人がどう感じるのかと思い新鮮だった。細田監督の「北陸は本当に刺激や物が少ないが、それは実は都会でも同じであり、抑圧された中でもがき苦しむことこそが人生に大切だ」という、後ろ向きか

つ前向きなことばは、これから困難にぶつかっていく若い世代への力強いエールとなっており、とても印象的だった。このことばをまとめとして番組を終わらせず、力士を目指す１８歳の目線から見たエピソードを最後に加えることで、大人の意見で番組を締めくくるかたちにならなかったのはよかった。富山・石川・福井という複数の地域から、さまざまな人を紹介していて、ベクトルを合わせるのが難しかったと思うが、多様なあり方を示すという意味では非常によかった。ただ、この番組が次にどうなっていくのか分からなかった。みんなが叫ぶ番組で、次回は高齢者が叫んだりするのだろうかと思ってしまった。「ホクロック！」はこういう番組だという紹介がないと、次回を見るかどうか悩んでしまう。次回予告を入れるなど何らかの工夫があるとよかったのではないか。

○　大人と子どもの境目にいる１８歳という年齢をターゲットにしたことで、大人と子ども両方の視点から地域の課題を見つめる番組になっていたと思う。北陸に限らず人口流出の問題は全国に存在し、特に１８歳で県外に出てその後は戻ってこないという悩みを各地域が抱える中、どうしてそうなってしまうのか、本音を聞くことができた。北陸３県それぞれの１８歳が暮らす町の風景が描き出されていたのもよかった。ナレーションを担当した町田さんの映像は、マイクの前で語りかける姿で一貫しており、彼のことばは叫んだ若者に向けられていることが、映像からはっきりと伝わってきた。一方で、新しくスタートした番組としての説明が足りていないと感じた。単発の番組としては成立しているものの、今後どのような番組として継続していくのか分からず、見続けようというモチベーションにまではつながらなかった。若者に向けた番組だと思ったが、実際に若者がどの程度ビビッドに受け取ってくれるのかまでは見通せなかった。今後どのように続けていくのかが課題だと思った。

○　お互いの好きな料理を交換することで交流のきっかけにしようという企画は、とても意味のあるものだと思ったので、その意図や継続するのかどうか、今後、どう展開していくのかも知りたくなった。多文化共生が、理念的で大きなものだけではなく、もっと身近なものでもあることを伝えるために、複数どうしの組み合わせではなく、一対一の２組を紹介していたことに好感を持った。高校生の２人は、同じ空間にいながらオンラインで会話をしているという状況に違和感があったものの、心の距離が縮まっていくのに合わせて、２人の間の距離も変化しているようで、その変遷がおもしろかった。日本人は、交換する料理として天ぷらとから揚げを選んでいたが、何を提供すれば、食だけでなく文化的なものも含めたトレードができるのか考えさせられた。食べ物はお互いを知る一歩であり、外国の食べ物を知ることは、その人を知ることであるというのは、本当にそうだと思った。

○　番組のコンセプトがよく分からなかった。一般の視聴者はあまり意識しないのかもしれないが、番組を審議する側としてはコンセプトが分からないと、しっかりと審議ができないため気になった。番組名にロックとついているが、それほどのロック感はなかった。テーマと演出手法が合っていたかも疑問に思った。ロックだから叫ばせたのかもしれないが、１０人いれば１０通りの叫びがあり、まとめるのが難しかったのではないか。複数の放送局が制作したものを継ぎはぎにしたためだと思うが、終わったかと思ったら､また次の話が始まるなど､本当に完成版なのか不安になるくらいテンポが悪かった。１８歳の叫びがテーマであれば、むしろ叫びだけを聞き続けたほうがアップテンポで飽きずに見られたのではないか。また、華やかで主役級に目立つ俳優が、ナレーターとして番組冒頭に登場し、その後も随所で顔を出す演出には、新しさを感じたものの、違和感があった。語り自体はよかったが、顔を出すのであれば、ナレーターという役割でなくてもよかったのではないか。力士を目指す木村さんとその親友との別れの場面で、海に向かって叫ばせていたのは演出過剰だと感じた。細田監督やナレーターの町田さんが、自身の１８歳当時を振り返りながら語った思いは若者にとって励みになるとは思ったが、ちぐはぐな構成が気になってしまい、全体を通してこれは完成版だったのかと疑問に感じてしまった。

○　祖父に憧れて神職を目指す金沢の１８歳から始まり、さまざまな若者の声を集めていた。私小説風で最初はすぐに飽きてしまうかと思ったが、徐々に興味をそそられていった。北陸によい大学やよい企業を誘致してほしいという叫びは、個人の思いにとどまらず、北陸の普遍的な声を反映していると感じた。また、人口減少が続く敦賀を活性化しようとする１８歳の姿は、その土地の課題や将来像を映しているように思えた。また、相撲部屋に入る若者の決意や、友人への感謝と別れなどを取材したパートは、青春の１ページを切り取っているかのように見えた。当初は、単に個人的な叫びを聞く番組だと思ったが、番組が進むにつれ、法的な成人年齢引き下げを受けた現代の若者の気持ちをくみ取ることを通じて、時代を探るという側面が見られ、興味深い番組だった。

○　現代において最も大きな節目である１８歳という年齢で、自らの思いを叫んだことは、本人にとってもそれを見た大人にとっても意義深いことだと思う。インタビューを受けた人と視聴者の双方に、価値ある時間を提供するよい番組だった。ナレーターの町田さんは、パイロットになるため親元を離れて石川県にある高校に進学したが、その夢は破れて今のキャリアにつながるダンスに巡り会ったという。北陸での経験が人生に大きな影響を与えたという背景が、心温まることば選びや声の抑揚・トーンなど、北陸の１８歳の叫びに寄り添い、応援する姿につながっていると感じた。１８歳

の時の心の叫びは後の人生に大きな影響を与えるもので、自分自身を振り返るとしみじみと人生の節目だった思った。多くの視聴者も同様の思いを感じたのではないか。富山県出身の細田監督が出演し、苦しいだけだった１８歳でも、それが人生の糧になると伝えてくれたことは、今の自分に納得ができない若者に勇気を与えたと思う。叫びの内容は、北陸ならではの過疎化や少子高齢化、教育格差、コロナ禍、ウクライナ情勢、将来の夢など多岐にわたり、それぞれが等身大でバランスがよかった。力士を目指す１８歳の友情物語からは、アスリートの世界も努力と根性だけの時代から大きく変わったのだと改めて感じた。１８歳という区切りの年齢を切り取ることで、時代の流れの中で変化するものと変わらないものが、明確に感じられる番組だった。

（ＮＨＫ側）

「ホクロック！」は毎週放送していく番組ではなく、北陸の魅力だけでなく、これまであまり取り上げてこなかった北陸の生きづらさや難しい問題を取り上げていくことだけを事前に決めていた。決まった演出やキャスターによって、番組の形を固めることをやめることからスタートした面もあり、それが分かりづらさにつながったのかもしれない。次回の放送は６月１７日を予定しており、ほぼ２か月も先の情報を視聴者に伝えるのはどうかと考え、次回予告などは入れなかった。１８歳というテーマに決めた際、ＮＨＫの視聴者は高齢者が多いため難しい目標ではあるが、１８歳から３０歳くらいの視聴者に見てもらえるような番組に挑戦しようということにした。町田啓太さんは若い視聴者に親和性がある出演者ということで選んだ。演出に関しては、制作する側で何かを決めつけることはしないようにしていた。ＮＨＫには転勤があり、制作者は北陸に住み続けている人間ばかりではないため、まずは地域の１８歳の声を聞くという姿勢で制作を始めた。一方で、相撲取りを目指す男性は、事前に決めていた取材対象でもあったので、そうしたところが、ちぐはぐな構成との印象を与えてしまったのかもしれない。

○　北陸に愛情を持っているからこそ、少し厳しめに言うと、今の話を聞いても、制作する人たちが手応えがないまま放送に出していると感じた。コンセプトを始めとして、番組の礎となる部分が考え抜かれておらず、北陸３県で協力することでさらにぼやけてしまっている。もっとビビッドにコンセプトやテーマ、北陸をどのようにすくい上げるのかを考えないとどうしてもぼやけてしまう。次回６月の放送に向けて頑張って

ほしい。

○　力士を目指す男性を紹介する際、稽古の風景など、叫んでいる姿以外の映像も流れていた。この人を取り上げることで、事前に準備した映像が使えるという意図があったのかと勘ぐってしまった。次回は、しっかりと検討を重ねて制作してくれることを期待したい。

＜放送番組一般について＞

○　３月１８日(金)のドリーム★ネイバーズ(総合 後7:30～8:13 東海3県・石川県域・福井県域)を見た。地域で暮らす外国人の夢を応援していく番組で、病院で症状を伝える際に使う、シクシクやズキズキなど痛みを表現するオノマトペの翻訳カードを作りたいというブラジル人、雪が降らないコートジボワール出身のため、スキーと雪だるま作りがしたいという夫妻、イスラム教徒でも食べられるハラールラーメンを作りたいというインドネシア人を取り上げていた。それぞれの生活に密着し、地域で暮らす外国人の顔が見える構成になっていてとてもよかったと思う。特に、寺の住職らに精進料理の作り方を聞き、それを手がかりにハラールラーメンを考えていく過程は、先月の視聴番組だったナビゲーション「ふうどトレード」で議論になった、日本から外国人に提供できる食や文化は何かという問いへの回答になっていたように感じた。名古屋局のホームページでも２つの番組が「ハロー！ネイバーズ」というシリーズとしてつながって見ることができ、レシピ検索などもできてよかった。

○　３月２３日（水）のあいみょん１８祭「あいみょんと１０００人の１８歳世代が共演！」(総合 後 10:00～11:15)を見た。参加者は事前に動画審査で選ばれていたが、あいみょんは若者にとても人気があるので、すごい競争率の中を勝ち残った人たちなのだろうと思った。オンラインでの練習風景や、急きょ本番もオンラインに変更となって残念がっている参加者の姿など、本番までの様子も伝えていておもしろい構成だった。オンラインでも一体感が生まれるように、ＮＨＫならではの技術を駆使しており、とても盛り上がっていたように感じた。1,000 人の参加者があいみょんを取り囲むように巨大モニターへ映し出されているステージは、新しい時代のコラボレーションの形に挑戦していたのではないかと感じた。１８祭が終わって多くの参加者が感動して泣いている様子からも、ＮＨＫは時代を記録するといった役割だけでなく、時代を作ったり人生に影響を与えたりする役割も十分果たしていると強く思った。合唱が始まるまでの時間が長く、中盤あたりで少し間延びしているようにも感じたが、ラストシーンがとても感動的だったこともあり、非常によい番組だと思った。地域局と連携し、参

加者を取り上げたリポート動画をウェブで公開したり、ＳＮＳも活用するなど、若者視点に立って、共感してもらえるように取り組んでいたと思う。このようなチャレンジを続ければ、若者にも「ＮＨＫはすごい」と思ってもらえると思う。若者向け番組を制作する際、参考にできるのではないかと感じた。

○　３月２６日(土)の中部ネイチャーシリーズ　冬の特別編「真冬の飛騨高山　極寒を楽しむ」(総合 後7:30～8:13 東海３県ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。イラストレーターの朝日陽子さんが飛騨地方を巡りながら、自然や郷土の文化、人々の営みを体験しており、とてもおもしろかった。冒頭で、朝日さんが訪れた４か所を大まかな地図で示すことで、位置関係がよく分かった。番組の最初に、基本的な情報を提供するのは、非常に大切なことだと思った。自然を題材としている「中部ネイチャーシリーズ」は、科学との相性がよいと思う。冬場はマイナス２５度まで冷え込む六厩地区が、なぜそれほど冷え込むのか、寒気の流れと地形の関係を示す簡単な図を用いて説明しており納得できた。だからこそ、飛騨染めの寒ざらしや寒干し大根作りを紹介する際に、なぜ低い気温がプラスに作用するのか科学的な説明もしてほしかった。穂高連峰のダイヤモンドダストなど、すてきな映像が豊富で楽しかった。朝日さんが、各地での体験を描いたイラストを番組内で紹介していたのは、とても効果的だと思った。

○　３月３１日(木)の潜れ！さかなクン「富山湾　びっくり箱みたいな海」(総合 後8:15～8:42)を見た。さかなクンさんが出演していて、コンセプトが非常に明瞭で分かりやすく、楽しんで見ることができた。さかなクンさんのテンションがとても高く、たじたじになってしまう共演者もいる中で、出演していた魚津水族館の館長は堂々としていたのが印象に残った。

○　４月２日(土)のウイークエンド中部を見た。タレントの加藤里奈さんがリポーターを続けてきたコーナー「トレンド探偵」が感動の最終回を迎え、これまでの９年間を３年ごとに区切り、振り返っていた。トレンドは時代を映すと言っていたが、いろいろあったと思い返すことができた。次の３年間はアフターコロナで最先端とオールドの融合と言っていたが、別の番組でもよいので、引き続き取り上げてもらえればうれしいと思っている。

○　４月８日(金)の東海　ドまんなか！「ここで生きていきたい」(総合 後7:33～7:58東海３県・静岡県域)を見た。冒頭で番組の趣旨を説明していたので、どういったことを伝えていくのか分かりやすかった。多文化共生をテーマにした「ドリーム★ネイバーズ」の延長線上にある番組だと思って見はじめたが、よい意味で期待を裏切られた。仮放免が認められた外国人が置かれている状況をつぶさに伝えており、公共放送とし

て、一般の人ではあまり知り得ない現実、社会的な状況を伝えることの意義を強く感じた。どんな国においても、国外から来た人に対する差別的行為は少なからずあるものの、日本では制度そのものによって、人の生き死にや自由に生きる権利が脅かされている事実に、自分自身が向き合うきっかけとなった。ドキュメンタリー的なＶＴＲパートを見て、さらに知りたいと思った部分や背景にある社会的・制度的問題を、スタジオパートでデータを示しながらしっかりと解説しており、バランスがよく好感が持てた。担当ディレクターが出演し、キャスターとの対話を通じて内容を深めていたが、制作者の主体的な視点も感じられるとてもよい演出だった。

○　４月８日(金)の東海　ドまんなか！「ここで生きていきたい」を見た。愛知県津島市で、さまざまな事情で祖国に帰れない外国人を支援するシンガーソングライターの眞野明美さんを中心に描かれていた。日本で働くことができない外国人が、地域住民との交流やボランティアを通じてつながりを持ち、アルバイト的に、わずかなりとも収入が得られるようになること自体はよいが､その事実が番組を通じて公になるのは、彼らにとって不都合ではないかと心配になった。

○　新番組の中でも完成度に差があったという意見が複数出たと思うが、なぜそういった差が生まれたと考えるか。

（ＮＨＫ側）

完成度の差というよりは、番組の種類が全く異なるということではないかと思う。「東海　ドまんなか！」は、一人のディレクターが取材を積み重ねて制作したこともあり、一つの目線でぶれることなく、まとまりのある番組になったのだと思う。一方、「ホクロック！」は、あえてまとめることをせず、取材できた１８歳の叫びを並べる形式にした。委員からは、おもしろかったという意見があった一方、コンセプトが分からなかったという意見もあり、さまざまな意見が出るのが審議会のよさだと思う。６月に予定されている次回の「ホクロック！」には、ぜひ生かしていきたい。

○　これまで、主に中部地方向けだった金曜夜間の地域向け番組の放送エリアが、東海地方と北陸地方に分離されたと改めて感じた。これまで中部地方としてのまとまり、共通したイメージをどう作っていくのか考えるべきだと意見してきたが、今後は東海と北陸で互いに切さたく磨しながら制作に取り組んでほしい。

（ＮＨＫ側）

各放送局の若い制作者たちがとことん議論し合ったうえで制作した。ＮＨＫの番組は論理立てて制作することが多いが、「ホクロック！」は、あえて感情を重視し１８歳の若者たちにマイクを向けるとどういったことばが飛び出すのか、反応に期待しながら制作した。いただいたご意見を参考にしながら、ブラッシュアップさせていく。

○　４月８日(金)のＵＰっぷ富山　きとラボ「新たな生き方を見つけた富山人スペシャル」(総合 後7:33～8:00 富山県域)を見た。富山の方言で新鮮であることを示す「きときと」と実験室の「ラボ」を組み合わせたタイトルで、新鮮な情報を届ける実験的な番組だと冒頭で説明しており、納得感を持って視聴できた。新たな生き方を見つけた人として、はなにんげんアーティストとフレアバーテンダーを紹介していた。はなにんげんは、参加者が選んだ１輪の花を中心にさまざまな花を頭に飾りつけるアートということだが、もう少し詳しく説明してほしかった。はなにんげん自体が聞き慣れないことばなので、どういった由来があるのかや、ライセンスを持った人が全国にどれくらいいるのかなどの紹介があれば、もっと腹落ちしたと思う。フレアバーテンダーは、ジャグリングなどのパフォーマンスをしながらカクテルを作る職業ということだが、こちらもなじみがないので、どういった人がどれくらい活動しているのかといった紹介がないと、どれくらい珍しい職業なのか伝わらないと思った。また、フレアバーテンダーの人は３日後に放送した「ニュース　富山人」でも取り上げられており、内容もほぼ同じだった。放送数日後に、そのままの構成でニュース番組に出せるような内容は、新鮮で実験的なものを提供するという番組のコンセプトにはそぐわないと感じた。そのほか、第１回も第２回もサブタイトルに「スペシャル」ということばが使われているが、乱用しすぎではないか。もし、今まで取り上げたものを特集として放送するという意味で「スペシャル」としているのであれば、「きとラボ」というタイトルとは合っていない。今後、新しい視点を提供する番組になっていくことを期待している。

○　４月１６日(土)のウイークエンド中部を見た。福井県美浜町で、新規就農者がシェアハウスに住みながら、先進農家を講師に迎えた研修を受けている様子を伝えていた。ＮＨＫには、こういった取り組みをもっと取り上げてもらいたいと思った。「ゆる山へＧＯ！」のコーナーが久しぶりにあり、山岳ガイドが自然を観察しながら歩く山の楽しみ方を伝えていた。また、野鳥の撮影をしていたが、その技術がとてもすごかった。何度もこのコーナーを担当している今村有希キャスターによる案内は板に付いている

と感じた一方、カメラマンは恐る恐る撮影しているように見え、心配になった。「みんなでＳＤＧｓ」のコーナーでは、不衛生なトイレが原因で、世界で？１日あたり 700 人の子どもたちが亡くなっていることを取り上げ、途上国向けに開発された簡易式トイレを紹介していた。このような取り組みは、継続して伝えることで定着していくと思うので、ぜひ今後も続けてほしい。ニュースの最初の項目で、予定とは異なる映像が流れてしまったようだが、田中逸人アナウンサーがずいぶんと落ち着いて進行していたので、すごいと思った。ニュースと短いコーナーの中にさまざまな情報が詰まっており、週末にリフレッシュできる内容で、キャスター２人の連携もよく、非常によい番組だと思う。今後も応援していきたい。

○　３月２４日(木)のニッポンぶらり鉄道旅「名古屋市営地下鉄名城線・名港線　名古屋スピリット」(BS ﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 7:30～7:59)を見た。身近な沿線でなじみがあり、どれくらいディープな話題が出てくるのか楽しみで視聴した。１年半かけて作り上げた巨大なジオラマに鉄道模型が走り回るカフェには、愛好家の桁違いな執念を感じた。模型を持ち込んで自由に走らせながらお茶をすることができることにも大変驚いた。また、ダンス教室の女性は、マイナスの感情を抱いてフラメンコを踊ると、音が汚いと感じてしまうため、冷静さを取り戻せると言っておりすごいと思った。大須商店街の飲食店には、老舗の味を受け継ぎたいという店主の思いを知ると、自分も行ってみたくなったが、テレビで取り上げられると客が押し寄せて迷惑をかけることが多々あるので、少したってからにしようと思う。また、食のレポートでは何でも最高においしいと言うことがお約束になってしまっていると感じることがあり、テレビは本当においしいものは何かという情報を正確には伝えられなくなるのではないかと危惧している。かっちゅうの復元をする工房では、失われた部分を当時のはやりなどから推定しつつ作業していた。復元を進める中で、武将の体格や性格までもが浮かび上がってくるという話は、ユニークでおもしろいと思った。名古屋港では、現状のままだと 2050 年までに、海には魚より海洋ごみのほうが多くなってしまう可能性があると紹介されており驚きだった。なじみのある地域にもまだまだ知らないことがたくさんあること、ＮＨＫの取材力、テレビのありがたさを実感できる番組だった。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局